
イヤーエイカーズ・セル

柿ノ木コジロー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<https://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イヤーエイカーズ・セル

【Nコード】
N1475CQ

【作者名】
柿ノ木コジロー

【あらすじ】
高校に入る前の春休み、詩音は映画館の行列に割り込む女をみかけた。彼女は『セル会員カード』を示して悠々と中に入っていた。最初はぜんぜん興味をひかなかったその出来事だったのに……ふとしたきっかけからイヤーエイカーズセルクラブに入会してしまった詩音。耳にピアスをつけてから、彼女の人生は大きく狂っていく。

ささやかな幸せを得るために、莫大な代償を払うのは彼女だけで

はなかった。

巨大な企みの前に、みずからの大切なものを守ろうともがく人たちの物語。

以前いったんここで公開したものを公募に出した後、講評を元にいろいろと書き直して再公開しました。

これから話して聞かせること、全部ほんとうのことだよ。
耳の痛い話になるかもね。
でもちゃんと聴いて、最後まで

『絞る』ところを、見たことある？ ニンゲンを。

私はなかったよ、あの時まではね。
うっん、油じゃあない、似ているけど。実際には大豆とか菜種と
かギユツとやってるわけじゃなかった。かと言って、油絞られてお
説教、とかそんな例えばなしでもない。

まさしく、ニンゲンが搾り尽されるの。最後の一滴まで。文字通
り。

私たちはその場にいた。多くの人びとが搾り殺されるその巨大な
『ラボ』に。
何故、そんな事がって？

一つの問いかけが、運命を大きく狂わせるだなんて想像つくかな？
それこそ、大きな搾り機の中に否応なく突き落とされて、全てを
絞り尽されてしまう……

……私は考えたことすらなかった。

『セル』に出遭う、あの時まで。

「明日香ちゃん、もっと速く！」

ミホさんの声がワタシを引っ張り続ける。ワタシは更に走る。

大きな円筒状の壁のまわり、ずらりと並べられたカプセルを最初から順に辿りながら。

スタートからナンバー040か050くらいあたりで、思い出していたのはなぜか中学の修学旅行で行った三十三間堂だった。あれほど密集している訳ではない、どっちかと言うと、お上品に一列に並んでいる、という感じだ。

でもここに並んでいるのは仏像ではなく、カプセルに入った生身の人間なんだ。

急に目眩をおぼえて、カプセルの一つによるめいて手をついた。

中身は若い少女だった。

ワタシと同じくらいだろう。大きな目を見開いたまま、固まっている。

口が何か、形作った。タスケテ？

いやだ、見なければよかった。

「詩音！ どこと？」

隣を走るミホさんが耐えきれずに叫んだ。でも、その声は中に囚われている人たちには聞こえてはいないだろう。

それにしても、なぜこんなにも沢山の若い人たちが、『セル』に大切なものを与えてしまったのだろうか？

集中力が途切れる。

ミホさんがぐいっとひっぱって、はずみでまた走り出した。まずい、ワタシ、顔ぜんぜん確認できてない。あわてて意識を近い所に戻す。

次々と人柱の前をワタシたちは駆け抜けていった、070、071、まだまだだ。いつまでたっても終わりが無いような気持ちになる。向うから走ってくるだろうレイジにもまだまだ会えないだろう。前方からは足音ひとつ聞こえてこない。

もしかして、この並びはらせん状にずっと地底深く伸びているのではないのだろうか？

不安はすぐにミホさんに伝わってしまったらしい。

「どうしたの」

ミホさんの足も止まる。

カプセル内の人間以外、どこまでも二人きりになった。

「大丈夫？ 明日香ちゃん」

「この人たち……」

声がつつろに通路にこだました。

全部でどのくらい、いる……いや、あるんだろう？

ただ、絞られるためだけに。

怖い、これ以上奥に進めない。

「お集まりの皆さま」

急に、爽やかな男性の声天井から響く。

「出入口近く、中央バルコニー前にお集まりください」

壁に作りつけのスピーカーでもあるのか、声は妙に近く感じる。

「只今より、コア抽出を行います、至急、中央バルコニー前にお集まりください」

それでもワタシは、動けなかった。

ワタシもきつとじき捕まって、この中に閉じ込められる……全裸で。ケーブルやチューブに繋がれて、そして

全てを絞られ、吸い尽されるのだ。

時は迫っている。

『お名前』に溝呂木詩音、

『フリガナ』にミソログシオン、

と入力してからいくつか質問に答えた私は、最後の質問に手を止めた。

『あなたが一番大切なものは何ですか？

または

あなたが一番、大切な人は誰ですか？』

明るい画面の中に、質問の文字列が並んでいる。

その下には答えを待つ四角い枠。

ごていねいに右脇に『(全角40文字まで)』とある。

私が見ているのは、『イヤーエイカーズ・セルクラブ』のサイト。入会費無料、信じられないような特典がいっぱい、夢のような会員クラブのサイト入口に、ようやく立っているところだった。

やっているのは仮登録。入力内容自体は、住所に氏名、生年月日……とても簡単だ。

仮会員登録のおしまいの方でこの質問をみつけ、何度もなんども、その文字列を読み返す。

どうして会員登録しているかって？

きつかけはささいなこと……

あの日、雨の映画館前でみたあの一連の出来事だった。

長蛇の列、そこに突然割りこんできた人がいた。私のすぐ目の前で。

金髪の女だった。そして彼女が出したカードを見て、最初はしかめつらをしていた係員が急に態度を翻して、彼女にかけたことば。

「セル会員の方ですね……すみませんでした。どうぞ中に」

それだけだったら、ふうん、セル会員、なんだろう？ だけで済んだはずだ。

しかし

館内に吸い込まれる金髪女と一瞬目が合った。

どうしても忘れられない。

目の中に垣間見えた……あれは恐怖？ 憎悪？

いや、それだけだったら不快感しか覚えなかったはずだ。

私の表面的な感覚を一瞬突き抜けて心の奥底を震わせたほどの激しい……悦び。

それから、そあら先輩のこと。

一度しか会っていなかったのに、あまりにも強烈な会話だった。そして……私に触れたあの時の目。

あの黒く縁撮りされたような喜び感、映画館で見た女とそっくりな目つきを私は忘れられなかった、どうしても。

耳たぶに触れた、指先の熱い鋭さとともに。

イヤーエイクの、セルの秘密を、知りたい。

質問の答えを指先のキー上に探りながら、私はまず、映画館の一幕から順に思い返す。

じっくりと、釜の中で毒が煮えていくような丁寧さと慎重さを
もって。

ずっと楽しみにしていた映画。中学生生活最後の思い出に、って。卒業式は済んじゃったけど、三月いっぱいはまだ高校生料金じゃないよね、ラッキー！

そんな事を言い合っていたのにミホってば。私は何度目かのため息をつく。

繁華街の映画館、脇の外壁にそってずらりと並ぶ列の中ほどで、遠慮がちに傘をさし、ちらっとまた前をみる。前方にずらりと揃う傘の波がゆらゆらと前ばかり気にしているのが分る。

雨が降り出したのは想定内だったけど、まさかこんなに行列になるなんて。

確かに主演のアリシアソード、ヒットしてからの初主演映画だし、心おどる春休みだし、これ観てからランチにもいい時間だから混むかなあ、とは思ってはいたんだけど。

何が一番残念かって……ミホったら、インフルエンザにかかったやつさ。

治るのを待っていたら四月になってしまっ、料金が変わるのはいまだいいんだけど、四月に入るとすぐ、ミホはお家の用事でずっと出かけてしまっただって。

一緒に観に行けるチャンスはもう今日だけだったのに。

「ごめんね、シオン」

ミホは喉もやられたらしい、ガラガラ声で電話をよこした。

「シオンずつと楽しみにしてたのに……ねえ。でき、カミヤくんのストラップお土産に買ってきて！」

かすれ声のまま、ミホが悔しそうにそう言っていたけど、どうしようかな。

そんなこと思っても、結局買っていつてあげるんだろっけどね。

ミホはすらりと背が高い、いかにも健康的な子。

中学入学の時クラスと部活が一緒、三年間ずつと仲よしだった。

学校生活でも、テニス部でも、オフでもミホなしの生活は考えられない。

仲よし？ ううん、これぞ本当の親友というヤツだよ、つい傘の影でにやりとしてから、肝心のミホがここにいないのを思い出す。

ふう、とため息、もう何回目？

中学校生活最後の思い出に、最高の思い出になると思ったのに。

もしかしてミホ、アリシアソードにあんまり興味なくなっちゃったのかな？

カミヤくん神！ ってずつと騒いでたのに。

そんなことはないよね、と思い直して私は傘の柄をすっかりとつかみ直す。

ミホとはまた同じ学校になれたんだから、これからもずつと一緒に過ごせるよ、部活は演劇部に行きたい、って言ってたから別れちゃいそうだけど

……それとも私も、演劇部入ってみようかな？

ぼんやり考えことに浸りながら、ようやく建物の正面が見える角にたどり着いたその時

「！」

すぐ目の前にぐいっと誰かが割り込んだ。

金色のばさついた髪が一瞬目の前をよぎる。女性のようだ。

反射的に傘をよけて一歩下がった時、後ろに並んだ人に傘が当たってしまった。

私と同じ年くらい、こちらはカップルだった。地黒の男の子が目をぎよろつかせる。

「気をつけるよ」

すみません、と謝ろうとした時、影に隠れたように立っていた女の子がケータイの画面みながらつぶやくように言った。

「いいよ、ショータいはるな」

ショータと呼ばれた子は首をすくめる。

カップルというより主従関係みたい。女の子はよく通る声で続ける。

「それよか並ぶのめんどいね」

「アスカが見たいって言ったんだろ」

「先にゲーセン行こうよ！」

女の子がぱつと身を翻し、列から去った。「おい待ってくれよ」男の子もあわてて追う。

ほんの一瞬のことで、少女の顔すら見えなかった。

でもいいな、何となくあの自由さがうらやましい。

いつもちよこまかしている弟のレイジをふと目に浮かべる。

レイジもオサルみたいに身が軽いからな、あの子とカップルになったら面白いだろうな。2人はす早過ぎて目にもとまらなかったりして。

想像してみてもかすかに笑ってから、急に自分の置かれた場所を思い出し、また、ため息。

私も好きで見に来ているはずなのに、こんな列に縛られちゃってさ。

そつだ金髪割り込み女はどうしてる？ まだ近くにいたら文句を言ってみよう、ときよるきよる探してみる。

でも、もう彼女は列をつつ切ってちよつど切符売り場にたどり着いたところだった。

私以外にも数人が、彼女に横切られたり押されたりしたらしく、「なんだよ」とか言いながら睨みつけていた。

でも彼女はお構いなしの様子だった。

薄ら寒い陽気なのに肩が丸見えの白黒ツートンのカットTシャツ、膝上くらいのデニムパンツ、ピンヒールの足もとには細いチエーンのアंकレットがいくつも揺らめいている。高価そうな服装なのに、どこか下品に見える。それにつやのない金色のソバージュが軽薄なイメージだ。

「ちよつとお」

口調も、いかにも軽そうだった。

「係の人、いるう？ この回に入るんだけどお」

中からチケットをもぎっていた女性が慌てて飛んできた。

「すみません、列に順番に」

女はちよつと舌うちした、私にも聴こえたけど、係員は気づかなかったフリをした。

その女はそのまま去るのかと思い、列の人たちはそれとなく成り

行きを見守っている。

ところが、金髪女はおもむろにカードを出した。

ああいうのを『ドヤ顔』っていうのだろうか。小鼻が膨らんでいる。

黒っぽいそのカードを、係員は少しげんそうに眺めてから、急にぱっと顔を上げた。

「申し訳ありません、セル会員の方ですね、今キカイに通しますのです。すみませんでした、どうぞ中に」

その直後、何かに呼ばれたかのようにふり向いた女の視線が、私の目線と真っ向からぶつかった。

目が合った、ほんの一瞬。

勝ち誇ったように赤い唇を歪ませ、金髪女は係員に誘導されながら場内へと消えていった。

映画は最高だった。

映画館の外に出てみると、次の回を待つ列がすでに雨の中連なっているのがみえた。

その時唐突に、目の前の道路、少し先の交差点に救急車の姿をみた。風向きのせいかサイレンも急に聞こえ出し、本当にふいに目の前に現れた感じだった。

館内から数人が飛び出してくる。一人が叫んだ。

「すみません、わき道に救急車入ります、列の方そこ空けて下さい、早く！」

遅れて映画館から出てきた30代くらいの女性三人連れが、ふり向きながらひそひそ話しているのが耳に入った。

「怖かったわ、何あの倒れ方」「吐いただけじゃないの?」「血よ、あれ、血。すごかったわぁ、胃からよ、きつと」「まだ若そうな女の人だったよね、」「金髪だからってオバンかもよ」

あはは、と高い笑いが上がった。けど、すぐに周りの騒ぎに遠慮したように口をつぐんで、彼女たちはそそくさとどこかに去って行った。

金髪? すぐに映画館に割り込んできた女を思い出した、館内では彼女を見かけなかったが、まさかあの人か?

ちらつとそう思ったけど、大通りに出た時にはもうすっかりその出来事は頭から抜け落ちていた。

03 明日香が見なかったもの

ねえアスカ、見てよこれ、と隣の席に飛び込んできたヨシノが鼻先に新聞を突きつけた。

「アンタもこの日、映画行っただって？ ショータと」

「ええ？ 春休みの話、だよねそれ、何で知ってんの」

「ラインで言ってたもん今日アリシアの映画だー明日香に賭け負けてオゴリ、って」

翔太と映画に行ったのがヨシノには面白くないのだろうか？ 彼女は丸めた新聞をぐいぐいと押しつけようとする。ワタシはしかたなくその新聞を取り上げた。

四月も始まったばかり、第三中学三年一組の教室は、始業式が済んで朝の新鮮なざわめきに満ちている。

「それに賭けで勝ったんだし、いいじゃん別に」

第一、翔太なんて単なる幼なじみでしかないのに、それはヨシノも知ってるはずだ。

ちらつとヨシノを見たが、問題はそこではなかったようだ。

「その記事、早く読んでみなよ」

ヨシノが指を紙面に突きつけているので、読んでみた。

小さな簡単な記事、四月六日付け、昨日のものだった。

「……事件性はなく、また感染症の疑いも晴れたことで、シネマ・ウィングでは翌週からすべての館での上映を再開した。しかしただ

でさえ低迷している業績の……」

「おとといからやっと、上映再開だったんだってさ」

映画館内で上映終了直後、映画を観ていた女性が一名死亡、病死？ とある。

ヨシノが脇から補足する。

当初は暗がりの中でのおびただしい血だったため、誰かに刺されたのではと大騒ぎになったが、吐血による大量出血だったと少しして判明した。だが、今度は何かの恐ろしい感染症では？ と言いつ出した者がいてまたパニックになった。

なぜそんなに詳しいの？ と聞くとヨシノはやや自慢げに種明かしを始めた。

その日、偶然にもヨシノもその場にいたんだって。

次の回の上映を見ようと映画館脇に並んでいる時、その騒ぎに巻き込まれたのだそうだ。

「シヨータもびっくりしてたよ。アスカたち、その前の回見てたんでしょ？ その人もさ……」

ワタシは新聞を突き返した。

「ちよつと前の話じゃん？ それにうちらこの時、映画やめてゲーセンにしたもん」

ヨシノは大声をあげた。

「じゃ、あの後すごかったの知らないんだ」へー知らなかったんだね、アレ、ともったいつけているのでちよつとむつとしながらも聞いてみる。

「何が」

「アタシらさ、モロ見ちゃったんだあの女の人」

「え？」

ヨシノは自慢げにあごを上げた。

「ストレッチャで運ばれて行くの、ちょうど裏の出口に近い場所だったし、でさ、まだそんな時生きてたのよーその人、落ちないようにベルトで固定されてたけどね、すごかったのよ血が！ それもちょうど跳ね上がってベルトがぶちっと切れちゃってね、落ちそうになりながら、ものすごく吐いたのよ……血を」

行列はそれを見て悲鳴をあげ、散り散りになっただらしい。

ヨシノもどこまでまともに見ていたのか知らないが、更に見ていたようなことを付け足した。

「でね、その女の人の、血を吐きながら何だか分からないけど、ずっと『痛い、耳が痛い』ってうめいてたんだって……胸とかお腹とかなら分かるけどどうして耳なんだろうってみんな言ってるさ。ホント知らなかったの？ 何か知らないかなーって思って、驚愕の真相とか」

「知るわけないじゃん、戻ってなかったもん映画には」

その後の騒ぎなど、全く知らなかったし興味もなかった。

単なる病気なんでしょう？

交通事故だってもっと悲惨な現場はあるでしょうに。

それからすぐ始まった授業の後、もうすっかりワタシはその話を忘れてしまっていた。

高校生活は順調な滑り出しだった。
運のいい事にまたミホと同じクラスだった。

高校に入ってから仲よくなったルネという子をまじえ、机を寄せ
て今日もお弁当タイムが始まった。

担任の噂からお互いの中学時代についての面白話披露とか……ル
ネは聞き役が多かった、だいたいミホがまくしたて、私が相槌をう
ったり補足したり。

ミホと私とでルネに色んな逸話を披露して、ルネが「えー！」と
か「信じられない！」と目を丸くする、そんな感じかな。

ルネは入学以降にできた友だちで、隣町から通っている。緩くウ
エーブのかかった茶髪が肩にふんわりかかって、目鼻がまるで描い
たように愛らしい。

しかも、親の仕事の都合で隣町に転居して、せっかく転校した中
学をわずか1週間で卒業してしまったので、その学校にも口々に知
り合いがないんだそうだ。

高校入学当初は、愛くるしい顔を淋しげに伏せて教室にひとりで
ぼつんと座っていたのだけど、誰もが逆に遠慮して話しかけること
ができなかった。

そんな中、ミホがつかつかと寄っていった

「ねえコムカイさん、だよね？ 名前も見た目もハーフばいけどさ、
いちおう苗字が日本語だから日本語で話しかけていい？」

と、何だか訳の分ったような分らない問いかけをしたら、

「コツテコテの日本人よお、ワタシ」
大きな目を垂れ気味に細め、にこっと笑ってみせた。

見た目もメチャ可愛いんだけど、性格も優しい。まだまだ自分をアピールすることは少ないのだが、こうして一緒に話をしていてもミホの話同様、私の話もちゃんと聞いてくれる。

「ねえ」

今日も笑い過ぎてにじんだ涙を拭いて少し落ちついた時、私はふと思いで出した。

「こないださ、映画観に行った時にね……」

「あーゴメンこないだは！」

急にスットンキョウな叫び声を上げたミホに、ルネはくすりと笑いを洩らす。

私もつられて笑った、でも何となく胃の辺りにずしんときた。

(どうして今さえぎるの)

「結局あれからすぐBにもかかっちゃってさー」

いつもならば大好きなその張りのある声が、なぜか今日に限ってひどく耳障りだ。

「そんなこと珍しいよ、ってお医者さまにも言われてさー」

「ちよつと今どうでもいいよそれは」

つい言ってしまった一言に、その場はしん、と空白になった。

笑顔は浮かべたままだがミホの頬がわずかにこわばる。

「……どうでもいい？」

「あ「ごめん、どうでもよくないよね、ごめんと素直に私は謝った。」

二人の友情が長続きしている秘訣、それは陽気なミホの性格と、相手に細やかな気遣いを払う私とのバランスの良さだったかもしれない。

私がククヨしている時には、ミホが大げさとも言えるくらい励ましてくれたし、ミホが逆に落ち込んだ時には、私はさりげなく彼女の好きそうな曲をダウンロードして送ったり……。

だけど……どちらかというミホよりも、私の方がガマンしているかもしれない。今みたいに。大事なことを話そうとした時に遮られたのは私なのに、結局謝るのは私。

もういいや、とあきらめて他の話題に移ろうとした私に、ルネが優しく口を挟んだ。

「あの……シオンちゃん何か言いかけてた？ 映画の時に何か、つて」

みると、ふわふわの髪に囲まれた穏やかな笑顔が、私とミホとを交互に見ていた。

ミホも「そうそう。何なに？」とクリっとした目を向けてきた。胸のつかえが取れたみたい。私はすうっと息をついてから聞いてみた。

「あのね、『セル会員』って何だか知ってる？」

「はあ？ と口をあんぐり開けているミホ。」

「ルネも首をかしげている。」

「聞いたことないわ。何？ その会員」

そこで、私はあの日映画館で見たままのことを話して聞かせた。二人は興味深そうにじつと耳を傾けている。

やがて、はあ、とミホがため息をついて背を伸ばした。

「なにソレ！ かなりのセレブじゃないの？ きっと入会金とかス

ツゴク高いんだよ」

「映画館の株主とかなのかな？」ルネも宙をみつめながら考えている。

「とにかく結構お金がかかってるってカンジだよねー」

ミホは悪戯めいた目をこちらに向ける。

「じゃ、大丈夫じゃんシオンち、大富豪だから」

ぷっ、とつい吹き出した。昨日も、夕飯のおかずがサバの味噌煮だったのに、一切れを弟と半分こにされちゃったんだよー、ひどいでしょ？ とミホに愚痴ったばかりだった。

「そうそう、うちセレブだからもうとつくにセル会員だよお」

だよねー、と声に出して笑っていたミホ、急にがばっと立ち上がった。

「たいへんだぞよセレブの諸君、次、体育館！ 早く歯みがいてこようー！」

そうだった！ と立ちあがると、続いてルネも慌てて席を立った。

ふと、廊下からの視線を感じて脇に目をやる。

見たことのない女子が立っていた。

すらりと背が高く、ストレートの長髪に囲まれた色白の細面がこちらを向いていた、制服がしっくり馴染んだ感覚から二年か三年、上級生のようだ。

その人がじっと私を見ている。何か用事だろうか？

「あ」

声をかけようとした時、姿はさっと窓枠から離れる。長い髪が弧を描いた。

廊下に出た時には、すでに人影は廊下の曲がり角に消えていた。

「ちょっと」

急に昇降口の片隅でそう呼びとめられた。

私は眉に少しだけ力をこめて、ふり返った。

立っていたのは、先日廊下にいた、あの人だった。

襟元を見ると、2年の学年章がついている。

何か注意されるのかしら、とやや身構えたが、その人はどこか頼りなげに眼をさまよわせている。

「私……コバヤシって言うんだけど。アナタのお名前聞いていい？」

「あの」

私は足を軽く踏み替える。

部活の勧誘だろうか？ それとも、演劇部の人だろうか。演劇部はやっぱり性に合わないみたい、と少し前に廊下で大きな声で話していたのを聞かれていたのだろうか？

真剣に演劇を愛する先輩からの『お説教』かも？

辺りを軽く見渡したが、ちょうど誰も通りかからない。

グラウンドで走り回る野球部員の小さな姿が非現実的な背景となっている。

時空の隙間に落ち込んだような感覚だった。

「あの、ミソログ、です」

相手がかすかに眉を寄せたようなので言い直す。「ミゾロギ・シオンです」

相手は顔を上げた。なぜかこちらの目ではなく、右の耳たぶを、それから左の耳たぶを見つめた。そしてそのまま聞いた。

「セル・ネームはないの？」

「えっ？」

突然飛び込んできた単語に、思わず訊き直した。

「セル……ネーム？」

「て言うか、」

すっ、と白い手が伸びて、私の耳に軽くかぶった髪を跳ねのけて下から現れた耳たぶを軽くつまむ。

「な……？」

身じろぎもできず立ち尽くす。

細くて温かい指。彼女は耳をつまんでいた手をもう片方の耳たぶに移した。爪の先が柔らかい肉にわずかに食い込んだ。くい、と軽く押さえるような無遠慮なつまみ方をされて、なぜだかじん、と身体が熱くなる。

思わず「んふっ」と声が漏れた。

彼女の髪からだろうか、甘い花の香りがふわりとからみつく。

コバヤシと名乗った人はどこか遠くをみるように目線を外していた、長いまつ毛の中で、黒目がちの瞳を潤ませている、その目の艶めきに更に、私は息をのんだ。

あの目……

ぱっと手が離れ、私はついよろめく。

「て言うか、ごめんなさい」また彼女は謝った。

「カン違いしてた、貴女も会員なのかと思って」

「か、会員、つてセル会員のことですか」

まだ身体の内部なかが熱い、頬も紅潮しているに違いない、どきどきを隠せないまま、それでもようやく思い至った。

この先輩は、先日昼休みの私たちの会話をたまたま小耳に挟んだのだろう。

私はあわてて聞いてみた。

「すみません、セル会員のことご存知なんですか？ 先輩」

返事の代わりに、彼女は片方の髪を後ろにかき上げて耳をさらした。

耳？ いぶかしげに眺める私の手を今度はぐいとかんで引き寄せ、自分の耳たぶに触れさせる。

更に近くなった彼女の香りに息が止まりそう。でも、指の先に何かが当たったのに気づいた。

「何？」

指を離してみると、表側からは何も伺えなかったが、彼女がひっくり返してみせてくれた裏面に、直径2ミリにも満たないようなクリーム色の点がみえた。

「これが？」

コバヤシさんが耳を探ったのは、これを探していたのか。

「イヤーエイク」

彼女はさらっとそう言って、ようやく私の目をまっすぐに捉えた。

「会員でなかったのなら、本当にごめんね。でも」

そこから、少し言葉に詰まったように顔を横にそむけた。「あのね」

ようやくそう言って、コバヤシさんは急に咳こんだ。

「あの、大丈夫、ですか？」

「うん」

まだ口もを押さえたまま、彼女は苦しげに後を続けた。

「登録はカンタン、でもね」更に咳がひどくなる。

大丈夫ですか？ と私はうずくまりそうになったその背中をさするしかできない。

「あの、先輩、大丈夫ですか？ 誰か呼んで来ますか？」

涙のいっぱい溜った瞳をようやく上げて、

「み、ミズロギさん」

コバヤシさんは発作の合間にようやく言葉を継いだ。

「……たいせつな……もの」

「えっ、何ですか？」

「……に関わると」

それ以上は押し寄せるような咳の発作に、彼女は声も出せずにその場に崩れ落ちる。

今度こそ迷わずに「先生！」私は保健室へと駆けていった。

養護の塚田先生を呼んできた時には、すでにコバヤシさんは立ち上がって、白いハンカチで涙を拭いていた。

発作はすっかり収まったらしい、心配する先生に

「ひとりで帰れますから」

と涼しい顔で言ってから軽く会釈すると、カバンを取り上げ、靴を穿く。

最後にかすかに、私の方に余分に目線を止めたような気がした。

「何でもなくてよかったわねえ」

塚田先生は一言明るくそう言い残し、保健室に帰っていく。

それも見送ってから、私は彼女の靴箱にさりげなく目を留めた。

23HRの列、『小林想亜羅』と書いてある。

コバヤシ・ソアラ、そあら先輩……私は口の中で繰り返した。

なぜか急に、頬がかあつと熱くなる。私は両手のひらで顔をはさんだ。

耳たぶにはまだ、生々しい爪の感覚が残っている。痛いのではない、むしろ痒いような、心の奥底をざわつかせる感覚。

黒い瞳の濡れ色が鮮やかによみがえり、耳と同時に胸にずきんと痛みが走った。

つい、つま先立ちになる。背筋を温めの快感が駆け下り、私は軽く身をよじった。

……どうしちゃったんだろう？ あの人の目ばかり、思い出してし

まっ。

遠くで急に調子外れのプラスバンドが鳴り出した。私ははっと我に返る。

夢がさめたように、頬を強くこすってから自分のリュックを持ち上げた。

家に帰りリュックを開ける時、脇のネットポケットに小さな紙片が入っているのに気づいた。

2L版よりやや大きめの上質紙が4つ折りになっていた。

広げてみると、簡素なプリントアウトの文字列が並んでいる。

「？」

少し滲んだ字体で一行、こうあった。

『あなたは私たちの大切な』

その後は水滴がついてしまったのか完全に読めなくなっている。ほんの二、三文字のようなのに。

続いて、ホームページらしいアドレス。

「……………なんだろう」

そあら先輩が入れてよこしたのだろうか？ まさか。彼女がリュックに近づいた様子は特になかった。

それに、メモについて何も言っていなかったし。

どこかで何気なく受け取った紙きれを、無意識のうちにここに入れただけなのだろうか？

そあら先輩がくれたんだといいな、かすかにそんなことを思ってしまった。

少し目線をさまよわせるとすぐに、あの顔が浮かんでくる。

お人形みたいな前髪とその下の切れ長の目。美しい目。深く暗く

……

まただ、何だろう？ 惚れちゃったのかなあ。

一人で可笑しくなった。くすくす笑いが止まらず、慌てて咳払いでごまかす。

それから、机に並んだ教科書と参考書との間に伸ばした紙を挟んだ。上の角が斜めにちよつとだけのぞいていたのを直そうと手を伸ばしたが

「姉き！ 先に風呂入るぞー」

弟のレイジが階下で叫んだのに

「だめ！ 私が先だからね」

慌てて答え、部屋を飛び出した。それから部屋に戻った時にはすっかり紙切れのことは忘れていた。

翌日、私は少しだけ朝早く学校に行つて、23のクラスを覗いてみた。

学校についている生徒はまだ、数えるほどしかいない。私は何となく階段の近くに佇んだままそあら先輩がいつ来るのか、姿がみられるのかを待っていた。

結局その日、彼女は姿を見せなかった。

胸の中に、ほんの小さな穴が開いて、そこをひゅう、と冷たい風が抜けたようなわびしさに、気づかないうちに私は唇を噛んでいた。

私は毎朝、そあら先輩が来ているか確認するようになっていた。彼女はずっと休んでいるようだった。

勇気を出して、塚田先生にも聞いてみた、でも

「体調を崩して休みます、とおうちから電話で連絡が来たきりよ」
そんな簡単な返事しかもらえなかった。

「喘息だと、入院する人もいるんだよね」

ルネは他人事とは言え、かなり心配そうに眉を寄せている。

「でもさ、その先輩も何だっけ、なに会員？」

ミホが屈託のない口調で続けた。ルネもすぐ思い出して

「セル会員、だよ。その会員だったの？」

と聞く。未歩は腕組みしたまま、うんうんとうなずいてみせる。

「かなりのセレブなんだよ、その人。きつと個人病院の個室で悠悠
自適ライフよ」

「……そうかなあ」

そあら先輩が言ったことが気になっていた。

「登録はカンタンだよ」と。

簡単というのは、きつとPCとかスマホで、ピピッと操作するだけ
のでできる、という意味だったのだろう。お金もかかるとはあまり
思えなかった。

急に、セルのことが気になり出した。

家に帰ったら、早速調べてみよう。

『セル』そして……彼女のことは思い出す。

「イヤーエイク」

そうだ、ピアスのことをそう呼んでいたんだった。

その日、夕飯も終わりお風呂も済ませ、今日のテレビは全て録画にしておいてから、私はいそいそとPCの前に陣取った。

学校からの帰り、実は何度もスマホに手が伸びかかったんだけど、どうにか夜まで我慢していたのだ。

「えっと、まずは『セル会員』は」

検索しても、びっくりするほど何も出てこない。映画館である威力をみたばかりなのに。

「あーあ」

私は大きく伸びをして、またPCに向き直る。片隅の時刻をみて「やば」

小さく叫んでしまう。

十時過ぎから検索にすでに四時間も費やしていたのに、まだ全然たどり着いてはいなかった。

日曜日の明日は、テニス部のお試しに行くつもりだったのに。

レギュラーになるためには入学してすぐ部活に挨拶に行つて、どんどん練習に参加した方がいいに決まっている。

でもテニス部にはまだ挨拶に行っていない。早く行かなきゃとずっと思っていたのに。すでに4月の中旬には、コートの際には何人もの新入生が球拾いをしている姿がみえて焦った。

それに山のような宿題も。

「やっと入れた学校なのに」またママに言われてしまう。

「ミホちゃんと同じ所に入りたい、ってあんなに受験勉強頑張ったのに、それは認めるけどね」

続く言葉は決まっている。

「入ったから、って安心してたらアンタみたいな子はすぐに置いて行かれちゃうんだからね、ちゃんと勉強しなさいよ。大学に行きたくても私立なんかににはやれませんかからね」

勉強していないわけではない、それなりに頑張っている、いつもいつも。

ただ気になることは放っておけないだけだ。

ぎゅっと目をつぶって頭から雑念を振りはらう。

そう、今はとにかくこれ一本に集中しよう。

ふと頭を上げた時、目の前に並んだ教科書が目に入った。白い紙片の端がのぞく。

あっ、と思い立って紙を引き出した。

このアドレスを試してみようと思っていたんだ。

入力して、リターン。

「やったあ！」サイトのトップページについて大声で叫びそうになり、慌てて口を押さえる。

『イヤーエイカーズ』

あなたは私たちの大切なセル

あなたにとつて大切なものは何？

イヤーエイクでその答えをみつけましょう』

ほら、やっぱり私だってやればできるじゃない？ ひとりでも。

たどり着いた喜びでついニヤついてしまう。何だ、あの紙はやっぱりそあら先輩がくれたのかな？

「みんなで幸せ探し！」みたいな宗教とかそんな団体なのだろうか。

でもサイトは可愛い感じだ。

あの目。

じつと、そのパステルカラーのサイトを見つめる。

違う、何かが違う。

サイトの爽やかな感覚と、映画館の前の女、そして先輩の目の暗さとのあまりの相違。

いや、暗いというのとは少し違う。うしろめたさ、というのか何かを隠し持っているうしろ暗さというのか。

「どうしょ……」

すぐ思いついた、ミホに相談してみようか？

さすがにもう起きていないだろうか、でもラインくらいはしてもいいよね？

すぐにスマホを取り出す。ミホ、そしてルネにもついでに話してみよう。二人のアイコンを確認した。

しかし、アイコンの三毛猫とポメラニアンのイラストを見た瞬間、スマホを放り投げた。

駄目だ。

何故だろう、この二人に話してはいけない、そんな気持ちが膨れ上がるマグマのように急激に押し寄せてくる。

これは私だけの……秘密。

唐突にミホの声が蘇る。「どうでもいい？」

あの言い方、何だかとても冷たかった、感情を込めない平板な発

声。

まるでいつものミホと全然違う、そう、シオン、アタシに従うのは当然じゃないの？ という感じの。束の間、本性を垣間見たのだろうか？

もしかして演劇部に入りたくない、と言ったのを面白く感じていないのでは？

シオン、遠慮しなくていいよ、テニスいいじゃん、頑張つてよ！ 試合出るようになったら観に行くからね！ そうはしゃいだ声で肩をぽん、と叩いてくれたミホ。

試合出るようになったら……

よく考えるとこの言い方もヘン。この学校のテニス部、男女ともレベルの高いの、知っているくせに。皮肉だったんだらうか。疑い出すとキリがない。

それにルネ、彼女もよく分らない。

いつもニコニコと相槌をうつて人の話を聞いてくれる、でも、本当にそれだけで気が済んでいるの？ あんなに可愛い子が私たちの嫌いおしゃべりをただ単純に楽しんでくれてるなんて、本気で信じられる？

表面的には、もっとミホやルネたちと色々楽しみたい、何でも共有したいと感じている。

でも、何でもかんでも相談してしまつていいの？

あんな目つきをさせる何かを、軽々しく共有していいんだらうか？ どうせ表面だけのつき合いになるかもしれない人たちに。

そつだ、そあら先輩にもっと色々聞いてみたらどうだらう？ 何と言つても当事者だし……

それにあの耳たぶを掴まれたときの、痺れるような気持ち。黒く長いまつ毛の下に濡れたような煌めきを隠していた瞳。でも、あれから学校には来ていないし、自宅もどこか分らない。

これは……そう、まず自分で調べて、もう少し深く知ってからにしよう、友だちに打ち明けるのは。それからでも遅くはない。怪しいと思ったら、いつでも引き返せばいいんだしね。

そうして、私はひとりで先に進んだ。

思った通りだ。

『あなたも会員に！ 登録はかんたん、無料です』

とあった。

そして肝心なことも書いてある。

『セル会員特典・入会時に10ポイント進呈』

ポイント、ということはやはりお金が関係するのだろうか？ と
りあえず先を読む。

『全国のどんなアトラクション施設にいつでも優先入場』

これが、いつかの女がやってみせたことなのだろうか。『どんな
アトラクション施設』というのが漠然としているがとりあえず続き
を読んでいく。

『全国有名チェーン店でのお食事・お買い物時に常に30パーセン
トOFF……』

信じられないような特典が並んでいる。

他にも、JRや各種私鉄、国内航空運賃についても指定席優先予
約、料金割引があるし、特にびっくりしたのが、

『各種興行・イベントチケットの優先予約』ともある。

そのページの端にペーパーミントグリーンの検索コーナーがついていた。

イベント参加、施設使用のチケットが実際に取れるかどうか調べられる、と書いてある。

嘘だろうと疑いながらも、かすかに震える指で

『アジアソードのビッグ・ライブ』

と入力してクリック。

数秒もたたないうちに別ウィンドウが開く。私はまじまじと見つめた。

一覧表だった、東京、大阪、札幌、名古屋、福岡……

ほとんどすべての日程に『可』とある。しかも、アリーナ席五席目までとかステージ前三列目までとか、さらりと書かれている。

確かに、よくありがちな注意事項はここにもあった。例えばこんなふうに。

『イベントチケットの優先予約につきましては、最低三日前までにセル専用コールセンターにご連絡ください』

開催三日前でも予約ができるの？ 信じられない。

ファンクラブの優先販売を使ってさえコンサートとなれば発売と同時に売り切れとなってしまう。

それが、無料会員登録するだけでできるようになるなんて。

「ホントに、本当に無料登録？」画面を追う指がふるえる。

会の概要という部分には、こうあった。

私たちは『イヤーエイカーズ・セル』

会員の皆様ひとりひとりを大切な『セル（仲間）』とみなします。ひとりの幸せが、私たちの幸せ、私たちの幸せは、ひとりの幸せへとつながります。

一人ひとりが『イヤーエイク』の力で『セル』としてつながり、それぞれの幸せを分かち合いましょ。

待ち時間なく快適な乗り物で移動し、遊園地でもイライラすることなくたっぷりと遊び、楽しみにしていたコンサートを心ゆくまで楽しみ、欲しい時に欲しいものを手に入れていつでも美味しいものに舌つづみをうつ。

人生を思いのまま、堪能してください。それをお手伝いするのが私たちの使命です

自分が楽しむだけで、どうしてそれが全体の幸せにつながるのか、がさっぱり理解できない。

それでも、まるで豪華な砂糖菓子のお城を目の前にしたようなワクワク感だけは伝わってくる。

「まあ……いいか」

そあら先輩に、私も会員になったんですよ！ と駆けよっていく自分の姿が目に見えかぶ。

ほら、見て下さいこの耳、私も。

「そう言えば……」ピアスの説明がなかったのに気づいた。それと、登録時に10ポイント特別に進呈って何だろう？

説明は特に他にない。スクロールダウンして行って、『次ページへ』というアイコンをクリックするともう会員情報の入力画面となった。

もう一回確認してみよう、と『戻る』をクリックした。

「あれ」
「反応がない。」

焦ってもう一度『戻る』を押した。

画面は動かない。

さらに焦って何度か同じボタンをクリックしてしまう。

画面が暗くなった。警告ウィンドウが開いている。

『システムが不安定になっています。しばらくお待ちください』

「どうしよう」

私は機械にうとい。つい、両手を浮かせてPCから身を離してしまった。

このまま動かなくなったら、それもそうだがようやくここまで辿りついていながら、登録の機会を逸してしまうことになれば。

ドキドキしながら待つこと数秒、ぱっ、と画面は元のサイトトップに戻った。

「よかったあ」

すでにじっくり読みこんであるのでそのページを見直すこともせず、次画面に進む。

また入力画面に戻れた。

今度は迷うことなく、頭から必要事項を埋めていった。

まずは住所、氏名、生年月日、性別、電話あるいは携帯番号……簡単な入力が続く。とにかく、機械的に空き項目を埋めていった。最後のさいごに、この質問があった。

『あなたが一番大切なものは何ですか？
もしくは

あなたが一番、大切な人は誰ですか？』

まともに答えるべきかどうか、指が止まった。特にない、と書いてしまおうか。よし。

『特になし』

エンターキー。しかし

『その回答は無効です』
赤い警告文字が出た。

じつとそのままの姿勢で考える。

大切な人、それは一杯いる。パパ、ママ、弟のレイジ、友達のミホ、近ごろ友情街道にて人気赤マル急上昇中のルネ。福井のおばあちゃん、従姉妹のカズサ。

でも、どれも何となくしっくりこない。

いつそのこと、ぬいぐるみにしてみようかな？

幼稚園の頃買ってもらったモフモフなわんこのぬいぐるみ。『よのすけ』と名付けてずっと大切にしている。ふり向いてベッドサイドを見ると、いつものようによのすけがちょっと情けない八の字眉毛でこちらをみていた。

その目つきにきゅん、となって、つい空欄に『ぬいぐるみのよのすけ』と入力してみた。

エンターキーを押そうとして、思い直す。

何か幼稚かなあ？ それに……
物にこだわることば、ないんだよね？

『大切なものは何ですか？』

形にならないものは、どうだろう？ 色々と頭に浮かべる。

浮かんでくる事からは、充実した中学校生活のさまざまなシーンだった。

試験の前には塾で猛勉強した、夏休みには学習センターに行つたミホやハルカたちとジュース飲みまくってガリ勉強したし、息抜きには市民プールに行つてミホとはしゃぎまくって監視員に叱られた。部活でも、ダブルスで中学最後の県大会でベスト8にまで勝ち残つた。

どれもこれも大切な思い出。そしてそこにはいつも、かけがえのない友人がいた。

やっぱり、私にはミホが必要なんだ。

いったん『親友の未歩』と入力して、更に思いをはせる。

大切なのはミホ自身ではない。もしかしたら彼女は私のこと、たいてい重要には思っていないのかも知れない。聞くのは怖い、でも、近ごろの様子をみているとそんな気もするし。

大切なのは、そう……私は入力画面に文字を追加する。

『親友の未歩と過ごした中学三年間の思い出』

エンターキーを押す。

今度は、すんなりと通つた。一拍置いた後に画面に文字が現れた。

『登録完了しました。ありがとうございます。
仮登録につきましては、メールにて確認内容をお送りします。
本登録には、更に追加の手続きがあります。ご案内を順次お送り
しますので、いましばらくお待ちください』

いつの間にか、息を詰めていたらしい。

「はあああっ」

つい、長々と息を吐いた。

やっと眠れる、それしか感じなかった。

いつも変わらない朝。

教室に入ると広がっている、いつもと同じ光景。

「おはよう」

「おーっす」

「今日サツカ遅刻だつて」

「いつもじゃん」「ねー英語の宿題やってきた？」

夏服の白い波の合間から、ルネが、おずおずと笑いかけてきた。

「おはよう、シオン」

ルネとそれからちょっと話しながら、手が何気なく自分の左耳たぶに触れてしまう、耳の裏には、控えめにかちりと『イヤーエイク』が装着されていて、それが固いケシ粒のように指の先に当たる。

いろいろあった、これを付けてから。

パソコンからの仮登録をした翌々日。

届いた包みは小さな段ボール箱だった。

大きさはA4の封筒程度で、厚さは3センチくらい。可愛いピンクの送付書がついている。

すぐにご開封、内容をご確認下さい、とあったので私はママにみつからないよう急いで部屋に持ち込み、逸る気持ちをおさえながら封を開けた。

中身は、白い発砲スチロールの側面が見えるボール紙の箱、折り畳まれた説明書、白い真新しい、厚手の封筒が一枚、それだけだった。

ボール紙の筒になったケース外側から中を引き出すと、薄い発砲スチロールの型で包まれたものがひとつ。

「ホチキス……？」

一見、大きさも形も、スリムな文房具のような器具がきつちりと収まっていた。

全体は白い樹脂製で、ホチキスというより少し幅の広いピンセットのようにも見える。

ふたつの先端は直径1センチかそこらの平らな円盤状になっていて、内側は何となく光っている。光に透かしてみると、何だか複雑な回路のような模様が見えた。

先端から元に伸びて折り返しているあたりは手に収まる程度のグリップになっていて、赤いシールが張ってあった。見ると

『注意！ 使用するまで先端を合わせない、ボタンを押さないでく

ださい』

と書いてある。

よく見たらグリップには小さな赤いスイッチのような押しボタンがひとつ、ついていた。

まず説明書をよく読もう、と添付の紙を拡げてみる。

『イヤ―エイクの装着方法』と書かれた、図解入りの説明があった。

装着は簡単ワンタッチ、痛みも圧迫感もありません、と可愛いイラストと共に爽やかに述べられている。

「なにになに？」 続きを読む。

『丸い円盤状の先端を少し広げるようにして、どちらかの耳たぶを挟みこみます、赤い文字で『表』と書いてある方を前面（耳の表側）にしてください。』

耳の厚みは特に問いませんが、厚過ぎて挟めない場合には、耳の上側か、鼻腔など、ふつうにピアスが可能な場所を選んでください。

どこにも挟めない場合には使用を中止して、コールセンターにご連絡ください』。

どうも表裏とあったのは、裏側にやや痕が残るせいらしい。

そこで初めて、そあら先輩の耳たぶを思い出した。

そうだ、確かぼつりとけし粒くらいの痕があった。

本当に、痛くないのだろうか？

そう思った時には器具で耳たぶを挟んでいた。

ええと、それから、と片手で耳たぶを器具に挟んだまま左手で説明書をたどる。

『位置が固定されたら、器具を動かさないように赤いスイッチを押して2秒待ちます。』

ここにも

『痛みは全くありません、まれに感受性の鋭い方にぴりぴりと刺激を感じる場合がありますが、人体には全く影響がありませんのでご安心ください』

とあった。

目をつぶり、ごくりとつばを飲んでからスイッチを押した。

すぐには何も感じなかった、でも、一拍おいて

静電気のようなばちん、という音と共に耳に鋭い刺激が走った。

「いたっ！」

嘘ばかり、かなり痛い。涙をにじんできた。

耳たぶがジンジンしていた。やり方を間違えたのだろうか。

涙のにじむ目のまま、キティちゃんの手鏡を耳のところにかざして、首をかしげるように覗いてみる。

耳をひっくり返してみたが、それほどハッキリと目立つ痕はない。血も、もちろん一滴も出ていなかった。

痛みは急速に遠のいていった。悪い夢が醒めるのよりも早いスピードで。

「……何だったんだろ？」

説明書には、やや大きな文字で更に追記があった。

『イヤーエイカーパンチャー』は全て未使用品をお送りしてお

りますが、確実なデータ管理のために使用済のものは必ずセンターに御返送ください。ケースに戻し、添付の返信用封筒にて御返送ください。切手は不要です。御返送がない場合は本登録は完了となりません。

つまり、このヘンテコな器具を送り返したのを確認してから、あちらは私たちを『正式なメンバー』として認めてくれるらしい。

もう耳まで痛めてしまったんだし、何を恐れる必要があるんだろう？

器具を小箱に戻して、返信用封筒にそれを入れてきっちり封をとめた。

翌朝の土曜日、郵便ポストに封筒を投函してから私はそっと、耳を触ってみた。

表側からは手が触れても全然何の感触もない。裏も、やや凹んでいるかな、という程度だった。しこりもない。

これなら家でも学校でもばれないだろう。弾む心で家に帰る。

翌日曜、休日だというのに早速メールが入っていた。『セル・センター』からの確認メールだった。

『おめでとうございます、本登録が完了しました』

おめでとう、という文字って、目がぱっちりした可愛い少女に見つめているような字並びに見える。

そあら先輩……いや、『おめ』だと無邪気なぱっちり目みただから、どちらかというトルネの目かな？

なぜか、ルネにわあ、よかったね！ と両手をつかまれてぶんぶんフリ回すように祝福されているところを想像してしまった。そして脇でミホが拍手してる。

また私、変なこと考えている。ルネはぜんぜん関係ないのに。それにミホだって。

……でも、少し落ちついたらこっそり打ち明けてみようか。ミホとよかったらルネにも。

仲間に入る？ って誘ってみても、いいかも。

ぞくりと何かが背中を伝わった。生温かい流れ。

イヤーエイクのついた耳たぶが一瞬ちくりと何かを告げた、その囁きはあまりにもかすかで、私は耳たぶを軽く押さえ、何も気づかないふりをした。

メールが送られてきたので、さっそくイヤーエイカーズ・セルのサイトにアクセスした。

『セル・ネーム』は、少し前に思いついていた『ライム』にした。自分の名前から連想した名前だった。カナで入力して、接続の間を待つ。

こんな簡単なネーム、重複登録者がいるんじゃないか？ と最初は心配したけど、特に問題はないようだった、ライムという名前はすぐに承認された。

サイトに「ライム」の名前とパスワードを入力してログイン、間もなく

『イヤーエイカーズ・セルにようこそ　ライムさん
あなたは私たちの大切なセル』

の文字が現れた。

登録者情報をじっくりと読んでみた。

基本情報のおしまい、『大切なもの』の欄、確かに

『未歩との中学三年間の思い出』

と入っていた。

すでに入力や変更のできる画面ではない、サイトの中にしっかりと書かれている

ポイントはなぜか60ポイントついている。入会特典の10ポイ

ントの他に50ポイント。

明細には単に『換算分』としかない。

「換算分？ 何だろ」

おいおい意味も分るようになるだろう、と深く考えずにスクロールダウンして、ついに、一番下にたどり着く。

大きな四角いアイコンが『セルからのお願い』の文字を光らせていた。

何の気なしにそのアイコンをクリックした。

『セルからのお願い』

あなたの『大切なもの』を私たちセルに寄付してください』

意味が掴めない。何度もその文字を読み返す。

「寄付して、ください……？」

更に先を読む。

さらつと書かれている内容にだんだんと背筋が冷たくなってきた。

『セルはみなさまの大切なものを守ります。そして、みなさまもセルの一員として大切なものを共有し、守り育てていかなばなりません。』

セルの一員として、ライムさんにも大切なものを寄付して頂く必要があります。まず……』

「何で……」

『大切なものの欄でお答えくださった内容の寄付をお願いいたします』

す
』

読んでいる途中で、急に目の前が真っ暗になる。頭の中で何かガンガンと鳴っていた、それは耳につけた『イヤーエイク』から発しているようにも思えた。

耳が痛い、ものすごく。最初に装着した時の何倍も痛む。

「何よこれ」

私は耳たぶをひっかいて、爪の先で裏にぼつりつついているピアスを掻き取るうとした。

「何これ、詐欺じゃん、何よこれ」

耳に圧着されたピアス、いや、イヤーエイクはすっかり皮膚の一部になってしまったようだ、触ってみると確かに固い何か当たると、皮膚には継ぎ目ひとつ見当たらず、もちろん爪にひっかかるものは皆無だった。

芯が思いのほか深い。指で耳たぶをぐりぐりと揉んでみるが、あんな単純な器具で押さえつけた割にはイヤーエイクはがっちりと私の日常に食い込んでしまっていた。

「何だよこれ！」

つい乱暴な口調になる。涙目のまま、画面を隅から隅までまた読んでみた。目が泳いでしまう。でも、ようやくこんな文字をみつけた。

『寄付の方法についてご不明な点がありましたら、セル・コールセ

ンターにお電話ください。それぞれのケースに応じたご寄付の具体的な対応方法を御相談させて頂きます（1ポイント使用）[Ⓔ]

すぐさま、コールセンターに電話を入れた。

ピアスの外し方、退会の方法を聞かなきゃ。
しかしコールセンターからの第一声はこれだった。

「イヤーエイクをいったん装着されますと、外すのは不可能なので
す」

相手の声は温かく同情的だった。でも、語られる内容に凍りついた。

「また、イヤーエイクが装着された状態では、セル会員からの退会
はできない、ご利用規約に明記されておりまして、それに同意さ
れているはずなのですが」

話を聞きながら、また耳がズキンと痛んだ。

私は反射的に電話を切ってしまった。

すぐに後悔し、またかけ直す。今度はなかなかつながらない。

これは罰が当たったに違いない、泣きそうな思いで何度も番号を
プッシュする。

ようやくまたコールセンターにつながった。

相手の声は先ほどと少し違う人物だったようで、ややハスキーな
感じではあったが、語り口の穏やかさは判で押したようだった。

延々と、退会ができない旨説明を受けながら、気づいたら私は声

に出して泣いていた。

相手もそれに気づいたらしく

「あの……ライムさま、だいじょうぶですか」
気遣うような声音だった。

「だって……」

つい泣きじゃくってしまっ。

「どうしたらいいのか、分かんなくなっちゃって」

「お察し申し上げます」

意外なくらい、同情的。そしてそのハスキーな女声はこう続ける。

「どうでしょうか、大切なものをいったん、セルに預ける、というふうにお考えになられては？」

「預ける？」

「そうですね、取り上げられる、と思うから悲しくなるのではないんでしょうか？」

「だって、取り上げようとしてるんでしょ？」

そあら先輩のことばをまた思い出していた。

「大切なものは、ポイントに換算されるのです」

電話口の向うから忍耐強い説明口調が続く。

「アナタの大切なものを、より価値のあるポイントとしてまたご利用いただけるのですよ、しかも、大切なものを寄付されて私どもの活動をより活性化して頂き、それを更に会員の皆様の幸せのために還元して頂けるのですから非常に有意義な」

「……どうしてセルは個人の大切なものなんて集めるの？ ただ、人からダイジなものを取っていつて陰で笑っているだけじゃないの？」

「そんなことはございません」

声は真摯な響きをもってそう否定した。

「なぜみなさまに、イヤーエイクを装着して頂くか簡単にご説明さ

せて頂きます、サイトにも一応書かせていただいておりますが」

急に、何もかもバカらしくなってそのまま黙っていた。

相手はそれを同意のしるしと受け取ったようだ。少し早口になった声そのまま続けている。

私はぼんやりと聞き流していた。

「……それでは、ライムさまの大切なものについてですが、ご寄付の方法について御提案させていただきます……」

月曜は代休で、普段ならば一日休みが多くてラッキー、そうだが、ミホに電話してみようかな。

なんて考えてしまうようなのかなその日、私は独りで電車に揺られていた。

家から電車で2駅、そこに『セル・サテライトオフィス』があるとコールセンターで聞いていた。

着いた駅はそれほど大きくはない。

南口から出てすぐこじんまりしたターミナルを見渡してみる。

グーグルマップで調べた通り、そのまま駅の南に伸びる広い通りをしばらく海の方に向かって歩いていった。たいした建物もない。のどかな田舎町だ。

10分ほど歩いて間もなく、目当ての白いビルを左側に見ることができた。

四階建てのように作ってあるが、一番上の階は単に、屋上を高い壁が覆っているだけのようで、四角い穴にはガラスも嵌っていないかった。

看板には特に『セル』などの文字はない。ただ、三階の高さに『海上火災』と白地に黒い文字看板がひとつあるだけで、地味なオフィスビルという感じ。

建物のちょうど真ん中、大きなガラスの嵌ったドアを押しあけ、

そのまま階段を上がっていく。

案外新しいビルのようで、清潔感が漂っている、新車のシートがビニルで覆われたような、いかにもまだ手つかずですという匂いがしていた。

二階に着くと、オフィスのドアが左右にひとつずつ、左のドアに、小さく名刺大の紙が張ってあった。

紙には簡単に『イヤーエイク・セル 河西サテライト』とあった。

その文字を目にした時、また耳がズキンと痛んだ。

片耳をつまんだままもう片手でそっと、細いバー上のドアノブを押ししてみる。

ドアは最初、少しだけ手に抵抗を示し、急にすい、と内側に開いた。

思ったより中は広く、明るい光が窓から一杯にさしこんでいた。

白っぽい家具の中、観葉植物がバランスよく配置され、奥ではかっちりした制服に身を包んだ女性が一人、ちょうど電話を切ったところだった。

「こんにちは」

女性は顔を上げて自然にそう笑いかけ、もの問いたげに私を見つめた。

「あの」

私は口を半分開いたまま、入口の前に立ちすくむ。

どうしよう、何だか優しそうな人、事務の人なのだろうか？ この人にどこまで話していいんだろうか？ 責任者の方いらっしゃいますか？ って聞いた方がいいのかな。

「あの」

つい、また耳たぶに手をやっていた。その様子を見て、女性はあ
あ、と更に明るい表情になる。

「今朝お電話くださった、ライムさんですね」

「はあ」

「少しお待ち下さいね」

明るい口調のまま、片手でまた受話器を掴んだ。人差し指を伸ば
して2つばかりボタンをプッシュする、すぐに誰かが出たらしい、
彼女は

「ヒガキさん、ライムさんいらっしゃいました」

やはりこの女性は単なる事務員さんなんだ、いきなり退会します、
なんて話さなくてよかった、

ヒガキという人がここの責任者なのだろうか？

電話を切った事務員さんに、何となくおじぎをしてから、脇にあ
る大きな観葉植物の葉を何となくつついてみた。

隙間の多いうちわのような葉だった、何と言つ名前なのだろう、
ぼんやり考えていたら急に、

「思い出を寄付して頂けるとお聞きして」事務員さんの声に、私は
あわてて顔を上げた。

「は、はい」

「よかったです」

彼女はにっこりとほほ笑んだ。

何故だか分らないけど、入ってきた時と明らかに違ってみえた。
何が違うのか全然見当がつかない、しかし、何かが不安感を掻きた
てる、急に日が陰り、オフィスの中がひやりと暗くなった。温度ま
で下がったようだ、ぶるりと身震いが襲う。

事務の人は、影になって表情はよく解らない、確かにまだ笑っているようだ、しかし、声の温度まで数度下がってしまったような、温和そうな部分だけかき消え、平板な事実を告げる声音に変わっている。

「よかったです、ほんと。思い出だけで、『大切な人』とか登録してなくて」

頭を殴られたかのようなショックだった。

「なっ」ついよるめて脇の植物に手をついた。鉢がぐらりと傾いて表面の顆粒になった茶色い土が数粒、零れ落ちた。

「ああ、気をつけてくださいね」

事務員さんは心配そうな言い方で腰を浮かす。

「その鉢も、会員さんのご寄附なんです、独り暮らしのお婆さまだったんですが、温室一杯の観葉植物が宝物という方がいらっしまして」

あわてて幹から手を離し、おそるおそるあたりを見回してみた。

確かに、ふつうのオフィスよりも緑の割合がかなり多い、しかも植物園のように、あまり見たことのないような草木もいくつか見ることができた。どれもとても威勢がよくて、それだけ見ればこのオフィスがいかに快適な空間であるかという雰囲気を感じ出していた。しかし

「寄付……？」

「ええ」

事務員さんは少しだけ面を伏せた。

「その方は猫ちゃんを選ぶか植物を選ぶかかなりお悩みになってらっしゃいましたけど」

「あの……猫をもし選んだらどうなるんですか？ その猫は」
可笑しそうなクスクス笑いが聞こえる。

「さすがに、オフィスでは猫ちゃんは飼えませんからね」

「ですよね……」

事務員さんが続けてさらりと口にした、その言葉がにわかには信じられず、え？ と聞き返そうとした時ちょうど後ろのドアが勢いよく開いて、思わず飛び上がった。

「えと、」

白いワイシャツをびしりと着こなし、グレイのズボンが折り目正しい、かなり背の高い男性が風を巻き起こして中に入ってきた。

「アナタが、ライムさん？」

「あの……」ようやく声に出せた。「退会をしたいと思ってて」「何ですって」

「思い出を、寄付するなんてそんなこと……」

特にびっくりした訳でもなさそうだったが、それでもどنگり眼をぐり、と見開いてみせる。

しかしその目をすぐに細めて笑う。

「大丈夫ですよ」

電話でも何度か聞いた言葉だった。

「そんなに深刻に考えるものでもないですから。案外それについて思い出せなくても、何とか日常はつながっていくもんなですよ」

「あの……親友との思い出なんです」

「その方はもう亡くなってますか」

「いいえ」

真剣に見つめる男の目に、ついドギマギしてしまふ。

「中学の三年間の思い出と書いたんですけど、その親友とはまた、高校でも同じクラスで」

「なら全然問題ない」

妙に自信満々な言い方に、少しだけふり向いて事務員さんの方を見た。彼女はすでに、パソコンの入力に余念がないようで、こちらには少しも注意を払っていなかった。

「中学で上手くやってこられたような間柄ですから、思い出が無くなってもまた、新しくその子と友情をはぐくんで行けばいいんですから。大丈夫、きつとまた仲よくなれますよ、というか、中学の時

以上にもっと仲よくなれるでしょう」

「でしようか」

「中学で同級だったという記憶は残るはずですが、だからとりあえず話のきっかけは掴めますよ」

「相手がヘンだと思わないのかなあ」

「問い詰められたら、記憶がなくなつたと答えれば？　そういう方もいらつしゃいましたよ、熱が出て記憶があいまいになった、と相手の方に説明されていました……じゃ、行きましようか」

急に気分を切り替えたかのようにぱつと顔を上げたヒガキ、ドアを開けてふり向きながら声をかける。

「こちらのお部屋にどうぞ、ついて来てくださいね」

ドアを閉めようとした時、ちょうど顔を上げた事務員さんと目が合った。

彼女はにっこりと笑ってみせる、また日が射して、その顔を明るく照らした。

それだけで、笑顔は最初に見た時と同じく、とても無邪気にみえた。

同じ階の反対側のドアには印も何もなかった、ただ白いドア。

ヒガキがノックして開けると、ちょうど病院の診察室のような机と椅子とが目の前にみえた。

白衣の男がデスクにあるPC画面を見つめている。

「じゃあ後は」

とヒガキが去っていく音がした。

ドラマでみる精神科の診察室のように、白衣の男の前には長椅子があった。

「ライムさん、ですね」

白衣の男がこちらを見上げる。

大人しそうな目に柔和な光をたたえている。

先ほどのヒガキよりもまだ若そうだ、髭もなく、大学生といったも通りそうな感じ。

「そこにかけてください」

長椅子を指したので浅く横座りになった。

「あの、私」

思い出を捨てるつもりはありません、とハッキリ言ってやれる、この人ならば。

大きく息を吸い込む。

そうだ、やっぱりこれは間違っている、他人の思い出を勝手に取るうだなんて、ポイントが何よ。

「わたし」

しかし口をついて出たのは全然別のことばだった。

「……どうしたらいいんですか、今から」

気づいた時には

「ライムさん、終わりましたよ」

肩をゆすられていた。

ぼんやりした頭のまま、目を開いた。

白衣の男が手を差し伸べる。

「目眩がするかもしれないので、ゆっくり立ち上がってください」
手を借りて立ち上がり、そのまま部屋の外に出て行った。

すでにヒガキと名乗る男は姿が見えなかった。

向かいの部屋にもう一度寄るべきか迷ったのだが、向かいのドアからも何も音が聞こえない。

私は額を片手で押さえたまま、階段を降りていった。

ぼんやりした感じは急速に収まっていく。

はあ、と改めて大きく息をついた。

外の空気が甘く感じられる。少し立ち止まって空を見上げた。

何しに来ていたんだろう？ そう、寄付の仕方が分からなくて……
聞きに来たんだ。

何の寄付？

ええと、親友との……

親友って誰？

確か、今も同じクラスの人。

その人との、そう、思い出を寄付したの、預けたただけだね。

そう、その人はまだ同じクラスなんだから、またこれから改めて仲よくなればいいんだし、名前は……今はハッキリ思い出せないけど明日、学校に行ったら分るよね、きつと。

ビルの外は明るい日差しに満ちていた。

雲一つなく、先ほど中のオフィスで日が陰ったのが信じられないくらいのよい天気だった。

駅に着いた時、ふと、誰かの視線を感じた。

駅構内にある小さなカフェ、人影は店内カウンターに斜めに腰かけ、ウィンドウの向うからこちらに目をくれていたようだ。

若い男性、さらっとまっすぐな髪が斜めに額を横切り、肩に軽がかかっている、うつむきがちな姿勢から、目だけ上げてこちらに気づいたと言った感じだった。

どこかで会ったことある？

その人はさりげなく窓際から離れ、そのまま姿を消した。

少し待っても、店から出てくる様子はない。

何だか急に面倒くさくなって、どこで見かけたのか思い出せないまま、重い足取りで改札へと向かった。

『イヤーエイカーズ・セル会員様だけの春夏特別企画！ 一覧はこちら』

こんなエメラルドグリーンの大きな文字を見かけた私は、あまり興味もなかったけど何の気なしにクリックした。

だいたい、学校から帰ってくると習慣的にこのサイトをのぞいてみる。

けっこうマメに更新されているらしい。この文字も昨日までは無かったはずだ。

一覧には、心躍るようなイベントが盛りだくさん並べられていた。超一流のアーティストたちのステージが多い。今度来日する有名人たちの公演もある。音楽だけとつても、ポップス、ロック、ジャズ、クラシック、演歌まで……規模も様々、対象も年代的に幅広いようだ。

中にはよく分からないものもあった。ラボ見学、とか幹部養成講座、とか社会人向けかしら？ って内容。

でも、その中の一項目に私の目はくぎ付けになった。

『アリシアソード シークレットライブ&メンバーとディナー』

クリックした、もちろんすぐに。

メンバーの写真が並んでいる。カミヤくん推しなの、誰だっけ？
私はベースの大樹だいきが一番好き。
もちろん、ダイキのアップをしげしげと眺める。
私、そこまでディーブなファンじゃないけど、一応ファンクラブ
には入っている。それでもこんな写真は見たことなかった。
シークレット・ライブなんて聞いたこともなかったし。
しかも、ディナー？

驚いたことに、今週末だった。ちょうど予定がない。
急に動悸が激しくなる。

「新宿のクラブ・ロリンス……」
地図を検索した。新宿駅からほど近い。
うちからでも2時間はかからないだろう。

ライブの開始は土曜日の16時、定員は50名、その後抽選で3
人がメンバーの3人とほぼ一対一でディナーを、と書いてある。
「50人、それに3人なんて……無理」
つぶやきながらも、手は勝手に『応募する』をクリック。

だってチャンスよ？

画面に大きなくす玉のイラスト。ゆらゆら揺れて、だんだんと動
きが速くなる、そして

『当たり！ おめでとうございます』
紙吹雪と飛び出す白いハト、派手な赤い文字が躍る。

信じられない……詳細をクリックして分かったのは、とりあえず
ライブの50人には選ばれた、ってこと。

最後に小さく、「ごうあつた。

「このサービスを受けるにあたり、10ポイント必要ですがよろしいですか」

OKとNOのボタンが並んでいた。

もちろん、ためらわずにOKを押した。

地元の駅で電車に乗って、新幹線に乗り継いで、だんだんと目的地が近づいて来るその間、ずっとやましい気持ちが消えなかった。時々あたりを見回して、知り合いにばったり出会ってしまうことはないか、誰かに不審な目で見られていないか、気になってばかりだった。

家から離れていくにつれ、知っている顔に会うのでは、という心配は薄れてきたものの、膨れ上がる期待とともに不安もつのつてきた。

そんなに都合いい話ある？ 夢のような、信じられないことが。

彼らに、会えるなんて。

新幹線の窓に自分の顔が映っている。

今までと何も変わらない、目ばかり大きくていつまでも子どもっぽい顔。

ただ簡単な登録で会員になれて、普通では考えられないような恩恵が受けられ、抽選に当たっただけで、ずっと憧れていた夢に容易に手が届く。

あまりにもうまく行き過ぎている。

これが本当に、自分の人生なのかしら？

不安と期待は互いに激しい渦となって心の中でぶつかり合っている。どちらも大き過ぎて私は胸が苦しくなっていくのでみぞおちの

上あたりを強く押さえ、うつむいた。

「大丈夫？」

低い声にはつと顔を上げる。ちょうど通路を通りかかった年配の男性が心配そうにこちらを覗きこんでいた。

「だいじょうぶです」

軽く頭を下げ、すぐにスマホを出して画面を見るふりをした。

男性はすぐに去って行った。私は待ち受けに目をとめ、そのままじっと見つめる。

アリシアソードのダイキ、私のイチオシの彼が小さな画面から涼しげに笑いかけていた。

息を大きく吸って、ゆっくりと吐く。ダイキと会えるんだ、近い場所です。

夢なら夢でいい……私ができるのは一つ、楽しむだけだ。今を。

新宿、ライブハウス『ロリンズ』。

私はすっかり酔っていた。もちろん、そのライブそのものに。入口でカードをみせた時からそうだった。

「ハイ、ライム。アリシアソードのシークレットライブにようこそ」
迎えてくれたのは黒服のイケメン。明るい栗色の髪、前に一筋、鮮やかな金色が輝いている。笑顔もきらりと輝いていた。私もつられてようやく笑顔が出た。

中から漂う熱気と情熱的なBGMとが、一気に不安を吹き飛ばす。

ライブは最高だった。

私はダイキのすぐ目の前に立っていた。音が波になって身体中に襲いかかる、汗がとぶ。

50人の観客はずっと叫びつ放し、そして、揺れつ放し。

もちろん私も。頭の芯がしびれている。でも、どこかで冷静な声が「この観客は全部、イヤーエイクを付けてるんだろぅな」とつぶやいている。

そう、サイトにも書いてあった。

これはイヤーエイカース・セル会員だけの特別イベントなのだから。

ダイナーの抽選は、ライブの終わり頃に行われた。

「最初にご注意ください。ダイナーには20ポイントが必要です」
スタッフの女性の涼しげなアナウンスがライブの高揚感冷めやらぬ会場に響く。何人かは困ったようにうつむいていた。

すぐ脇にいた学生っぽい女性がつぶやいた。

「やば。アタシもう5ポイントしか残ってない……」

私は何ポイントだったっけ？

確か、初回到60ポイントもらっていた。一度コールセンターを使った時に1ポイント引かれ、今回のライブで10ポイント使った。だから49ポイントはあるはず、だいじょうぶ。ごくりと喉が鳴った。

「まずはマサのパートナーから発表です！」

驚いた、本当に一対一なんだ。マサは照れたように頭を掻いている。ドラムロールが響く。

「発表します。セルネーム・シルバーバレットさん」後ろの方でぎゃーっという悲鳴のような叫びがあがる。「うっそ、うそでしょ？」

いかにもぱつとしない小太りの女性。髪もボサボサだし、眼鏡は

度がきつそう。そして、今にも失神しそうだった。

それでもマサは嬉しそうにぺこりとおじぎ。「よろしく願いますー」

次は、ダイキ。彼は全然顔色を変えず、ベースを抱えたまま立っている。

「発表します。セルネーム・ライムさん」

最初のうちは聞き流していた。

だって、自分が本当に選ばれるなんて思ってもいなかったから。何人かの熱烈なファンが「やだーっ」と叫んでいる。

カミヤくんの時はもつとすごい騒ぎだった。選ばれたセルネーム・チャッピー012という子は私と同じ年くらい？ その子は真っ赤になって、真っ青になって、それから本当に気を失ってしまった。

ラスト、アンコール曲が鳴り響く間も、私はぼおつとしていた。

さっき、本当に呼ばれたのは私？

全然、信じられない。やっぱり夢だよな？

でも、ライブ終了後に黒服にそつと腕をつかまれて、私は夢じゃないことを知らされた。

駅にほど近い、大きなビルの最上階にあるイタリアン・レストランに私たちはいた。

ふだん私なんかが入れるような場所ではない。

奥まった個室には大きな丸テーブル、そこには席が六つ。二つずつやや近づき合っている。

私の左隣には、本当に、ほんとうにダイキが座っていた。

テレビでよく見かける、はにかんだような笑顔、コーラスでよく通る低音もそのまんま、うつむいてから少し上目で見つめるその様子、そして、腕を動かすたびに香る柑橘系の爽やかな、でもどこかほんの少しだけ感じる野生の香り。ほんの、ほんの少しだけ。

私の方を向いて話しかけてくれる時には、彼の息を感じる。涼しくてかすかに甘い息を。

六人で語り合う時には、主にカミヤくんがしゃべっている。

人を逸らさない語り口、どこか天然とも言えるボケ具合。そこに突っ込むのはマサさん。カミヤくんとマサさんの二人のパートナーはずっとうつとりと相手を眺めている。せつかくのお料理にもほとんど手がつけられていない。

「オードブル、だっけ？ エビかなこれ。冷めちゃうよ、早く喰っちゃまおうよ」

「あのねえ」マサさんがあきれたように答える。

「もとから冷めてんだよ、だから冷菜っていうんだ。オマエ何歳？」

「レイ歳」 「つまんねー！」

カミヤくんとマサさんの他愛ない会話に場の空気が和む。

だんだんと打ち解けるにつれ、私たちも自分の話を始める。

眼鏡の人はOL、いつもは特に派手な暮らしをしているわけではないが、セル会員のポイントはいつも有効に使っているという。国内の秘湯めぐりが大好きらしい。

マサさんは、えーいいいなあ、ボクにもいい場所教えてよ、とすっかりくつろいだ口調で相槌をうつている。今度一緒に行かない？ いい？ もちろん彼女はもう有頂天だった。

私たちの浮ついた気分、彼らはうまく話を合わせてくれた。だよねー、最初はテレビ出てる人とか実際みると、えっ！？とか思うよねー、とカミヤくんが笑う。

「オレなんか、今でも歌番録りに行った時とかスタジオでキンヤさんとかマーブルズとか見かけると、『あつ、有名人だ！』ってすげーテンションあがっちゃうもん」

マサさんもさらりとそんな事言っている。

そういうノリなの？ というくらい、すでに私たちは前からの友人みたいな話をしていた。

カミヤくんの相手は思った通り私と同年、高校一年だった。話し始めると止まらない。

「誰が特に好き、ってのはなかったんですけど」紅潮した頬で叫ぶように話している。

「今日から、カミヤさんイチオシです！ あつ」思わず口を押さえている。

「もちろん、もちろんマサさんもダイキさんも素敵ですっ」

ははは、と温かい笑いが起こる。

「マサさんも素敵です、だけ切り取って額に飾っとく。もう一回言つて」マサさんの言葉にまた笑いが広がる。

私は笑いながらそつとダイキの方をみる。

あとの四人がたまたま何か他の話で盛り上がっている時、彼がさ

りげなく訊いてきた。

「ここ終わってからちよつと……お茶してかない？ 二人きりで、あのさ」

私は答えられない。もう全てが止まっている。時間すら。

「何だか……もつとゆっくり話聞きたいかな、ってさ。ホントお茶だけで。帰り遅くなっても悪いし……1時間くらいとか、あの」

「う」声がうわずっていた。「嬉しいです」

ダイキが笑った。屈託のない笑い。

「よかった。それにさ、敬語やめてくんない？」

「は……うん」ダイキの手がさりげなく私の髪に触れ、すぐに離れた。

ダイキは外に出る時、太い黒ぶちの眼鏡をかけ、黒い野球帽で明るい金髪をすっぽりと覆いかくした。服装もステージと違ってふつうのTシャツに青いジーンズ。どこにでもいそうな青年に変わる。

目だけはやはりその辺の人と違う、光線を発しているような力強さ。ガリベンくんみたいな真面目な顔をして、それでも強い光を含んだ目線を私にだけ向けて

「近くのホテルの喫茶コーナー、ケーキうまいんだ」

すっと手を伸ばす。反射的にその手をとった。

あとのメンバーもそれぞれ、違う方向に消えていった。でも私にはもう何も構わなかった。ただ、ダイキだけが私の横にいる。しかも、ぴたりと寄り添うように。

大きなホテルの前に着いた時、ダイキが正面をみたまま、こう言った。

「ライム、ちよつと休んでいかない？」

休憩とかするようにつくりではない。外国人観光客も多く出入りするような、回転ドアの向こうにシャンデリアが輝いているような立派なホテルだ。

全く予想していなかったわけではないが、抱かれていた肩がぴくりとなった。

ダイキは私の肩から腕だけ上げて、そっと、耳たぶに触れた
イヤーエイクの上から。

温かい指先に力が入り、熱が身体中に流れ込んだ。私の下腹部がじん、と熱を帯びる。

「あ……うん」

つい、声が漏れる。耳が焼けるようだ。とろけるような快感に私は膝を寄せ、少しつま先立ちになった。よろめいて彼にしなだれかかると、近づいた耳に彼が息だけで囁いた。

「いいよね」

「……帰らなくちゃ」

「だいじょうぶ、実はここにもう部屋をとってあるんだ。それに、電車には間に合うようにするから」

何時の終電に乗らないと帰れないんです、という話をした記憶がある。冷静に考えれば、まるっきり勝手な言い方だと後になって思った。でも、その時は違った。

「優しくするから、ね？」

目がうるんで頬は真っ赤だったろう、私はうつむいてうん、とうなずき、がくがくする膝をどうにか前に運んで、彼に抱えられるように歩き続けた。そして、フロントで彼が鍵を受け取る時も一緒にエレベータに乗る間も、ずっと床を見つめていた。

下着は新しく買ったものをつけていた。万が一、ってこともあるから、なんていつどこで思ってたんだろう。まさに万が一という事

態、彼がすぐ目の前に迫り、私の腰に手を回して唇を奪いに来た時、私は下着をちゃんと新調して本当によかった、とそれしか考えていなかった。体が震えているのが自分でも分かる。

部屋について電気をつける間も惜しんで、彼は私に抱きついてきたのだ。

よかった、おニユーのパンティで。よかった、よかった、声がそれだけを繰り返す。

耳がじんじんと痺れ、閉じた瞼の裏が赤く染まった。

キスは初めてだった。食事の後だというのに彼の息はただ甘く、体液は私とまったく同じ温度のようで、舌を伸ばして彼の歯の間に差し込んだ時、自分と彼との境はどこなんだろう、と急に不安になって私は舌をくるったようにさまよわせた。

背中に回った腕が乱暴に私のブラウスをたくしあげた。ブラの留め具をひきむしるように外す。胸を見たと思えない速さで次にスカートのジッパーに手をかけて下ろす。胸にがっかりされなくてよかった。でも、待って、私実際、こんなことできるの？

「ま……まって」

ようやく口が離れ、それだけ声に出した。

「可愛いよ、ライム、だいじょうぶ」

彼は、あえぐようにだいじょうぶ、と繰り返す。そしてまた唇を近づけ、今度は私の首筋に当てた。

足首に軽い重みを感じ、スカートが落ちたのに気づく。彼はジーンズのまま私の太ももの間にひざを割り込ませた。痛い、彼は満員電車に割り込み乗車でもするつもりなのだろうか？ 動きがだんだんと激しくなる。

「待ってください」

「だいじょうぶだから」

他にことばを知らないのだろうか？ 急に気づいた。

アイドルグループのメンバーは、近づかなければいつまでも偶像アイドルなのに、私はあまりにも、近づき過ぎてしまったのだ。

これはただ単に、一匹のオスでしかない。私は……何でこんなことをしているの？

「やめて！」

ダイキが少しだけ身を離し、片手で私の耳、イヤーエイクのある耳をつかんだ。ホテルの外の時よりもつと雑に、虫を捻り潰すような遠慮のなさで。

「ぎゃんっ」

のけぞるほど痛い、でも

「……感じるだろ？」

ダイキの下唇に溜まった唾が、ベッドサイドの黄色い明かりに反射して蜜を乗せているように光った。目が血走っている。

手はまだ耳から離れていない、彼がまた捻った。

「うあああ……」ぞくぞくと背筋を這いあがる快感が強すぎて座り込みそうになるところを、ベッドに突き飛ばされた。

なぜなのか、ぜんぜん動けない。手足が重い。まるでサテライトで処置を受けた時のように、思いのままに体を動かすことができない。

「だいじょうぶ」

手早く服を脱ぎ捨て、ジーンズの前を開けながらダイキが言う。

「20ポイント分、たっぷりと楽しませてあげるからさ」

黒い影がのしかかる前に、私は辛うじて目をつぶった。頭蓋全体が動悸にあわせて脈打っている。

急に、能天気な曲が流れ始めた。私の上になったダイキは急に身をこわばらせ、横を向く。

そこに見えたのは私の知っているダイキとはぜんぜん違う貌を持つ男だった。

彼はベッドの下に落ちていたケータイを拾い上げ、画面を一瞥すると部屋の片隅に寄った。柱の影、私の寝ているところから姿は見えなかったが、彼がこちらを気にしながら話をしているのは分かった。

「え？ 今、部屋だけど……ああ？」

私を見るために柱から身を伸ばしたようだ。

「こっちは別に？ ……何だって」電話の向こうはかなり動揺しているらしく、うん、うんとうなずくダイキはかなり深刻な表情で、相槌のタイミングもかなり速い。

「待て、落ちつけよ、お前がやったわけじゃないだろ？ 勝手に相手が、うん、血？ 待て、おい、落ちつけ、分かったすぐ行くからポイントの残が？ そう言ったのか？ チクショウ、そんなん知るか、俺たちや関係ないだろ？ くそっ」

柱をどしんとなぐりつけるような鈍い音が響く。

「とりあえずすぐ行くから奥山さんにはまだ連絡するなよ」

何となく、メンバーのどちらかからの電話では、とガンガン鳴る頭の中で漠然とそう感じた。血が……誰の血だろう。まあ、私には

あまり関係ないか。

彼が急いで服をつけ直しているのが見えた。

「ライム」

急にぞんざいな物言いになって、彼が小さな布切れを投げてよこした。

私のブラだった。（おニユーのパンティ、そしておニユーのブラです。）頭のどこかで茶々ともとれるはしゃいだ声が響いた。（ほら飛んできた、おニユーです。でも今どき、『オニユー』なんてことば誰が使っわけ？）

「今日はもう帰るんだ、続きは今度な」

すっかり恋人きどりだ、でも、私は涙目のままうなずいた。

耳がまだ痺れている。

「携帯番号教えて」

私は無意識のうちに番号を口にしました。ダイキはすぐに自分の電話でダイヤルして、すぐに切った。

急に彼がまた迫った。私はとっさによけようとしたが、彼の唇は軽く、私のおでこをかすっただけだった。

「今日のごめん」

靴紐を結びながら、ようやく普段のイメージに近いダイキの声で、彼が言った。

「服着たら、そのまま出てっていいから。それで」

私はまだ、起き上がれなかった。

「今度はもっと、ちゃんと会えると思う」

「うん」

「送ってやれなくてごめんな。じゃあね」

近づくこともなく、彼はそのままドアに向かった。出て行くことして、また戻ってきた。

「ライムは」

「え」

ようやく起き上がり、ブラをつけようとした手を止めた。彼は真剣な目をしている。

「ポイントはちゃんと、残っているの？」

「セルの？」変な事を聞く。でもまじめに「あるよ」「そう答えるとよかった」

ため息のようにそうつぶやいて、彼は今度こそ去っていった。

深夜、身も心も疲れ果ててようやく家に戻ってから、ルネには連絡を入れた。

「ありがとう、用事済んで家に帰ったから」

お母さんには、夜遅くまでコムカイさんという友だちのうちで勉強してくるから、と言ったから。

ルネからすぐ返事がきた。

「おかえりー、おつかれさま」

彼女には、どんな用事かは言ってなかった。もちろん、セルの集まりだった、ってことも。しかもアリシアソードのダイキとあんなことまで……何も訊かれなくてよかった。

しばらく他愛ないメールのやりとりをした後、ベッドに入り、そこで改めて新しいケータイ番号を確認した。

信じられる？ あの、ダイキの番号だって。

でもこれは、誰にも言えない私だけの秘密。

襲われそうになったことすら、家に帰るにつれて次第によい方にか思えなくなってきた。彼は優しくしたかったんだ、急にアイドルの地位に登りつめ、友人も減って行く中で、私みたいな普通の子と仲よくしたかっただけなんだ。乱暴に見えたのも、ちよつと不器用

なだけ。それにおでこにキスしてくれたし、最後に優しいことばをかけてくれた。

「今度はもつと、ちゃんと会える」とも。

耳たぶのズキズキは疼くような熱っぽさでいつまでも私に囁き続けていた。

そう、今夜のあれは、すごくよかった、よかった、よかった。

何かが間違っていたにせよ、感覚的には私にとって、セル会員になっってから一番の幸せな出来事だったろう。

ケータイ番号を何度も見かえしていた、あの時が。

もちろん、かけることもかかって来ることもなかった

……すぐにもつともつと、色んなことが起こったから。

いつも変わらない朝。

教室に入ると、いつもと同じ光景が広がっていた。

「おはよう」

「おーっす」

「今日サツカ遅刻だつて」「いつもじゃん」

「ねー英語の宿題やってきた？」

夏服の白い波の合間から、ルネが、おずおずと笑いかけてきた。

「おはよう、シオン。どしたの？」

「え？」

「ぼんやりしてたし、何か言った？」

「そう？ そんなことないよ、おはよう」

私にもっこり笑い返す。

先々週末にあったアリシアソードとの一件は、たとえルネにでも内緒だった。

セルに関わる話はあまりしたくない。

あの後PCで確認したら、やっぱりちゃんとポイントは減っていた。ディナーは楽しんだんだから、当然よね。

あまり気にはしてなかったけど、何となく、友人にも話しづらい。もっと当たり前障りのない話にしようとして、頭をめぐらせる。

「そう言えばさ、ルネ、昨日私も観たよ、加藤シータのドラマ、あれ、サイッコーだった」

「でしょ？」と応えるかと思ったが、ルネは遠慮がちに「そお？」

と小さな声で答えてから、そつと脇の方に目をやった。

一番窓側の、前から二番目の席にはすでに彼女が座って、カバンからノートを数冊取り出しているところだった。

さりげなさを装っているが、こちらに顔を向けないでいるのが精いっぱいにようだ。

そして、会話は全て耳に入れているのか動作もどこかぎこちない。

見宮未歩^{けんみや}は、伸びてきた長めの髪を、今日はツインテールに結っている、ノートを出す度にその房が揺れ、横顔を微妙に隠している。何となく頬と鼻の頭が赤いような気もするけど、もしかして夜中に泣きとおしたとか？

それでも、それが昨日の会話のせいだとは、私にはいくら考えなおしてもピンとこないんだけれども。

どうしてあんなに動揺したんだろう、見宮さん。

また、昨日の会話を思い出した。

思い返しながら何となく、自分の左耳たぶに触れてしまう、耳の裏には、控えめにかちりと『イヤーエイク』が装着されていて、それが固いケシ粒のように指の先に当たる。

「ねえシオン、この頃どうしちゃったの？」

最初彼女は、心底不安げな表情でそう問いただして来たのだ。

「えっ？ この頃、どうしたの？ って」

私はまじまじと見宮さんの顔を見る。

「何か……ヘンだよシオン、よそよそしいっていつのか」

「そう？」

唐突に問いかけられて本当は「変なのはそっちだよ」と言っていたかった。

第一この子、何なのだろう？

確か中学は三年間一緒だった、何度か見たことはあるから。部活は、何だったかちょっと覚えがない。でも、中学が一緒だった、というだけでどうして毎日お昼を一緒に食べていたかもあまり記憶にない。

私がルネと仲良くて、彼女もルネとけっこう仲がいいようだ、だからかな？

最初にどっちからお弁当一緒に食べようと言ったのかも覚えがないんだけど。

それでも、あまり親しくない人間をつかまえて「この頃どうしたの？」って不思議な質問。

私は軽くため息をついて、足を踏み変えた。

何だかこっちが、責められているみたいない気分にならない？ なぜだろう？ ワタシ、この子に何か悪いことしたのかな？

「ねえ見宮さん」

あまり言葉に棘が出ないよう、できるだけ穏やかに聞いてみた。「何かさ、よく分らないんだけど」

見宮さんはこぼれ落ちそうな目でじっとこちらを凝視している。あまりにも真剣で、泣きそうにも見える。急に胸が痛くなった。

あまり親しく無い子なのに、どうしてこんなに私に真剣な目を向けているんだろう？

「よく解らないんだけど、私、見宮さんに何か悪いことしたのかなあ」

「ええっ」

見宮さんが息を吸い込んだまま、大きく開けた口に手を当てている。

手を食べようとしているみたいよ、見宮さん、そう言ってやりたかったがぐつと我慢した。

「ごめんね、何かね、同じ中学校から来た、っていうのはよく解るんだけど」

私はできるだけすまなそうな声を出してみた。少しは、相手の真摯さに応えようとして。

「何……何言ってるの、シオン」

みるみるうちに見宮さんの目から大粒の涙があふれてきた。

「それに、何？ 『ケンミヤさん』、ってどういうこと？」

「え……？」

見宮さんの泣き顔、歪んでいる、急に嫌悪感がこみあげる。

この子は泣くと可愛い、って思っちゃってるんだろうか？ また意地悪な事を言いたくなってきた私は口の端まで言葉が出かかってムズムズしている。

「だって、ケンミヤさんは見宮さんでしょ？」

「何かさ……よそよそしくない？」

「えっと、だって元々別に親しいとかそういうことは」

横で聞いていたルネがその時、何か言おうと口を開きかけてから、うつむいた。

その間にも見宮さんが何かまくしたてている。でも、その言葉は最初から全く、理解できなかった。まるで外国語のように。

「ごめん」

私は片手を額に押し当て、ぎゅっと目をつぶる。

「ごめんなさい見宮さん、何を言ってるのかホント、全然分らない」
堰を切ったように、見宮さんがわっと泣き出した。

それは教室の中ほどでのことで、昼休みとは言え、ほどほどの数の生徒が教室にいた。見宮さんの突然の爆発に周りの子たちがぎよつとしたようにこちらをふり向いた。

「何？ だいじょうぶ？」

私と同じ教科委員のシノブさんが、心配して声をかけてくる。

見宮さんの様子を目の端に捉え、私は、両掌をぎゅっと目に抑えつけ声を上げて泣いている彼女とその肩を優しく撫でているルネにも目をやった。

いやだ、何だか自分が激しく責められているみたいない気分だ。つい目をそらす。

ルネがこちらではなく、ずっと見宮さんを心配そうに覗きこんでいるのも、また気分悪い。

「分かんない、見宮さん急に泣き出しちゃった」

シノブさんに向けて、ちよつと声を大きくする。

「私、何か悪いこと言ったのかなあ、何故なのか分かんないよ」

見宮さんは泣きながら、近くの机を突き飛ばすように教室から飛び出して行った。

「ミホちゃん！」

ルネが大声で呼び止める、だが、見宮さんの足は止まらなかった。

ルネは困ったようにその場に立ち尽くしていたが、

「ねえ、ルネ」

呼びかけると、びくりと肩を震わせてこちらを見た。

その目がどことなく泳いでいる。そんな怯えたような表情、こちらにも急に、もつといじめてやりたいような残忍な気持ちがあムラムラと沸いてきた。

「あの人、何か変だよ。急に私のことよそよそしい、とかこの頃どうしたんだ、とか」

「う……ん」

ルネの笑い方は何となく痛々しくみえる、それでも彼女はぷるんと頭を振って、それからいつものようににっこりとほほ笑んだ。

「きつと何か辛いことがあったんだよ、家かどっかで。少し泣けば落ちつくんじゃないかな」

「だよね」

ルネの言い方に急にほっとして、私も少し肩から力が抜けた。

「ごめんね。ルネまで困らせちゃって」

「ううん、だいじょうぶだよ」

すでに私たちに注目しているクラスメイトはいない、ロケンカも争いも、結局は日常茶飯事なのだ。

それでも、その日はついに見宮さんは教室に帰って来ずじまいだった。

翌朝、見宮さんはちゃんと学校に来ていた。

明らかにこちらを意識しているのが分かる。同じノートを何度も机の中に入れてたり、また出したり。何だかすつきりしない。

私は気がついたら耳たぶをいじっていた。イヤーエイクのある方。ここがゴロゴロする感じで嫌だ。

何となく、見宮さんの態度を見ているとその違和感が増えてくるような気がしていた。

どうしよう。

よし。

私は大きく息を吸ってから、つかつかと見宮さんの脇に歩いて行った。近くの席にいたルネが、こちらを見ているのを感じていた。

「おはよう、見宮さん」

近寄って行ったのは気づいたはずだ、彼女の手がぴたりと止まった。

しかし、こちらを見ようとはしない。

丁寧に、穏やかに、心をこめて言った挨拶したつもりだった。

昨日はどうしたの？ 私が、何か悪いことした？ ううん、それ

はともかく、私は特に何とも思っていないから。今朝はまた仕切り直しにしましょう、ねえ、見宮さん。

それだけの思いをこめて、もう一度「おはよう」と声をかける。

「お、」

見宮さんの口がかすかに開いた。

低い声で、聴こえるか聴こえないかくらいの声で彼女は手元を見たままようやく

「おはよう」

そう、声に出した。

「あの」

ことばに詰まってしまった。次のことばを考えていない。何て言えばいいんだろう？

「あの……見宮さん」

横にはいつの間にか、不安げな表情を浮かべたままのルネがついていた。

「見宮さん、今日お昼ね」

ルネの顔をちらつと見てから、また見宮さんの横顔に眼をやる。

「お昼ね、一緒に食べない？ あの」

昨日のことをもっとちゃんと話し合いたい、だから教室ではなくてどこか校庭とか食堂の端っことか……そう伝えようとした時

「じゅめんなさい」

そのままの姿勢で、見宮さんは固い声を出した。

「部活の先輩から呼ばれて、みんなで部室で食べるから」

「……そうなんだ」

ちよつとほつとしたような言い方になっていなかったか、不安な気もしたけど実際のところ、本当にほつとしてしまった。

ちよつぴり、そんな自分にも嫌気がさす。

でもね、朝から嫌な気持ちにさせているのは見宮さん、アナタの方なんだけどね！

そう後ろ姿に語りかけながら、肩をすくめて自分の席に戻った。

ルネが上目で見宮さんの横顔を見てから、軽く音のしない吐息をつけてやはり自分の席に戻るのが目の端にみえた。

ちよつどクラス担任が入ってきて、何かと気ぜわしい一日が始まった。

お弁当は結局教室で、ルネと二人きりだった。

他の女子が誘ってくれればその仲間に入ったかもしれないが、私もルネも元々どちらかといえば受け身な感じで自分からは人を誘わない。

3人の中では見宮さんが一番積極的だったかもしれない。時々他の子やグループを誘っては机をくっつけ合うこともあった、何だかはしゃいだ事を言いながら。何だったろう。

それにしても、見宮さんがいないこんな昼休みは、どことなく他の女子からもひっそりと遠巻きにされているような居心地の悪さを覚えてしまう。

これからもこんな感じなのかな？

まあ、明日からのことは明日考えよう。

できるだけ当たり障りのない話題をルネに振りながらお弁当のおかずをつまむ。

他愛ないテレビの話題や昨夜のお笑い芸人の新ネタの話なんかで、ようやくルネにも屈託のない笑みが見えるようになっていた。

ふと気づいて私はお箸を持つ手を止めた。

玉子焼きが妙に多く詰めてある。お弁当箱の半分くらいは玉子焼きだった。

「ねえねえ、ルネ」

可笑くなつて、ついルネにそのおかずをみせる。

「うちの母さあ、なんでこんなに玉子ばかり詰め込むんだろ？」

ルネが、あつ、という表情になった。持っていたフォークを止めて困ったように眉を寄せる。

「いつもさ……ミ、見宮さんに分けてあげてるじゃん？」

「え？ 見宮さんに？」

そう言えばそんな気もしてきた。

その時、急にこんな声が頭の中に響いた。

ねえねえシオン、きょうのたまごはなんですかー、あつ、やっぱり、ヨシエさん特製の出汁巻き卵ですねえ、ははーっ、ありがとうございます。

自然にその続きが口をついて出た。

「……代わりにお宅のベーコン巻でもいただきますしよつか、って私言うよね」

「うん」

ルネは、その台詞について笑いながら言葉をつぐ。

「そうそう、未歩ちゃんとシオンちゃんと、いつもやってたからさソレ」

「いつも」

私は機械的に繰り返した。

「そう、いつもだよ」

ねえ、と急に箸を置いてルネが私の顔を見る。

「シオンちゃん、もしかして本当に忘れてるのかな……って思っち

「やったよワタシ」

「忘れてる」また機械的に繰り返す。

「うん、あんなに仲よかったのに」

「仲よかった。というかまだ高校に入って二ヶ月も経ってないけど」

「その前からなんでしょ？ 仲いいの」

私はのろのろと首を横に振る。

気づいたらまた耳を触っていた。耳たぶの、あの小さな塊を。

なぜ？ 落ちつくから？ 気になるだけ？ 私は耳をいじりなが

ら考える。

「ううん、て言うか、分かんない、もしかしたら……本当に何か忘れてるかな？ 私」

「そんなことあるの？」

ルネの声は消え入りそうに教室の喧騒の中に溶け込んでしまう、それでもその声はずきりと胸を刺した。

「あるかも、しれない」

少しずつ、黒い霞みが晴れるように何かが見えてきた。

見宮さんが怒っていたのは、本当に、ほんとうにこちらのせいだったのかも知れない、と今さらのように思えてきた。

きつちりと四角く巻かれた黄色い玉子焼きを見ると、そんな疑念もあながち嘘ではないような気持ちになってくる。

だって、お母さんがいつも余分に入れてくれるのは知っていた、結構手がかかっているんだ、この出汁巻き。それをお母さんがこんなにきつちり、ルネと私と、そしてもう一人で分けるくらい焼いて入れてくれるなんてちゃんとした訳があるのに違いない。

大おべんと大会ですー

あ、やっぱりヨシエさん特製の
ねえテニスやるんだやっぱり、がんばってね！ 応援する！

急にまた声が蘇ってきた。さっきよりもくつきりと。

見宮未歩の張りのある明るい声、いつもどん、と迷った背中を押してくれるようなあの威勢のよい声。

「……ワタシ」

ぼろりとお箸から手が離れてしまった。

からん、と乾いた音をたてて片方が床に落ちた。

お箸を拾わずに、私は頭を抱える。

「私何だかやっぱりヘンかも。どうしよう、見宮さんに謝ったほうがいいような気がしてきた」

「うん……でもさ」

ルネがお箸を拾ってくれた。それを少し離れたところに置いてから、まじめな顔で聞く。

「何が悪かったのか、よく分らないんでしょう？ て言うか、仲がよかった事自体を忘れてしまってるってことなのかなあ」

「そうなのかな」

「それって、急に生活が変わってストレスとかあるのかなあ」

「違うとおもっ」

そっだ、原因だけはハッキリと思に至る。

ぞっとして、両腕をかき抱く。もうすっかり食欲は失くなっていた。

「私ね……多分」

急に左の耳たぶが鋭く痛みを発した、目の中が暗くなって、鼻の奥がつんとなった。

「たぶん」ルネの顔が涙でかすんでいる。

「多分、たいへんなことしちゃった気がする、やっちゃいけないこと……」

ルネが腕を伸ばして、私の肩にそつと手を置いた。

「落ちついて、シオンちゃん。ちょっと深呼吸しよ」

「うん」

しゃっくりのように呼吸が乱れた。見宮未歩と何があったか、自分が何を忘れていいのか頭の中がごちゃごちゃしている。それでも、どうにか考えなければという焦りでよけいに息が乱れてしまう。

「そう、吸って、吐いて、吸って」

ルネの優しい声がじんわりと沁みる。いつの間にか、呼吸は元に戻った。

「ねえルネ」

目じりに溜まった涙を人差指で拭いた。その時、

「夕方、モスで話しようか」

ルネからそう言いだした。「アタシさ、ミホちゃんも連れていくよ」

うん、と黙ってうなずいてから私はお箸を持って立ち上がった。

「洗ってくる」今度はルネがうん、とうなずいた。

そのふわふわの髪を見おろして、私は言う。

「ありがとね、ルネ」

ルネは見上げて、やんわりと笑ってみせた。春の日差しのような暖かさだ。

「そんな……友達だもん」

洗面台でお箸を洗ってから、今度は顔を洗う。

今度こそ、見宮さんとうまく話ができるのだろうか。
鏡の向こうの目には不安だけが暗くこびりついていた。

モスの一番奥の席に、ルネがトレイ片手にあわてて走ってきた。5分ほど遅刻しただけだが、あせあせと息を切らせている。トレイにはアイスコーヒーが1つ、小さなパイが一切れ危なっかしく載っていた。

ルネは、初夏にふさわしい大きめな若草色のニット帽を斜にかぶり、同色の丈の短いジャケット、クリーム色のシャツと同色のフレアスカートの裾をひるがえしている。私服もメチャ、可愛い。

「ごめんねシオンちゃん、でがけにちよつとバタバタしちゃって」「こつちこそごめんね、遠いのにわざわざ出直してもらっちゃって」「だいじょうぶ、定期あるし。それよかここで夕食にしている？」「パイを指してちよつと恥ずかしそうな顔をする。

「シオンちゃんは何か食べない？」

「うちで食べてきちゃった」

全然喉を通らなかった、とさすがにそこまでは言えなかった。半分立ち上がって、ルネの背後をうかがってみる。

「見宮さんは」

「うん……」

ルネがとすん、と向かいに座る。

「一応、来てくれる、って、30分くらい遅くなるけど、って」

「よかった」ついため息が出た。「ありがとう、ルネ」

「ねえ、」

ルネは学校にいる時より何だか積極的に見える。口調もキビキビしているような気がした。

「家に帰ってからまた何か思い出した？ 未歩ちゃんのこと」

「あんまり」

学校でフラッシュした、お弁当の出来事以外は特に思い出せなかった。

「あのさ、ケータイとかに履歴は残ってないの？」

カフェオレのグラスを何となくかきまわしながら、私はぼんやりと首を振った。

「私もすぐそう思って、携帯見直してみたけど、送受信履歴もメールも全部消してあった」

ついでに、画像もムービーも全部消去してあった。

そうなんだ、とルネが残念そうにグラスをみつめている。

「卒業アルバムとかも、見てみたの？」

「それが」アルバムの写真のページには、特に何の変わりもなかった。

クラス写真でも、部活の集合写真でも。

ただ一つだけ、県大会壮行会の写真では二人は隣り合わせで写っていた、同じくテニス部だったのだ。どちらも何となく固い顔をしていたのは、たぶん試合に臨む緊張感のせいだろう。

「でもね、記録のところにワタシたち、ダブルスで出場した、って書いてあったし」

考えながら言葉をつぐ。

「最後のメッセージのページは、破いてあった……半分くらいページが無くなっていったの」

「誰がそんなことしたか、分かる？」

「それは……自分しか考えられないよ」

認めたくない、でも、部屋に勝手に入ってくる家族はいても、こんなことまでする人はいるとは思えない。

「ねえシオンちゃん」

ルネはグラスを両手で抱えて目を上げた。

「たいへんなこと、って何か覚えがあるの？」

少したってから、私はようやく顔を上げた。

「ルネ、一回話したことあったよね前に」

ルネはじつと私の目をみた。

「会員になるとか、何とか、その……『セル』会員の話。覚えてる？」

「うん。映画館の前で女の人がカードで並ばずに入った、って話でしょ」

「あれ、入ったの」

「え？ シオンが？」

いつの間にか呼び捨てになっている、でも、その方がうれしい。私は深くうなずいた。

「うん。会員になったの」

「そうだったんだ……でもそれって未歩ちゃんどう関係あるのかな？」

「見宮さん……ミホさん、何て呼んでいたかも忘れちゃったんだけど、私ね、入会の時にひとつだけ条件があったのを思い出して」

「どんな？」

「大事なものを、寄付してください、って言われて」

「ダイジなもの？」

ルネはきよんとしている。

「それで、自分の性格上、何を大切に思っていたか想像してみたの、だから」

「ちよつと待ってよ、ちよつと待って」

ルネはえへんと咳払いして、片手で制した。

「大切に思っていた、って言っても寄付でしょ？ モノでしょ？」

それで何を大切に思っていたか想像した、って、何を？」

「だから……思い出だよ。中学時代の、例えば、親友との思い出とか」

「あり得る？」

自分だから、あり得るのだ。私は何度もうなずく。

「ちよつと待ってよ」

また、ルネは繰り返している。

「その入会って、誰かお家に来てそついう契約とかしたの？ それともシオンがどこかに出かけて行って手続きしたの？ それにどうして『思い出』なんて寄付しようと思ったの？ どうやったなら寄付できるの？ ちよつと待ってよ……何だかよく解らない」

順を追って話を聞かせてよ、とルネは身を乗り出す。怒ったように目がキラキラしている、何だか、本当にいつものルネと感じが違う。

でもこんなに真剣に聞いてくれるのは、心細い今は本当にありがたい。

急に思い出してもう一度あたりを見渡してみる、見宮さん、まだ来ないのかな？

一緒に話した方がいい気もするが、来ないものは仕方ない、とにかくルネに話してみよう、それからだ。

「……最初から寄付して下さい、なんて書いてなかったんだよ、元々、入会の手続きにはただアンケートがあっただけ。

『あなたの大切なものは何ですか？ もしくは、大切な人は誰ですか？』そこに入力するの、答えを。それで仮登録が終了……それから二日後、小さな包みがメール便で届いたの」

ルネは黙って話の続きに聞き入った。

「ねえ、ルネ」

氷はすっかり融け、カフェオレは上半分が透明な水と化していた。

「サテライトの女の人、何て言ったと思う？」

ルネが放心したような目で私の顔を見る。聞いた話がかなり、彼女にとつてシヨッキングだったのだろうか。声も平板だった。

「何て言ったの」

「『大切な人とか登録してなくてよかったですね』って。

ほんと、よかった、思い出だけで、そう言ったの。その後ね、お婆さんが大切なものを登録するのに、迷った、って話……観葉植物か猫ちゃんか、そう言う話の時に女の人がさらっと言ったの。

『猫ちゃんだったら処分するしかないですね』。

どういう意味だと思う？ あの人たち、他人からダイジなものを預かる、なんて言うって処分する、って言うてるのよ、大切な人だったらどうなっていたんだと思う？ ねえ？」

「シオン、」ルネの目に真剣な光が戻る。「ちよつと落ちつこうよ」「落ちついていられるわけないでしょ」

がたん、と立ち上がった瞬間、トレイが傾いてグラスが大きく揺れた、同時に、可愛いオルゴール曲がこじんまりと響いた、ルネの携帯だった。

「シオン、待って」

有無を言わせず、ルネが電話に出る。「はい」ちよつと固い口調

だった。

「はい、今、外に出てますけど、はい、え……買い物の途中ですけど」

立ち上がったまま、電話の終了を待つ間、怒り、というか混乱した激情は急速にひいて行った。

ルネは親切に聞いてくれようとしているだけに、どうしてルネに対して怒りをぶつけてしまったのだろう。

今も、誰かの電話に短く答えながらも、こちらを気遣うようこちらに時おり視線をくれる。

その時、店の外から視線を感じ、私は窓の方をふり返った。

一番奥まったところなので普通ならば気づかないような距離、なのにその視線はまっすぐこちらに向いていたようだった。

人影はさりげなく窓から離れた。

やっぱり身のこなしが一緒、サテライト近くの駅で見かけたあの男の子だ。

私を見張っているの？

トレイも置き去りにしたままあわてて店の外に飛び出した。

背後から「待って」とルネが叫ぶのが聞こえたが、構わずに外に走って行く。

彼は店から20メートルくらい離れた場所から車道をあちら側に渡ろうとしていた、が、たまたま車が切れずに立ち往生している、見るからに焦った感じがあった。

「待ってください」

彼の元に駆けよっていく。彼は観念したように立ち止った。

「あの」

さらっとした髪が白い開襟シャツの肩につくかどうかという程度で、白い顔を覆っている。

思いがけず若い、まじまじとその顔を見た。

やっぱり見たことある人だ。

ややそらし気味にあちらを向いているので、覗きこんで訊いた。

「どこかで会いました？ 私に用事ですか」

彼は顔をそらしたままつぶやくように言った。

「ひとつだけ手がある」

私は思わず固まった、彼はまだあちらの方を見ている。

「なんの手ですか？」

ようやくそう聞いた時、急に彼が車道に飛び出した。

「あぶない！」

赤い車が急ブレーキをかけて彼の前で止まる、車体が右に大きく傾いたからかなり際どいところだったろう、ばかやろう、とか何とか罵声が聞こえたが、彼はそのまま頭も下げず通りの向うに走って姿を消した。

私は声も出せず、彼の消えた先を見守っていた。

そうだ、モスに戻らなきゃ、のろのろと向きを変える。

ルネに話してみよう、少しスピードを上げて店に帰った。
しかし、ルネもすでに姿を消していた。トレイはちゃんと片付け
てあった。

携帯を見ると、既に彼女から短いメールが入っていた。

「ごめんね、急用ができて帰る。ミホも来れなくなっただって、明日
また話しよう、ホントごめんね」

ミホという文字を見て急に、先ほどの男の子のことを思い出した。

そうだ、彼……制服を着ていた、前に見た時は。見宮さんにも関
係あったような……

少しずつ見えてきた。

見宮さんと演劇部を覗いた時に見かけた人、そう、先輩だ。
確かヒロカワという名前だった。

線は細いイメージだけど、熱い演技でホンモノの俳優さんみたい、
でも演劇以外の時にはあまり口もきかずにシャイなところがまたク
ールで人気急上昇中なんだって、と他の誰かも言っていた、あまり
に女子が騒いでいたので、ちらっところちらを向いたことがあった、
あの人だ。

そう気づいたのは家についてからだった。

でも何かが気になる、ずっとその顔を思い浮かべながらベッドの
端に腰かけて考えていた。

白い肌、男の人なのにまつ毛が長く中性的な顔立ち、とても綺麗
な人だった。

誰かを思い出す。そうだ……

彼は似ているんだ、目のくれ方とか、話す時の一呼吸が、そあら先輩に。だから気になるんだ。

急にそあら先輩の姿がまざまざと蘇った。

たった一度だけの出会い、会話。彼女の指が耳たぶに触れ、そして。

先日そあら先輩から触られたようにやや強く、イヤーエイクの上からつまんでみた。身体にじん、とした電流のような刺激がはしり、息が漏れた。

両腕で自分の身体を抱く、強く。

身体の中に荒れ狂う嵐のような気持ちを抑えつけていた、なぜか、そあらに会いたかった、そして……ぎゅっと抱いて欲しい。

気になりだしたらどうしても確かめずにはいられない。

翌朝さっそく、私は二つ離れたクラスの吉岡みなみを訪ねていった。

中学ではそこそこに仲の良かった子だが、ミナミはとにかく噂ばなしが好きで、色んな情報を握っている。

ちよつとした御礼を渡したい、と彼女を廊下に呼び出した。

「何だ、別によかったのに」

ミナミはそう言いながらも小さなチョコ菓子をそくさとポーチにしまう。

少し前に忘れたテキストを貸してもらっていた。いつもならお互い様で特に何もしないのだが、「いえいえ、お代官さまぜひぜひ。このお菓子たくさんもらっただ」と押しつけたのだった。

「ところでね」

二人は同時にそう口にして、ふふ、っと目を見交わした。

「詩音からどうぞ」

「いいよ、ミナミ先にどうぞ」

「たいしたことじゃないよう」

そう言いながらもみなみ、一番痛い所をついてきた。

「近ごろ、ケンケンと何かあったの？ アンタのクラスの女子がち

よつと言つてたし」

「え？」

一瞬迷つたがとりあえず正直に言つてみる。彼女にあまり複雑な嘘をつくと、後が面倒だ。

「うん……ちよつとケンカした、」

「なんで」

彼女が情報通なのは、聴ける時にはどんどんこつやつて距離を詰めて来る所だ。

相手が拒否すればそこでアツサリ引っこむ、しかしまた油断しているところかで同じ場所を攻めてくる、そういう狡猾さを常に感じさせた。

「分かんない、でもちよつと話できるようになつたからまたゆつくり聞いてみる」

そう言えば見宮さんの姿は今日はみていなかった。

ちゃんと話し合える時がくるのか、今の自分には全く見通しが立っていないかった、でもみなみにはあまり弱みは見せたくない。

「ふうん」

あまり納得していない返事のようにだったが、あわてて自分の質問をぶつけてみる。

「ところでさ、二年の先輩で、小林さんて人知ってる？　小林そあらって女の人」

「コバヤシ・ソアラ」

少し目を泳がせてから、みなみは訳あり顔でこちらに目を戻した。

「そあら先輩、何なの？」

「えっと」

最初から用意してきた嘘を出す。これはちゃんと練習までしていた。

「入学して少ししてからね、昇降口の所でこけてさ、その時たまたまハンカチ貸してくれたんだ」

「ええー？ そあら先輩から？」

「うん」

「ホントに？」

「うん、ちょうど通りかかって、だいじょうぶ？ って」

だからハンカチ返さなきゃだけど、あんまり学校に来ていないのか、それから見てないの、クラスは判ってるのに。ねえミナミ、そあら先輩住んでる所分る？

ミナミは黙ったままだった。

腕を組んで、いかにも知っているが情報が重すぎてチヨコ1つではあまりにも割に合わない、といった表情、どこか笑いたそうにもして、ますます不快感がつのった。

「あー、やつぱりいいよ」

こう言う時にどうするか、みなみとだてに長く付き合っていない。私は逆にあっさりと引き下がる。

「ハンカチ、もらっちゃおっと。なんかきれいな人だったしい」

「あのね」

言いたい、でも言うのは惜しい、というジレンマからかミナミは組んだ腕の中で指をもぞもぞと動かしている。小鼻がピクピクしているのは昔からのクセで、こうなるともう話し出さずにはいられないくなる。

「やばいよ、あの人は。第一よく、ハンカチなんか貸してくれたと思っし」

「ええ」

わざと怖そうに身をすくめてみる。

「何？　なんでやばいの？」

「すごいきれいな人でしょ？　モデルみたいな感じで」

「うんうん」

そこから、みなみの舌は止まらない。

話からイメージされるのは、成績も学年でトップ5くらい、でもいつも体育は見学、身体が弱いらしい。学校ではあまりしゃべらず、何人にも声かけられたみたいだけど、全滅だったって。

「どこに住んでるんだろ」一番聞きたいことだった。

「木瀬町って話。よく学校前からバスに乗ってたし、レンタルビデオ屋さんがメチャ近くて便利だって、ちらっとだけ言ったことがあったって」

さりげなく感想っぽくつけ加える。

「へえ、一軒家なのかなあ、何かマンション住まい、ってイメージだよ」

「独り暮らしなんだってさ」

「えっ」

私の驚いた表情に、ミナミはふふん、と鼻を鳴らしてみせた。

さすが情報通、目がキラキラしている。

「両親がずいぶん前に離婚してね、お母さんとずっと一緒に暮らしてたんだけど、お母さんも帰ってこなくなっ、お金だけ送ってよこすんだって」

「よくそんなコト知ってるねえ」

「そあら先輩といつとき外で遊んでた人、知ってるんだ。仲よくなるとおごってくれるらしいし」

「いつから独り暮らししてるんだろ」

「高校入ってすぐだってさ」

「何か、すごいよねえ」

進学校だし、けっこう真面目に当たり前に過ごしている人が多いのかと漠然と思っていたのだが、結構色んな人がいるものだ。黙って聞いていた私に、ミナミは更に身を乗り出して、こう囁いた。

「でもさ、そあーさん、学校やめちゃったんだよ」

初耳だった。

「どうして？」

「さあ……」

病気がちだった、って言うし、入院でもしたんじゃないのかな？とミナミは案外さらっとそう付け足した。

数日後、私は木瀬町に来ていた。

レンタルDVDの店は幸運にも一軒しかないそうだ。
絶対に探してやる。

そこまでしてそあらさんを捜したいような浮かされた熱のような感情にずっと付きまとわれていた。

ミナミに話を聞いてから、ずっとずっと他の事も上の空になるくらい、そのことばかり考えていた。もちろんテニス部は、結局一度も覗いていなかった。

いつからこんなにそあら先輩のことが気になり出したのだろうか？

店に入り、ぼんやりと棚の間を歩き回って、ふとそあらに会えるかも、と思ってしまう、それだけで頬が熱くなる。

バカな私、体調が悪くて学校をやめたのならば、こんな所に入入りしている訳がない。

入院も実際無いとも言えない。あの咳き込み方は尋常ではなかった。

でもどこかで、あの不調は絶対にセルと関係している、という予感があった。

はっと気づいて、私は足早にカウンターに向かう。

レジにはちょうど、男の人が一人。ラックの整理をしているとこ

るだった。近寄ると

「いらつしゃいませ」

と丁寧に言つてちゃんと正面に向き直つた。胸に店長の文字がみえた。

「あの」

ポーチから財布を出す。「この会員カードを作りたいたいんですが」

「ありがとうございます、じゃあ、こちらのカウンターへ」

店長が、一番端のサービスカウンターに案内してくれた。

「ではまずこちらの会員申し込みに記入していただけますか」

白い用紙を手際よく引っぱり出して目の前に軽く滑らせてよこす。ペンを借りてまず名前を入れようとした時、勇気を出して

「このカードで、優先会員みたいな扱いはできますか？」

言いながら、黒い『セル会員カード』を店長に差し出した。

「はい？」

ごく普通を感じてそれを受け取り、店長はさも当然のようにこう答えた。

「セル会員ですね、できますよ」

「えっ」

かえつてびつくりする。「いいんですか？」

「セルユーザーの専用台帳に、セル・ネームとセルの会員番号、そのカードに入ってるエンボスナンバーを入れて頂ければ今日からすぐ借りられますよ」

「そうなんですか？」

「一回の貸出で1ポイント使用しますけどね」

「代金は」

「頂きませんよ」店長はあっさりと言った。

「だって、セル会員でしょう？ ポイントのみ使用ですのでお代金は頂きません。貸出期間も一応2週間ですが、特に延滞料金もかかりませんよ」

「じゃあ、今日からもう借りられるんですか」

「はい、とりあえず台帳登録だけはさせて頂きますが」

そこまで浸透しているものなんだ、逆に怖くなってきた。しかし、そこで気づいて聞いてみる。

「ここのお店、セル会員の方でまだレンタル会員の人っているんですか」

「はい、まだあんまり多くないんですがね」

店長は個人情報などという言葉に無頓着のようで、ぺらぺらとしゃべっている。

「あなたの他にも10人くらいはいらつしやいますねえ」

そう言いながら台帳を拡げてみていた。

「それじゃ、」

動揺を押し隠しながらさりげない口調を崩さずに聞いてみた、あまり覗きこまないように注意しながら。

「チエちゃんもセル会員だったって言うってたな。チエって名前の子います?」

店長の指が一か所で止まる。「いいえ、でも他に学生さん……他にもいらつしやいますよ」

セルネームに『イーリア』とあるところを彼はとんとんと叩いている。

年齢は生年月日からみて私より一コ上。

見つけた!

さりげなく住所を目に収める。この近くの住所表記で見たような場所だ。

私は書かれたものにあまり興味が無い風を装いながら、あ、とつぶやいてから言ってみた。

「すみません、先に行くところがあつたんだ、この登録用紙、家で

書いてきていいですか」

「はあ」

不審げな返事だったが、笑顔を向けると店長はすぐに相好を崩し、はい、と紙を差し出した。

「では、お待ちしております」

「はい」

私は精一杯の笑顔を貼り付けて店を出た、頭の中に刻んだマンシヨン名とルームナンバーが消えないうちに。

マンションのドアが静かに開く。

そあら先輩……いや、イーリアが私の目の前に立っていた。

イーリアは薄いYシャツ一枚とボクサーパンツのような下着をつけているだけだった。

長い髪はやや乱れて肩を覆っている、前髪が伸びてしまったようで、合間から黒い瞳を光らせるようにこちらをうかがっていた。ワイシャツの下にはブラすらつけていないようだ。

「来ると思った」

彼女は小さな声で言った。奥に入っていく彼女に、あわててついて中に入った。

セルネームは何？ まずイーリアはそう訊ねた。

聞きながらも彼女は冷蔵庫を開けてペプシZEROを2本出してから1本をこちらに勧め、自分のを胸に抱えるようにベッドに向かった。しかたないので後に続く。ちらりと見えた冷蔵庫の中にはペプシZEROしか見えなかった。

寝室は開け放たれていた。椅子はないので入口付近に立っていた。イーリアはどさりとベッドに身を投げ出す。

「ライム、です」

「カンキツの？」

「いいえ」

説明しようとした時、すぐにイーリアが言った。

「詩音、だからRHYME、韻を踏む、のライムね」

「はい」
すぐに分かってくれたんだ、暖かい想いがふわりと拡がる。

イーリアは喉が渴いたかのようにボトルを傾けて息継ぎもせず、半分ほど飲み干した、白い喉首が無防備に晒されている。

「はあ、と息をついた時、おそろおそろ聞いてみた。

「来ると思った、と言いました？」

イーリアは天井を見上げたまま言った。「教えてもらったから何となく息が辛そうだ。」

「誰に？」

それには答えなかった。逆にこう訊いてきた。

「ねえ、ライム」

そあらは、はずむ息の下からようやくこう言った。

「アナタは、何を、捧げたの？」

「捧げ……た？」

目の前、しどけない姿で横たわるそあらから目が離せない。

「捧げた、ってどういうことですか」

「大切なものを、捧げたんじゃ？ アイツらに」

「ああ」

セルの質問に対する答えのことを言っていたのだ。

「中学校時代の、親友との思い出、って」

「捨てたの？ それを」

「捨てた、ってわけじゃ」

「では、今思い出せる？」
「……」

ルネが言っていた。ミホちゃんのこと、忘れたの？ 中学の時にあんなに。

あんなに、何だというのだろう。

今までのクラスでの会話やギクシャクしたことの内容から、自分の元親友があの見宮末歩だったんだろう、ということは案外簡単に推論できる。

ルネは最初、ふたりがまだ仲のよかった時に知り合ったのだろう。だから私にもあんな事を言ったのだ。

確かに見宮末歩の顔はすぐに頭に浮かぶし、入学してからよくお弁当一緒に食べていた。

でも、本当に親友だったという記憶はない。たまたま同じ中学で同じ部活だった、というだけで、向うから慣れ慣れしてきただけとしか思えなかった。

「書いたのは自分なら何を寄付したのか推測しただけで……実際、はつきり覚えてませんし」

親友、どうやって二人は親しく付き合っていたのだろう、どうしても思い出せない。

大お弁当大会です！

はりきったようなあの叫びがまた耳に蘇り、すぐに消える。

「思い出なんて手放すからよ」「せいせいと息を切らせて、そあらが身を起こす。」

そのあざ笑うような言い方に、少しむっとしてこっぴどく切り返した。

「じゃあ、イーリアは何て書いたんですか」

「ワタシ？」彼女は顔をゆがませた。

「聞きたいの？」

「ていうか、私の聞いたじゃないですか、私も聞いていいんじゃないですか？」

そあらは笑いながら言った。

「うちの母はね」

急に変わった話の流れについていけない、黙って続きを待った。

「うちの母は、かなり前にセル会員になったの、同じ職場の同僚に聞いたらしくてね」

イーリアの話はにわかに信じられなかった。

彼女の母親は大切なものに『二人の子どもたち』と書いたのだ。

「えっ」

すぐにのみこめなかった。子ども？ 人間、ということなのだろうか。

「どうしたんですか？ 何を寄付したんですか」

「聴こえなかった？ 莫迦な子」

イーリアは笑いながら言った。ちょっとひんやり冷たい言い方になった。

「子どもを寄付するのはどういふことが、やはりセルに相談したらしいわ」

「……人間を、ってことですか？」

「『家族』と言う概念だということに落ちついて「イーリアは目を
つぶる。」

「彼女は兄を組織に手渡した、父はそれを知って家を出た。もう五年になるけどね。母はワタシを取った、でもね、母にとってもう私は『家族』ではなかったのよ」

「……意味が分りません」

「もともと、母はワタシよりも兄の方が好きだった、何をするにもまず兄が優先、外出も、好きなものを買うのも、学校の行事が重なった時も母は兄の方を優先した。それに元々、仕事一筋の人だったからあまり家にもいなかったし、家族というより、単に義務的につながっているあかの他人、という風だったわね」

「でも、お母さんはイーリアと暮らすことを選んだんでしょ？」
それって」

「母はこう考えたのよ『女の子の方が育てるのが楽だし、大きくなったら役に立つから』」

つまり、道具みたいなものね、便利な道具、自分にとって。

母はセル会員になってからも相変わらず忙しくて、ついには家にも寄りつかなくなった……」

母親は彼女が高校に入った頃出て行った、とミナミが言っていたけれど、その辺の事情も関係しているのだろう。急に家族がバラバラになり、四年近く不在がちな母親と過ごし、そして終いにはその母も出て行ってしまった、なのに。

「母が私の目をみたことなんて、一度もなかったわその四年もの間」

重苦しい沈黙をようやく破って訊ねてみる。

「イーリアはいつからセル会員になったんですか？ それにどうして自分も会員になったりしたの？」

「会員制度ってけっこう充実していてね」

イーリアはまたけだるげに身を起こした。

「提携先の興信所を安く使うこともできるのよ、母が時々、会員特典を利用して父の素行調査とかしていたし、兄がどうなったのか調べてもらったりしていたのを見たから」

ライブの時やビデオシヨップでも驚いたけれど、そんなサービスまであるなんて。

「母が出て行ってすぐ、ワタシも会員に登録した。母は教えてくれなかったけど、大切なものを登録するというのは知ってた。それをアイツらに渡すというのも薄々気づいてたわ。だからかなり慎重に選んだつもり、大事なものを」

高校に入ってすぐ、会員になったのだそつだ。

「イーリアは何を寄付したんですか」

「『健康』よ」

彼女は元々喘息の気があった、中学を卒業する頃にはかなり体質が改善されていたが、それをあえて選んだのだと言つ。

「健康をアイツらにやるのは案外簡単よ、イヤーエイクがついているから、個人の体調管理だってヤツらは思いのまま。時にははこうして寝込んでしまうほど具合が悪くなるけどね」

それで、会った時にもあんなに咳き込んでいたのだろうか？
聞いてみると答えは意外にも「違うわ」だった。

「咳が出たのはね、セル会員は会員以外の人に立ち入ったことが話せない仕組みになってるのよ」

これも意味が分からない。立ち入ったことが話せない仕組み？
どうやって？

イーリアはじつと私の顔を見つめた。

そしてまた白い手を伸ばす。あっ、と思った時にはすでに耳を掴まれていた。つい、彼女の方に身をかがめてしまう。

「ここからね、相手が会員で無い場合に細かい話をしようとする、妨害電波が発生するの、大概は目眩か胸が苦しくなるか、ワタシの場合は咳がひどくなって話ができなくなる」

「それって」

天井に近い方に目を移し、思い出してみる。まだイーリアの手は耳から離れていない、それが嬉しくもあり、くすぐったい感じ。頬が熱くなってきた。

でも、これだけは引つかかっている、ようやくことばに出せた。

「それって私でもそうなんですよね……会員じゃない人に、詳しく話せないのは」

「もちろんよ」

「それじゃあ」

近くにきたイーリアの顔をなるべく見ないように考えを集中させる。

「どうして、モスで話ができただろう、ルネに」

「ルネ？」次のことばで、せっかく外した視線をもろに彼女にぶつけてしまった。

「当り前よ、あの子も会員だから」

急に景色がぐらりと回転したような、足場の危うさでよろめいた。イーリアの手が私の頭を支える。胸の白さがシャツの合間から覗いている。

近い、あまりにも近い。

「知ってたんですか？」

「この辺りの会員については、大体把握している」「イーリアは私から手を離さない。」

「ねえ」

甘い息。また、私の脚から力が抜けていく。

「イヤーエイクは、私たちを掴んでいるのよ、こんなふうだね」

最初に会った時よりはもう少し優しく、彼女の指が耳たぶを掴んでいる。温かい指。脈動が伝わり、私の鼓動と混じる。

ああ……とつい喘ぎが漏れてしまったのか、彼女は私の顔を見て優しく笑った。

「色々な感情や感覚、アナタが思っている以上に、イヤーエイクはアナタの人生を操っているの。アナタ、人生は理性で制御できるなんて、思ってた？　もしかして」

だったらイーリアはどうなんだろう？　彼女はなぜ、イヤーエイクに人生を渡そうと思ったのだろうか？

さつきは答えをはぐらかされてしまったような気がする。でもどうしても彼女の核心に近づけない。耳が痛い。

もっと聞きたいことはたくさんあったけど、ようやく出せたのがこのことばだった。

「……学校、辞めちゃったんですよね」

「ねえ、ライム」それには答えないイーリア、私を抱く腕に力が入る。

「アナタ、思い出は何ポイントになった？」

「……50ポイントです」

「健康を売ると70ポイントもらえる。で、家族を売るとね」

イーリアはまた笑みを浮かべる。

「100ポイントも加算されるのよ、覚えておくといいかもね」

「あの」

聞きたくなかった、でもつい口が動いてしまった。

「お母さんは、どうなったんですか」

「さあね、セルに転職してたりしてね、野心家だから」

イーリアは固く、目をつぶり仰向けになった。手はまだ私から離していない。だから私もいきおい、ベッドにもたれかかるようにかがみこんでしまった。

彼女に覆いかぶさる形になった。両腕をベッドの枠にかけて精一杯突っ張っている、私は何かに呑み込まれそうになっている小さな虫のようだった。

シャツが完全にはだけ、ブラもつけていない生々しい彼女の胸がすぐ目の前に迫る。白い。可愛らしく盛り上がる先端を目に入れなように私は必死で目をそらす。

甘く、わずかに饅えたような汗の香りに耳が熱くなった。柔らかくなだらかな丘が、熱と香りとで私に存在を主張しているかのようだ。

耐えられず目をつぶる、でも、あの白さが目から離れない。下腹部がきゅっと縮まって、切ない痛みが走る。ああ、耳が痛い、いいえ、心が。

「ねえライム」

目をつぶったまま彼女が言う。

「今日は泊まって行ってよ、アナタ……ワタシが欲しいんでしょ？」

そのままだったらどうなってしまったか、自信がない。

身体も心も固まった次の瞬間、イーリアは細い腕をぱたりと落とし、すーすーと寝息をたて始めた。

背中を冷や汗が伝って落ちる。

私は息を止めたまま足音を忍ばせ、後も見ずに外に出た。

表に出たところ、誰もいないのを見計らって

「もうイヤ！」

小声で毒づいてみる。

あけすけな彼女の言い方も投げやりな感じで嫌だったし、どこか期待を失ってしまった自分も情けない。

何よ、どうして好きならばすぐに身体を求めようなんて思うの？
訳分らない、サイテー。

ダイキといい、イーリアといい、あまりにも安易だ。私の気持ちなんてどう思っているんだろうか。どうしてこっちまで、そんなことを求めていると思えるんだろう？ イヤーエイクをつけているから？ これをつけていけば、欲望の赴くままに楽しみを貪って当然と思われるの？

私は違う。

どう違うか、って？

私は……

身体が熱く燃えるように反応した。それは確かだった。

イヤーエイクのせいだ、と思う反面、こっぴどく声もしつこく頭に響く。

『モトモト、あんたガ モトメテイル モノナンダッテ』

イヤーエイクのことについて、誰かと真面目に話をしたい。ちゃんと相談に乗ってくれる人を知りたい。

イーリアならば、もしかしたら、と思っていたのだけれども。いや、急に自宅に押し掛けてしまったからあんなおかしなことになってしまったんだ。外で会えれば、もっと突っ込んだ話ができるかもしれない。

その時にはちゃんと行ってやろう。

イヤーエイクがついていても、本能の赴くままに抱き合いたい、とかそんなのはおかしいです、って。

でも……

学校もやめてしまったんだよね、彼女。だったらどこでまた会えるっていろいろ？

ムシャクシャした気分のままぶんぶん腕を振りながら歩いていた。

家の近くに着いた頃にはすっかりあたりは暗くなっていた。

角を曲がって家の外塀がみえた、というその時急に、腕を掴まれた。

「ねえ」

ひっ、と息を吞んでふり返る。

見宮さんがじっと立っていた。最初は怒っているのかと思った。
でも

「シオン、ほんとうごめん」

まず、彼女はそう謝った。

「ごめん……て何」

「何であんな態度とったか、ルネから聞いたよ」

ルネが？ 眉をひそめたところを、見宮さんがぐいっと引き寄せ
る。

「ルネ、全部話してくれた、セルのこと」

ルネが見宮さんに？ 自分も実は会員だと話したのだろうか？

そんな疑問も束の間、いきなり見宮さんに抱きつかれた。

「ほんとごめん、それに、嬉しかった、ありがとね」

「……どうして」

「一番大切なものにアタシを選んでくれたんだね、それでこんなに
なっちゃったんだね」

息がつまる、彼女のツインテールの毛先が跳ねて頬に当たった、
その時気づいた。

見宮さんの耳に、イヤーエイクがついている。

「アタシも、大事なもの登録したよ」

私の首筋に顔を近づめるようにして、見宮さんが言う。その体は

暖かく、ふわりとしていた。

おずおずと彼女に腕を回そうと手を伸ばして、ふと違和感をおぼえる。

見宮さん、右手を背中に回している？

「シオンが登録したものを、ルネから聞いたの、アタシも同じ、大切な人はシオン」

見宮さんは身体の右側を不自然に後ろにひねっている。

力がどこか、おかしなかかり方をして、ぎゅっと抱かれているのどこか引き離されているような距離感。

急激に風が巻き起こる。

とっさに見宮さんを突き飛ばした。左腕、上の方に何かがかすっていった。音がしたのかどうかも分らない。

尻もちをついた時、左肩の近くに激しい痛みを覚えた。

街灯の明かりの下、振りあげた見宮さんの右手に何か白く光った。

細く長い、握った拳の上に光るのはカッターナイフの刃、普段使
うには考えられないほど長く引き出されている。

そこに目が釘付けになる、冗談抜きで、本当にあれはカッターだ。
横目で腕をみる、布が横一文字に切り裂かれ、黒く濡れていた。染
みはだんだん大きくなる。

あれで切られたんだ……傷は？ 見たくない、まだ痛くないけど
絶対見たくない。

「だから、大切な人を寄付しなければ」

「ねえ待って」

私は尻もちをついたまま後ずさる、左手はできるだけ地面につか
ないように。頭の中がごちゃごちゃしている。

「なんで？ 刺そうとしたの？ カッターで？ それカッターナイ
フでしょ」

最後の方、声が裏返ってしまった。

「そうだよ。外国ではカッターナイフって言わないの。ユーティリ
ティっていうんだって」

見宮さんはどこか呆然としたような歩き方で近づいてきた。
でも、細身の刃を上向きにしっかりと構えている。

「アタシもセル会員になったんだ、大切なものというところに、親
友の未歩、って書いてくれたんでしょ？ だから私も」

「違うよ」

鋭く遮ったところで彼女は、ぴたりと足をとめる。

「ちがうの？」

あの言い方、覚えがある。平板な声の調子。

「違うよ、というか違わないけど違う」

焦るなシオン、自分を勇気づけながら、傷を押さえてようやく立ち上がった。

「私は、親友との三年間の思い出、って書いたんだよ。見宮さん、ううん、ミホそのものじゃない、思い出を寄付したの」

「ルネはそんなこと言ってなかったよ」

「何でルネがそんなこと、ミホに話したの？」

「モスでシオンに呼ばれて話を聞いてきた、って言ってたよ。シオンがセル会員になる時に条件として一番大切な親友を寄付するように言われた、って」

「えっ……」

なぜルネは部外者に話ができただの？ セル会員だと聞いたばかりなのに。

それに、どうして見宮さんにそんなことを吹き込んだのだろう、なぜ直接話を聞かせようとしなかったのだろうか？

ルネは明らかに嘘をついているとしか思えない、そして、何かを企んでいるとしか。

ルネに会わないと。

でも、今はまず見宮さんを説得しないと。

「ねえ、聞いて」次の言葉は一閃する刃と共に消えた。

灯りの届かない暗がりから弧を描いて降ってきた凶器が目の前を横切る。とつさに頭を下げ、バネをきかせて後ろへと跳んだ。前髪がはらりとひと房散った。

見宮さんは、黙ったまま、また右腕を後ろに引く、テニスで言うところ今度はバックハンド、左手でこちらの胸倉をつかもうと、ぐいと一歩思い切り踏み込む。ツインテールが鞭のようにしなる。彼女の伸ばした手首を私は逆に左手で掴んだ、痛みが電流のように脳髓にまで達したが次に切り裂かれるのはその脳髓かも知れない、必死で相手の右手首を右手で捕まえた。振り下ろされた切っ先が右ひじの内側まで届きそうになる。細くて長い刃、薄いし頼りなげで、とても武器になりそうに見えない。でも切れ味は抜群、殺すのには最適だろう。持ち手の部分が鮮やかに黄色くてまだ新しそう、グリップはやや太めで、人を襲うのにはもってこいという感じもする。鋼色の刃先はいかにも血を求めているかのような鈍い煌めきをみせていた。

刃先にかすかにピンク色の膜がみえた、一撃目に受けた傷の血なのだろう。

「待ってよ、見宮さん！」

握った手首の押し戻す力があまりにも強く、押さえていられない。見宮さんの力は半端なくすごい、今にも押し切られそう、開いた足が細かい砂利で滑る。

じりじりと後ろに押されているうちに、目に汗が落ちてきた、いや、汗だけじゃない、さっきやはり額を切られていたのだろう、血

がたたりとこめかみを伝っているのがわかった。傷に汗が滲みる、そしてこめかみだけではない、目にも汗なのか血なのか入って、視界がぼやける。

「お願い」

歯を食いしばって、その力に耐える。じり、じりと押されている。

「アナタがやるうとしてしているのは、殺人なんだよ、ヒトゴロシなんだよ、よく考えて」

「うん、よく考えてる」

軽い返事なのに、見宮さんの腕は岩のようにびくともしない。

しかも、わずかずつではあるけど、刃はこちらに迫っていた……じりじりと。

「同じようでも、全然違うんだよ、私は見宮さんを殺したいだなんて思っていない、ただ」

「ただ、何？」彼女は笑顔のまま訊き返す。汗が額から噴き出し、やはり目に入っているのか何度かまばたきしている、いや、涙を流しているのだろうか。

「ただ、思い出を寄付しただけ」

「アタシとの貴重な、思い出だったんでしょ？」

「もちろんだよ」

「嘘」

急に声も鋼色にかわった。

「なぜ捨てたはずの思い出を『捨てた』こと、覚えているの？ それに」

刃先が更に迫った。その先は私の首すじに向かっている。

「思い出だったら捨てていいなんて、どうして思ったの？」

「え……？」

「思う人がいるからこそ思いは残るのよ、その思いが残ってないってことは、それは『無』ということじゃないの？」

だったらアタシは最初から、『何も無い』方を取る」

すでに切っ先は皮膚に触れんばかりだった。私は言い返すけど、声が震えている。

「思ってくれない人だったら、必要としないの？ 存在が無くなってしまうっていいの？」

「そうだよ」

「そんなこと言ったら、世界中のほとんど全ての人が、アナタにとって不要ということじゃないの？」

「セルは違う」

見宮さんの目にはあの、輝きがみえた。

「セルのメンバーは全てがすべてのメンバーを必要としている、その人の幸せを願っている、アタシはセル全体の幸せを願っているし、

セルもアタシの幸せを」

「私もセルメンバーだよ」

「その前に……シオンはアタシの大切な人」

「だったら殺さないで」

「知ってる？」

完全に目の色が変わっている。ガラス玉、それともベツコウ飴？ さっきまで輝いていたものが急激に醒めて艶を無くしたような色だ。

「寄付された人間は、その場で死んだ方がマシなのよ……連れて行かれるよりは」

「……何の話？」

目が気になってその動きについていけず、思わず手を離す。迫っていた刃先が視界の下に沈み見えなくなった、と気づいた時には

それが頭のすぐ脇を薙いだ。

下から上に、空に投げ上げたような勢いで。

風がびゅん、と鳴り生温かい疾風が吹き抜ける。

目の前に、白い何かがひらりと落ちた。

「あ……っつ」

自分の耳を、地面に見おろす。一瞬、起こったことが全く把握できなくて呆然と立ちすくんだ。涼しい、頭の横に風がふきつけているようだ、しかし次の瞬間、熱い痛みの奔流が襲ってきた。

「ごめんなさい、かすっちゃった」

全然悪いとは思っていないようだった。歌でも歌っているようなか細い声。

「今度はちゃんととどめを刺す」

夢見るような口調だった。

「アナタは私たちの大切なセル、そう言われたでしょ？ その仲間に入りさえすれば、私も幸せになれる。いつ友情が壊れるか、いつ裏切られるか、そんな心配もせずに済む、心を細らせることもない、気に病む事もない、いつもイヤーエイクが守ってくれる」

「それは、本当の幸せ、ではないと思う」息をするだけで目眩がする。

「それに、さっき言ったけど、私も、セルの、一員なんだよ」

「しかたない、たまたま寄付した相手がセル会員だった、それだけのことだよ」

左耳のあったところをぎゅっと手で押さえながら、頭を傾けて彼女の出方を伺っていた。

耳が、取れた。不思議なくらいショックはなかった。

ただ、痛みはどんどん酷くなっていく。出血も酷そうだ、しかも押しえた手のひらの隙間から、ぼたりぼたりと暖かい血が滴り落ちているのが感じられた。

もうひとつ、不思議なこと。心の中が急に澄み渡ったように晴れ晴れとしてきた。

ものすごく痛くて、目が回りそうなのに、吐きそうなのに。

でも、逆にすごく気分がいい。

なぜって？

口の端に笑いが浮かぶ。

イヤーエイクが取れたとたん、私は、取りかえした、全ての記憶を、細かいヒダの内のうちまで。

目の前に立つミホ、この親友との一部始終を。

「じゃあ、」

まっすぐ、私はミホの前に立った。

目の前に黒い点々が舞っている、でも、ここで倒れたくはない。

「お願い、あまり苦しめないようにして」

あごを上げて、喉首を晒した。

「ミホ」

祈るように目をつぶる。

アナタは本当の親友、本当のともだち。そんなアナタがそれで救われるのならば、それで満足するのならば、私は今ここで命を捨てても惜しくはない。

元はと言えば、私の軽率な振る舞いが招いた災いなのだから。

「お……ねがい」

膝をついて、前に倒れそうになるのを堪えた、痛みは脈打つように襲ってくるのに、それに増して急激に周りの空気が冷えてきたような感覚、そして、激しい眠気。

ミホが刃物を振りあげた、その後記憶が途切れた。

仰向けになつたまま、私は白い天井を見上げている。

身体が軽い。

ふわふわとその白い天井まで、そしてそこを突き抜けて空まで飛んでいけそうだ。

「気がついた？」

誰かの声がした。水の中で聞くような、くぐもった遠い感じ。

若い男の人の声、とても優しい響きだった。もうだいじょうぶだよ、とその声が続ける。

目を開けると、そこにいたのは

「……ヒロカワ、せんぱい？」

枕元の人は驚いたように軽く目を見開いた。

「僕のこと、知ってたの？」

「学校でみたの、思い出して。だってミホが」

ねえ演劇部のヒロカワ先輩ってさ、すごくカッコいいんだよ！
ほら今出てきた、見てみて！

あの威勢のいいミホの声が一瞬蘇った。

「ミホがよく、言っていましたから」

鼻の奥がつん、となる。

「演劇部のヒロカワ先輩、ほんとカッコいい、って」

「そうなんだ」

照れた様子もなく、淡々と彼がつぶやいた。

「見宮さん、そんな事言ってたんだ。いつも特に口きいてくれなかったけど」

「照れてたんだと思います」

何でも開けつぷろげな言い方をするくせに、本当に好きな人の前では何も言えない、みたいな。

ミホ、けつこう可愛いところがあった、そこまで考えて急に過去形で思っている自分に気づいた。ヒロカワ先輩がいるのも気にしている余裕がない。

「ミホ……ミホが」

後から後から涙が出る。左手が伸びない、動かせたのは右腕だけ。片手で溢れる涙をぬぐう。

先輩がティッシュ箱を差し出す。ありがとう、と受け取ってから急に彼の存在が気になった。

でも、もっと肝心なことがある。鼻を拭いてから彼の顔を見上げる。

「じじ、どこですか?」

そう問うと、ヒロカワ先輩は

「僕の家だよ」

あっさりと答えた。

びっくりして飛び起きようとしたら、刺すような痛みにもた、二つ折りになってベッドに伏した。脈打つような痛みは、左の耳のあ

たりからしている。

暗闇にはらりと落ちた自分の耳の一部が、いやにはっきりとまぶたの裏に浮かんで消える。

耳が切れたんだ、そつと耳に触れてみようとしたが、いつもの距離よりずいぶん近く、まず分厚いガーゼの壁に阻まれた。

何だかざらざらして、暖かい。そして固く頭を覆っている。

ぼんやりと見渡して、部屋の全体を目におさめる。

まるで病院の一室のようだ、入院病棟というよりも、もう少しこじんまりした感じで、少し広い処置室という感じ。寝ていたのは一番窓際で、空っぽのベッドがもう二つ並んでいた。

先輩が静かに脇にある窓のシェードを巻き上げていった。

真つ暗な中に控えめな夜景が広がっている、ビルの三階くらいだろうか。そこがどこなのかさっぱり見当はつかなかった。

しかし、ガラスに映る自分の姿に思わず息をのむ。

左の耳を分厚く押さえているまっ白な塊、包帯はぐるりと頭頂部からあごにかけて白く巻かれて、額にも鉢巻のようにぴったりと回されている。合間からのぞく髪が無造作に乱れ、毛先が跳ね上がっていた。額の傷にもべたりとガーゼが当てられている。

「やだ」

思わず髪を押さえようとすると、そこへ

「気づいたかい？」

年配の白衣の男が入口から姿をのぞかせた。

黒い縁の眼鏡できつそうな顔にみえたが、笑うと急に人のよいオジサンになった。忙しなく身体を揺すりながらも近づいてきて、そつと傷口のあたりに触れた。

「出血が少なくてよかった、目眩とか気持ちわるいとかはないね、熱っぽい気はしない？」

少し早口で言ってから、先輩に一瞬目を移してからまたこちらをみて、えへんと咳払いをした。

「今夜はゆっくり休んでいきなさい」

ヒロカワ先輩も同じように咳払いをして、ためらいがちに「僕の父だ」

目線でその人を指してから、続ける。

「その包帯じゃ、家には帰れないだろう？ 今夜」

そうだった。包帯を押さえ、唇をかみしめる。

急にリアルに、ミホのことを思い出す。

ちゃんと家に帰れただろうか？ ナイフを持ったままどこかをさまよい歩いていないだろうか？ 白いシャツだった、血も飛んだだろう、途中で警察なんかには捕まっていなかっただろうか？

「ミホ……」

また新しい涙がこぼれてくる。

先輩のお父さん ヒロカワさんの確かな声がした。

「君に斬りつけた子か？ 彼女ならだいじょうぶだろう……しばらくは」

だいじょうぶ、ということばとしばらく、ということばにちょっとひっかかった。

手の甲で頬をぬぐいながら見上げて聞いた。

「どういうことですか」

かなり泣いたので少しすっきりしたのか、ようやく、声が少しだけまともに出せるようになってきた。

「いずれ分かるから」
先輩が答える。

いずれ。今は確かに悪夢の中のよう……ぼうぜんとしたまま、暗い窓に映る自身の姿を見やる。

怪我したんだ、これもリアル。

思い返してもまだ信じられない。本当に、ほんとうにミホに斬りつけられたのだ、セルが原因で。

ミホはセル会員になってしまった、自分と同じく。

「私」

両手で顔を覆う。収まったと思っていた涙がまた溢れだす。

「もう家に帰れない、耳もそうだけど……ミホが。ミホが私を狙ってる、それにミホだってこれからずっと、ずっと」

「キミ自身についても、セルに悩まされることはもうないはずだ」
ヒロカワさんが眼鏡を押し上げた。

「イヤーエイクは取れてしまったらどう？ もうアイツらに操られることはない」

「取れた？」

また窓に映る自分をみる。

そこには同情的に自分を見つめる男がふたり、一緒に映っていた。

「碧、」

父親にうながされ、先輩は息をいったん吐いてから、片手で髪を持ち上げて、私に見せるように自分の左うなじを晒してみせた。

左耳が透き通る白さできれいな形をみせている。傷も穴も特に見当たらない。

黙って耳をみつめていると、アオイ先輩は静かに告げた。

「父が整形した、もう1年以上前だけど」

驚いたまま声が出ない。先輩が続けた。

「耳を、斬り落したんだ、自分で」

「自分で？」

ヒロカワ親子が顔を見合わせる。どちらも真剣な表情だった。

ヒロカワさんが黙ってうなずく、アオイ先輩はまたこちらに向き直った。

「キミに、一つだけ手がある、そう言ったよね」

「……モスの近くで」

「そう、それがこれだよ」また耳を見せる。

「セル会員から抜けるたった一つの方法、それは」

「……イヤーエイクを外すこと？」

違う、外すことはできないんだ、彼が強く言った。

「もぎ取るしかないんだよ、自分の耳から」

「もぎ取る」気づかないうちに繰り返す。

「そう、もぎ取るしかない」

ヒロカワさんも重々しく言って、またこちらをまっすぐ見つめた。

また、耳に手をやってみる。イヤーエイクがついてからこれがクセになっていた、でもそのイヤーエイクはもうここにはない。

「他にも……」

重大なことに思い至る。

「他にもこうして、取ってしまった人たちはいるのかしら？ ミホは？ ミホもイヤーエイクが取れば、また元に戻るのかな」

「もちろんだよ」

ヒロカワさんが私の手をとった。

「私の知っている限りでも、少しずつセルの実態に気づいて、同じようにイヤーエイクを切除した人たちがいるよ、何人もね。ただこれは神経に入り込むからかなり大きく耳介を切除しなければならぬ、それに耳以外に付けてしまった人の切除処置はかなり大変だ」

それでも、過ちに気付いた人びとは少しずつ仲間を増やしているのだと言う。

ヒロカワさんがかすかに笑った。眼鏡の奥の目は最初思っていたよりずっと優しそうだ。

「キミは偶然とは言え、かなり運が良かった。耳介の整形も傷を見た限りではそれほど難しくない」

「それより難しいのは」

アオイ先輩がまた厳しい表情をみせる。

「仲間を集め、セルの力を止めること、奴らの正体をあばいて暴走を止めることだ」

仲間になってくれる？ 先輩のすぎるような目に、吸い込まれる

ように見入ってつい

「わかりました」

とうなずいた。

父子はほっとしたように顔を見合わせる。今度は先輩が握手を求めてきた。

「ようこそ『フィンセント・クラブ』に」

「ふいんせんとか？ 何ですか、それ」

「ゴツホの名前だよ、フィンセント・ファン・ゴツホ。知ってるかい」

「はあ」

ヒロカワさんが笑いながら言った。

「一応私たちにも名前があるんだ、チーム名がね」
先輩が続けた。

「耳を切り落としたんだ、彼も」

「ああ……」

どこかでそんな絵をみた記憶がある。包帯を耳まわりに巻いてパ
イプを啜えた画家の自画像。

「でもあの人」ケンカして自分で耳を切り落としたんじゃない？

「確かに狂気と紙一重かもね」

アオイ先輩がどこか自虐的に笑う。

「だから僕らのモットーは一つだけ

『カラスの飛ぶ小麦畑に入るな』と」

廣川^{ひろかわ}クリニックは外科・整形外科・形成外科を専門とする、この辺りではかなり大きめの個人病院だった。

診療の他にも、手術や入院も可能だけど、救急対応は近くの大きな総合病院に任せているので、夜間の出入りは入院患者の家族くらいのもだった。

四階建てのビルの二階に受付、診察室、検査室が入っている。

私はこっそりと、処置室に一泊することになった。

家には看護師さんが一人、声をもっともらしく装って電話を入れてくれた。

電話を切った看護師さんは、すぐ脇で心配そうに覗いていた私に向かって、無邪気にふふふっと笑ってから、じゃあね、また夜中にこっちも回るから、何か困ったら遠慮なくナースコール押してね、と言って慌ててどこかに去っていった。

看護師さんが去っていったら急に静かになった。

一つ上の階は入院病棟で、約20人ほどの患者が現在も入院しているらしい、でも物音ひとつ響いてこない。

最初は窓のシェードを上げていたけど、暗闇が見えているのが怖くなって急いで起き上ってシェードを下ろした。

ぜんぜん眠れそうもない。

フィンセント・クラブという名前が頭の中でガンガン鳴っている。

セルという恐ろしい囲いから逃れたばかりだというのに、もうすでに新しい囲いの中に捕えられたような息苦しき。

今夜はここに泊まればいい？ 明日帰れるの？

でも耳は？ 包帯はパパやママに何て説明すればいい？

本当にイヤーエイクは取れてしまったの？ セルはもう何も影響ないの？

ミホはどうなってしまっただろう？ ルネは？ そあら先輩は？

頭の痛みは激しく脈打つようで、薬は効いているはずなのに傷の痛みもだんだんと酷くなってきた、しかも、寒気が襲ってくる。

ナースコールを押すと、ややあって、先ほどの可愛い看護師さんが駆けつけてくれた。

「……痛い」

看護師さんの当ててくれた手が、包帯越してもひんやりと気持ちいい。

「傷が大きいから、熱が出て来てしまったのね、待っててね」
声も優しい。

しばらくしてから、点滴を用意している音が耳に届いた。

「ねえ」

点滴の処置を終えて去ろうとしていた看護師に呼びかける。

「ワタシ、本当に大丈夫なのかしら」

「熱はよくあることよ」

また、ひやりと気持ちのよい手が額に触れる。

「抗生剤が効いてきたらだんだんよくなるから」

「家に帰れる？ 明日」

「一瞬遅れて返事があった。「何も心配せずに眠って、おやすみなさい」

まだ訊きたいことはたくさんあった。

だが、そこで引きずりこまれるように、私は眠りの中に落ちていった。

翌朝早く、すでに白衣に身を包んだ廣川先生が、しかし青い顔を
して駆けこんできた。

「ミゾロギ君、たいへんだ」

続いてアオイさんと昨夜の看護師さんも飛びこんできた。「僕ら
も今、知ったんだ」

なんですか？ と訊く前に先生が携帯のテレビを突きつけた。二
ユー画面だった。

木造2階建て住居が全焼し、焼け跡から性別不明の三人の遺体が
……と男の声が淡々と述べている。映っているのはかなり暗い画面、
昨夜遅くのことらしい。

『木造2階建て延べ二二〇平方メートルが全焼、焼け跡から三人の
性別不明の遺体が発見され、警察はこの家に住む、現在連絡が取れ
ないミゾロギケンジさん五〇歳と妻のスミカさん四五歳、長女で高
校一年のシオンさん一六歳とみて確認を急いでいます』

何を言っているのか、全然ピンとこないところに画面の粒子が粗
く、まるで別世界の出来事のように映っていた。

うちが、燃えた？

ミモトフメイ、それ何？

それに今テレビの中から、知ってる人の名前が聞こえてこなかった？

他人が私の中から話しているみたいに、自分の声が意識からかけ離れて聞こえる。

「うちが、燃えてしまったんですか」

廣川先生たちの顔を見ることができなかった。
見てしまつたら、認めなければならぬ。

「でも」一生懸命、今テレビで流れた情報を噛み砕こうとする。
何かがおかしい。テレビは既に、次のニュースに移っていた。

「でも……」 そうだ、1人名前が出て来なかった。レイジは？

「弟は、弟はどうなったんですか」

「弟さんがいたの？」 看護師が妙に激しく反応した。「弟さん何歳？」

「今はそういう話じゃないだろう」 先生がそう言つてたしなめたが、すぐにこちらに向き直る。

「他には発見されていないようだ、弟さんもいたんだね。でも出かけていたんじゃないかな？ 火事があったのは0時頃だというのが」

「レイジが出かけた？ 夜中に？」

私は急いで起き上る。熱はもう下がったようで身体は軽い、しかし何となく目眩がした。

「夜中に出歩くような子じゃありません、塾とかも行つてないし、見た目はチヨロいけど……性別不明、って言つてたからもしかしたら弟も……」

急に目の前に光景が広がる、赤い炎を上げて燃え盛る我が家、怒号と叫び声、悲鳴、ガラスの割れる音、サイレン。

たいへん、こんな所で寝ている場合じゃない。

「帰ります。とにかくレイジを探さなきゃ」

「ちょっと待ちなさい」アオイ、と窓際で外を見ていた息子を呼ぶ。

「オマエがミゾロギさんと一緒にお宅に行ってやったらどうだ？」

「いいです、一人で帰れますから」

急いで帰りたい。

間に合うかもしれない。

絶対間に合わないのは分かっているはずなのに、なぜか今急がなければ何もかも間に合わなくなる、そんな焦りが胸の中に湧き起ってきた。

急いで帰れば間に合うかも……すべてが、元に巻き戻せるかも。

何もかもなかったことにできるかもしれない。だって

あまりにもあり得ないことばかりだもの。

看護師が慌てたように近づいてきた。

「アオイさん、先にミゾロギさんの処置を」

「うん……」アオイさんは何かを考えているように、言葉を切りながら言う。

「あの、君は昨日から色々とあり過ぎだし、これから警察とかにも連絡しなくちゃならないからさ、まず体力を蓄えてもう少し休んでいたなら、どうだろうか」

「それは」

自分の目で確認したい、だって自分の家のことだから、そう言いたかったのに看護師が注射針を注意深く目の前にあげて液を押し上

げているのを見て、急に怖くなる。

「そうしたらレイジをみつけれられないし」
語尾が尻すぼみに小さくなって消えた。

レイジの名前を出したからだろうか、急に涙がこみ上げてきた。

火事も、結局は私が原因だったのかもしいない。

本当に、お父さんもお母さんも死んでしまったのだろうか。

本当に？

嘘だよね？

どうしよう。

「僕が聞いてくるよ、弟さんも見つけて連れてくるから」

看護師がバンドを巻いてきゅっと締めつける。「注射、ちょっとチクツとしますよ」

「でも顔は判る？」腕を差し出しながら聞いてみたが、案外注射が痛い、つい顔をしかめる。

「たぶん」そこまで耳にした時、急にふっと力が抜けた。

次に目が覚めた時、まず見えたのは混じりけなしの心配そうな表情だった。

いつもならば空気みたいな感覚で気にして眺めたことなどなかったけど、こんな時には一番見たかったであろう顔……そう、

「レイジー!!」

跳ね起きて、少しかがみこむようにこちらを覗きこんでいた弟の身体をぎゅっつと抱き寄せた。

「な、な、ななな」

レイジは慌てて引きはがそうとした。「何だよ熱烈すぎだよーちゃん」

「良かった、生きてたんだあ」
涙があとから後からこぼれてくる。

レイジは苦しいのか照れているのか少しだけ後ずさりしようとした。

「何だよ、なにそれ。生きてた、って。こっちこそ心配したぞ、急に電話で呼び出されてさ」

「電話? いつ?」

「ゆづべの10時ちよい前。したらそのままユーカイされて。たいへんだったんだからな」

まるでテレビドラマでも見ているような軽い言い方だ。

「えっ?」私はあわててあたりを見回した。

いつの間にか、普通のアパートの一室らしき部屋に寝かされていた。
ワンルールの体裁で、一番窓際にベッドが置かれているようで、
弟のレイジは入口ドアとベッドとの間に立っている。

私が寝かされていたベッドは簡素な黒いパイプベッドで、頭のところ
に小さなサイドボード、部屋にはほかに目立った家具はない。
時計すら。

「火事のことはい聞いた？」

「え？ 火事？」

きよとんとしている。

短めの髪をイッチョマエにワックスで四方に突き立て、着ている
ものもストリートボーイじみたド派手な赤いパーカーに黒いジーンズ、
いつもはいきがついている表情も今に限って年相応に見える。

「どこで火事？」

あまりにも無邪気な問いかけに、私はレイジの胸倉を掴んで揺す
ぶってやった。

「うちよ、家が燃えちゃったって」

「えっ！？ なにそれ」

口をまん丸にしている、絵にかいたような驚き方だ。

「うちが？ なんで？ オヤジとお袋は？」

「分かんない……死んだかも。パパも、ママも」

とうとう口に出してしまった。絶対認めてはいなかったことなの
に。

喉の奥が熱く苦くなって、私は顔をゆがめる。

「なにそれ」

他に言うことばも思いつかないのか、レイジはそう繰り返した。

「もう1人死体があった、って聞いたからてつきりアンタかと」
レイジはぼかんとしたまま、私の顔を見ている。
「でも俺、ここにいるじゃん。なにそれ」

言っていることもばかっている。でも、逆にそれが真実味をおびていた。

レイジだったら確かに、こんな反応をするだろう、だから大丈夫、これは本物の弟だ。

「よかった、アンタが無事で。アンタが生きてよかった」

私も他に言うことがみつからない。レイジの赤いパーカーの袖をぎゅっと掴んで引き寄せた。

「よかった」

抱きついて服のにおいをかいてみると、涙が後からあとからあふれてきた。

ようやくもうひとつ、掴まえた。

リアルなもの……親友との思い出、そして大切な家族の1人を。

でも、その親友も今はどうなってしまったのか分からないし、両親も本当に死んでしまったのか、家が本当に無くなってしまったのかも定かではない。

早く確かめに行きたい、そう思うのと裏腹に、私は動けなくなっていた。

ねえ神様。

弟が私の元に戻ってきました。

後のことも、すべて夢だった、家は燃えていないし、パパもママも生きているし、ミホも無事だったって言ってください。

レイジの手が、私の頭に巻かれた包帯をそつと撫でているのに気づいた。

「ねえちゃん、ケガしたんだって？　ねえちゃんこそ大丈夫か」

「うん……」

包帯が一気に私を現実に戻す。

こんな私を心配してくれる弟に、いったい何て説明したらいいんだろう？

私の表情の変化にも気づかなかったように、レイジが急に私から離れた。

「そつだ。俺、やることあるんだつた」

「何？」

「ねえちゃんが目え覚めたら下の人を呼んでくるよう頼まれてた」

「下の人？」

「ここに連れてきた人たちだよ、俺、行って来るよ」

じゃあ、待ってるよ。とレイジは慌ててドアを開けてどこかに走っていった。

『連れてきた人たち。』

まだ、私たちは誰かの意志の中につちりと囚われているのだろうか。

イヤーエイクは耳から外れたというのに、まだ私は何かに囚われているのだろうか。

ドアは開いている。レイジも「下」に行っただけらしいから、あまり遠くには行ってないだろう。

そのまま彼を連れて逃げることもできるんだ。この場から。

でも、どうしても、どうしても私はそこから動くことができなかった。

私立權星館高校1年E組、ワタシは隣の席から目が離せなかった。

教室の中はまだまだどこか堅苦しい雰囲気が残っている。

数日前に入学式も終わったばかりで、興奮や緊張に満ちた表情が目立つ。

その中、彼はただ静かに、少しうつむきがちに前を向いて座っていた。

伏せがちの横顔、線が細くか弱げにみえる。髪が長くて肩にまで届いているせいだろうか、何だか女子のようにはかなげなイメージ。度の強そうな眼鏡をかけているせいで表情はよく分らないけれども、隙間からまつ毛の長いのが見受けられた。

入学式の時も、ワタシのすぐ脇の席で、終始、黙って前を向いて座っていた。

それから数日間も、オリエンテーションや細かい移動が多く、特に話す機会はなかった。

朝学校に着くと、どうしてもその席に目が行ってしまう、どうにも気になる男子だった。

ワタシ？ おかげで2日目に少しは他の女子とも話ができただけだね。

みんなおっとりしてて、ワタシのこと

「スズハラさぁん」

と可愛く呼んでくれる。
アス力、って呼び捨てにしてくれていいのに。

今までの中学みたいに、威勢のいい感じの子は少ない。女子もだけど、男子もそうだ。

権星館はどちらかというと経済的に余裕のある家庭からの子が多くて、逆に彼のような静かな存在はあまり目立たないようだ。

一人ひとり自己紹介、という時になってようやく彼がまともに話すのを聞いた。

席から立って、目を伏せ気味に小さな声ではあったけど、はっきりした口調で彼は

「ヒロカワ・レイジです、よろしくお願いします」

簡単にそれだけ言って、すいこまれるように席に着いてしまった。周りのクラスメイトも、線の細さという点では似たりよったりでもう少し自己アピールに時間を費やす者も多かったが、その中でも特に目立った印象はなかった。

それでも……ワタシはつい、彼の横顔ばかり見つめている。長い髪の毛の間から、どきりとするほど美しい形の耳がちらっと見えた。

何が気になるんだろう？ 彼の。

視線に気づいたのか、急にヒロカワくんがこちらを向いた。首全体を向けるのではなく、軽くかしげるような頭の向け方、しかし目はまっすぐにこちらの顔を捉えた。

「あ」

つい声を出してしまっ。

美しい。

男の子にそんな事言うのは失礼だろうけど、彼は美しかった。

「ヒロカワくん、だったよね」

ヒロカワレイジはすぐに目を伏せた。それでも軽くうなずいたようだった。

「よろしくね、ワタシ明日香。スズハラ・アスカ」

また彼は軽くうなずいた。

「よろしく」

と言ったようにも聞こえた。

ヒロカワくん、いや、レイジくんはまるまる欠席ということこそ
少なかったが、遅刻早退が多い。

ワタシは気づくとレイジくんの席ばかり見ていた。

体育も見学ばかりらしい。

図書委員会で一緒になった神田くんという男子からレイジくんの
こともいくらか聞くことができた。

神田くんは性格がよく、おっとりしているのでレイジくんのこと
を少しくらい突っ込んで聞いても、少しもイヤな顔せずに分る範囲
のことは教えてくれた。まあ、のんびりした性格らしく、ほとんど
誰でも知っているような内容ばかりだったけど。

それでもある日、図書カウンターで返却作業も途切れた時、ふと
またヒロカワくんの話になった。

「うちのクラス、一冊も借りてない人ってあまりいないよねえ」

本をこよなく愛する神田くんが、珍しく向うから話しかけてきた。

「そだね」

ワタシも顔を上げる。三人ずつの日替わりで、毎木曜日一緒に当
番をやっていた。

「神田くんの作ったポスターよかったもん」 NO BOOKS

NO LIFE”

「そうかあ？」

まんざらでもないように、にかっ、と笑ってから急に真顔になった。

「宣伝につられない人もまだいるけどね、四人かな」

「へえ、数えたんだ」

「先生から統計とるように言われてさ」紙を持ち上げてみせた。

「でも貸出数ではダントツなだけどね、1E」

「まだ来て無い人って誰だろ」何の気なしに聞いたのだが、神田くんは即答だった。

「宮本、大塚ケイタ、廣川、あと恒木洋子さん」

ヒロカワの名前を聞いた時、つい、目で反応してしまった。

「宮本と大塚は部活厳しいらしいから分るし、廣川はガリ勉ばいけど遅刻早退ばかりだから図書室なんて来ないだろうし……恒木さんはなんでだろ？ 本好きそうなんだけどな」

レイジくんの横顔が目の前にちらつく。

ワタシの動揺に構わずに神田くんはのんびりと話している。

「貸出率上げると、クラスポイントになるしさ、俺、宮本と大塚に借りるよう営業しようかな」

「いいかもね」しっかり聴いてなかったのに、そう相槌をうつている。

「恒木さんに、さりげなく聞いてみてくれる？ スズハラさん」

「いいよ」

ワタシは続けてこう言っていた。

「レ、ヒロカワくんにも聞いてみようか？」

「えっ？ いいの」

「席も隣だしね」

「頼むわ。俺とか、何か避けられてるつつう気もするし」

あまり気にしている様子もない、ただ単に面倒な仕事が一つ減っただけだと喜んでいるらしい神田くんは、呑気にこう続けた。

「でもまたこの頃休んでるじゃん、たまーに外で見るんだけどな」

その言葉に、はっと背筋を伸ばす。

「外で？ どこで？」

「駅、朝、バスから降りてきたのを見たことある。俺と同じ駅から電車乗ったよ、アイツ。その時は学校に来たけどね。でも近眼ひどのかなあ、下見てばかりだしあんまり目も合わせないんでオレも軽くスルーしちゃったけど」

神田くんは、隣町のかすみ川駅から電車を使っていた。レイジくんもなんだ。

ワタシはあまり興味がなさそうな顔をしながらも更に聞く。

「へえ、何だかお金持ちかと思ってたから学校まで車で送迎かなーなんて思ってたよ、意外だなあ……どこから通ってたんだろうね」

「乗っていたバスは国道本線の総合病院経由だったなあ、まあ、まだ3、4回くらいしか見かけてないけど」

さりげなく次の話題に移りながら、ワタシは次に何をするかもう心の中で段取りをたてていた。

数日後の放課後。

かすみ川駅のトイレで、ワタシは慌てて私服に着替えていた。

かすみ川は自分の帰る方向とはほぼ真逆、だからこんな所に制服姿でいるのを顔見知りにも見とがめられたら後がうるさいだろう、とワタシはここ数日、学校のロッカーに着替えを隠し持っていた。久々にレイジくんが、遅刻で学校にやってきた日のことだった。帰りのショートホームルームまでいたので、今日こそ計画を実行しよう、とずっと様子をうかがっていたのだった。

放課後、ワタシは少し急いでカバンと着替えの袋をひつつかみ、校門から飛び出していった。

ここからずっと後をつけるのはリスクが大きい、神田くんの情報を通じて、先回りしてかすみ川駅で待つつもりだった。

幸い、彼はまだ学校から出ていないようだった。学校近くの駅まで、ワタシはひた走る。

息切れがしてきた頃、駅に着いた。

いつもとは反対のホームから、ちょうど来た電車に飛び乗る。

一瞬、すごくバカなことをしているという気になった、でも扉が閉まった時にはすでに後悔は消えていた。

かすみ川駅も、学校近くの駅とあまり変わらないこじんまりした地方都市的な駅だった。

施設が新しくトイレが綺麗なのが助かる。手っ取り早く制服を脱ぎ、すっぽりとかぶれるグレイのトレーナーに着替え、下は穿き慣れたジーンズに替えた。

どこまで動かねばならないか分らない、もしかしたら彼は来ないかもしれない、どこかですれ違うかも、それでも。

なぜか予感があった。

制服とカバンを駅のロッカーに入れ、ウエストポーチを装着。ちょうど次の電車がホームに入る音。

やがて、数人の学生らしい姿が電車から降りてくるのが見える。権星館の制服もちらほらと見えた。

知り合いに会いませんように、祈りながら観光ポスターのベタベタ貼ってある壁に身を寄せた。

近くを通りかかる中に、顔見知りはいないようだった。他校の男子が数人ちらりとこちらを見たが、特に気にした様子もなく、それぞれの方向に散らばって行った。

彼らを見送った時、背後から学生が一人、音もなくすぐ脇を通り抜けていった。軽く風が起こり、ワタシはふいと顔を上げる。

ヒロカワレイジだ。

こちらには全然気づく様子もなく相変わらず顔を伏せ気味にバスターミナルへと歩いて行く。

どうしよう、普通に声をかけるべきかしら？

一瞬迷ったけれども、彼の進む先にバスをみてとっさに判断する。

ついでに行こう。

レイジくんは慌てることなくバスに乗り込んだ。他にも数人、のんびりとバスに近づいていく。発車までにまだわずかに余裕があるのだろう。ワタシも急いでいるふうをみせず、バスに近づき、いかにも当然と言う顔をしたままそれに乗った。

車内の左側、前から2番目の1人がけに彼は座っていた。こちらは右側の5番目に座る。

いつも教室で見るよりも少し後ろ側から見る彼のうなじ、髪の間から見える白がなぜかまぶしい。

ワタシはそのうなじをずっと見つめていた。

バスで一五分も行っただろうか、彼はバスを降りて、自然に走り出した。

小走りだったけどまさか、走るとは。

身体弱いのかと思ってたけど、全然そんな感じないよね。

急にバカらしくなってそのまま引き返してもいいかな、と足を止めた。

でも……ここまで余分に電車賃とバス代を使っているし。

それに今日は、テッテイテキに行動すると決めたのでは？

レイジくんの姿がひとつ向うの曲がり角を左に入る。離れて見守るうちに、新しい住宅地、こぎれいでかわいいアパートが数棟並んでいる中についた。レイジくんはそのうちの1棟、中でも新しいもののこちら側の階段を軽々と上がっていった。ラッキーなことに出入口がこちらを向いている。

彼は二階通路の一番端まで行くと、鍵を開けるのではなく、チャ

イムを押した。

しばらくしてドアが大きく開いた。

中から、似たような年ごろの少年が片手をドアノブにかけて前のめりな感じで覗いているのが目に入った。ぼさぼさに立ったままの茶髪をもう片手で掻き回して、口を尖らせるようにレイジくんに何か言っている、文句のようだ。

赤いパーカーが何となく軽薄なイメージ、レイジくんとはまた感じが全く違う。でも彼は特に構う様子もなく軽く相手のみぞおちをこぶしで突いて、中に入っていた。

一瞬、赤いパーカーの少年の目がこちらを向いた気がして、びくっとした。

すぐにドアが閉まった。

いつの間にか息を止めていたみたい。

ワタシは長くため息をついて、今来た道の方を振りかえった。

「つかまえたあ」

歌うような軽い口調に凍りついた。それでもよつやくゆっくりとふり向く。

赤いパーカーがすぐ後ろに立っていた。

目が笑っている、でもどこか油断がならない。

「アンタ、誰？」

少し身体を揺らすように、少年がワタシの前に立ちふさがっている。

ここは駅ビル内。

アパート前からこっそり離れてまたバスで駅まで戻ったのはいいが、家に帰ろうかどうしようか迷っている時、可愛い靴が並んでいたのでつい、見とれていたところだった。

完全に油断していた。

「というか」なぜかこう訊いていた。

「あんたこそ誰？ ヒロカワくとどんな関係？」

言ってからしまった、と口に手を当てる。

「ああ？」

少年はまじまじとこちらを見た。

「ヒロカワ、レイジのこと？」

急に警戒するような目になる。

「どこからツケてきたんだ。誰かに頼まれたのか？」
声もやや低くなった。そして

「あんだ、どっちなんだ？」

一歩寄って、ワタシの服、襟元をつかもつと手を伸ばした。

「ちょっと、触らないでよ」

それをつい手を払う。彼が、ちっと舌うちした。でもそれほど凶暴な感じではない。

「どっちなんだ、ってどういう意味？ それに誰にも頼まれてないし」

わざと、つつけんどんな口調で答えてやった。

「でもツケてきたんだろ？」

少年の言い方はまだ棘があった。しかし口の尖らせ方が何となく可愛くもある、ワタシは少しだけ肩の力を抜いた。

「そうだね……ヒロカワくんとちよつと話がしたくて」

「なんで」

「同じクラスなんだ、彼と」

「権星館の？」

「うん」言おうか迷ったけどつけ加える。「隣の席」

彼は急に興味が失せたかのように一歩後ろに下がる。

「アイツのことが気になって、ツケてきたってこと？」

「そう」逆にワタシは大胆になる。

この子、見た目ほど怖い感じではなさそうだ。

「家、近所なのか」

「実は逆方向、けっこう遠くまで来た」

「へええ」

右のかかとを軸に体を半回転ずつぐるぐる回していた彼、急に前ぶれもなく腕を伸ばし、

「あつ」

今度は手を払う間もなく、耳たぶをきゅっとつままれた。

「な、なに！」もう片方の手で反対側もつまむ。完全に顔を挟まれた形になった。

「何すんの、離して」顔がかあつと熱くなる。

「違うのか……」

どこか遠くをみるような目のまま、彼がつぶやく。

「あの」まだ手が離れていない、顔は真っ赤だろう。

「ねえ……い、痛いんだけど」

彼はぱつと手を離して一歩だけ下がる。どこかで見たような表情だ。

「ああ、ワリいワリい」

全然申し訳ないと思っっている口調ではない、しかし、瞳にはどこか思い詰めたような光が宿っている。

「あのさ」目に力がこもったままだったのに、急に淡々とした言い方になった。

「悪いことは言わねえから、アイツにつきまとわれない方がいい」

「何だよ」

ワタシは熱くなった自分の頬を手の甲で押さえたまま聞いた。

「別に誰が気になってもいいじゃん？」

「ヤツは多分アンタには興味ないとおもうし」

冷たい言い方にむっとした。

「アンタ、ヒロカワくんとかどういう関係なの」「つい言ってしまったからヘンな言い方だと気づく。」

「あの、あの」

慌てふためく様子に不審げな目を向けていたが、急にきちゃきゃつ、と猿みたいな高い声で笑う。

「イトコだよ、ヤツは」もしかしてコイビトどうしだと思ったの？

と更にあざけるように笑う彼をしり目に頬のほてりはますますひどくなっていく。

「別に、そんなこと……ただアタシはね」

「興味がないって言ってんだろ」

また急に冷たい言い方になって、彼は数歩後ろに下がった。

「学校でも、構うなよ、ヤツに」

「どうして……」ワタシのの頬も急激に熱が醒める。

元々漁師町で生まれ育ったせいだと言う訳ではないだろうけど、ワタシだって、言われたことを黙ってはいはいと聞いているタイプじゃない。

「まあツケて来たのは少しは反省するけど、学校ではどんなおつき合いしようが別にイトコの許可なんて必要ないでしょ？」

「まあね」

踵を返し、そのまま帰って行くかと思ったが急にまたふり返り、彼が言った。

「命が惜しかったら、これ以上レイジに関わるな」

「命？」

思わず大きな声を出してしまった。「何それ、何そのチープな脅し」

しかし彼は特に気にする様子もなく、顔色を変えることなく最後にこう言った。

「オレはもう警告したからな」

駅ビルの構内に消えていく彼の姿を見送ったまま、ワタシは放たれた言葉の意味をじっと考えた。

やな感じだった。ふざけているような、バカにしているような笑

い方、軽薄なイメージ、それに、急にすつ、と冷たい言い方になった時の目の色。鋼のように冷たい色。

「オレはもう警告したからな」あの固い言い方。

しかし、耳たぶを掴んだ指は思ってもみない暖かさだった。

自分で耳たぶを同じようにまた掴んでみる。まだジンジンしている気がした。

なぜ、レイジくんのことになるとムキになってしまうんだろう。学校でもまだ数回しか会っていない、話なんてほとんどしたことがない、なのに、どうして彼のことはばかり考えているし。

今まで真剣に誰かを好きになつたことがない、これが人を好きになるということ？

ずっと考え続けたり、わざわざ放課後に追いかけて行って家までつきとめたり……

ストーカーまがいのことをしているのかも。

でも、どうしても気になる、何かが。

イトコだという彼が言ったことも気になる。

命にかかわること？

とたんにワタシはまた、だっ、と走り出した、「待ってよ」

すでに彼の姿は駅から消えていた。バスで来たのだろうか？ 歩くには少し遠いしどうしよう……と、自転車置き場から赤いパーカー姿が出てきたのを発見！

自転車はさっきのアパートの方に向かって颯爽と帰って行った。

気づいたら、自分も自転車をこいでいた、風を切つて。

何してんだろ、ワタシ。笑える状況では全然ないと思うのだが、なぜか口の端が上がってしまう。必死でペダルをこいでるし。

目指すは彼のアパート。

乗っているのは、駅前のレンタルサイクルだった、ありがたいことに電動自転車が借りられる観光事務所があった。同じ場所に返せば六時まで借りられる、つて。

まだ四時半になっていないから、とりあえずあそこまで行って、少しなら話ができるだろう。

話……何の？ それすらアテが無い、ただ、会つてもう少し聞いてみたかった。

レイジくんから直接。

もうすぐアパート、というところまで来て急に叫び声が耳に飛び込んだ。

急いでブレーキをかける。

もう一漕ぎすれば建物が見える、という角。何か嫌な予感がする。自転車を止めて、用心深く塀の角から頭を出してみた。

レイジくんの入っていったアパート下、ドア側でなく、隅にある階段のすぐ脇に水色がかつたセダンタイプの乗用車が一台横づけになっていた。背広姿の男が二人、ちょうど真ん中に挟んだ小柄な人影を車に引き入れようとしていた。もう一人、別の男が、赤いパー

カー姿を押すように建物の裏側に連れ込もうと掴んだところだった。叫びは甲高く、誰から出たのか判らなかつたが明らかに、車の連中が誰かを連れ去ろうとしているようだった。

他に人通りもなく、一見のどかな住宅地めいた光景には明らかにそぐわない。

ワタシの置いた自転車が倒れた、停め方が甘かつたらしい。

それは側溝の金網に当たって派手な音をたてた。

男たちがこちらに顔を向けた。

まずい、完全に顔を見られた。

「命が惜しかったら」急にあの言葉が真に迫る。急いで自転車を引き起こそうとした、そこに

「止まれ」スマートなスーツの割に野太い声が飛んだ、思わずハンドルを思わず離し、また金網を派手に鳴らしてしまった。

一人が本気でこちらに向かってダッシュ、その男が離れたせいで車に乗せられようとした人物がみえた、私服だったけど、確かにレイジくん。もう一人の男がまだ後ろ手に捕まえている、彼らもここに気づいたようで揃ってこちらに目を向けていた。レイジくんのイトコを裏に連れていった男はまだ姿が見えない。

男が迫る。もう捕まってしまう、それでもためらったのはほんの一瞬。

大きく息を吸い込み、ふり向きながら叫ぶ。

「火事だああああああっっっ！ 火事いいいいいいいっ」

とたんに近くの築五〇年はするだろう平屋から、ステテコ姿のおじいさんが飛びだしてきた。

「火事？ どこだ」

少し離れた古いアパートからも女の人が覗いている。

「早く来い！」半分車から身を乗り出した男がまた叫ぶ。

「一人捕まえた、帰るぞ！」

「その人を離して！」車に向かって大声を出した、しかし、さつきまでワタシをを狙っていた男はすでに向きを変え、車にたどり着いていた、すぐに裏から、もう一人が駆け戻ってくる、赤いパーカーの少年は連れていかなかった。

セダンは急発進、タイヤを鳴らして広い道路に出ていった。一旦停止もせずに。たまたま車が通りかからなかったのは幸運としか言いようがない、誰にとつての幸運かは分らないけど。

車が去ったところではつととなった。あの子、無事なのだろうか？

マンションの裏手に駆けていくと、自転車置き場の影に赤いパーカー姿がうずくまっていた。

「起きて！ だいじょうぶ？」

「……」口の中で何かつぶやいている。えっ？ と耳を近づけた時、ようやく

「だいじょうぶなら、とつくに起きてるし」

思いのほかいばりくさったな答えが返ってきて、つい、ぷっと吹き出してしまった。

「つつつ」ようやく少年が起き上った、額を押さえていたが、急に我に返って

「アンタ、ナニモノ？」と聞くので真面目に答えた。

「スズハラアスカ」

「つつか」呆れたように顔を見ている。

「何でまたここに居るの」

「駅から追いかけてきた」

「なんで」

「レンタルサイクルで」

バカか、という顔になった。「ちゃう、HOWじゃねえ、WHYだよ、ほわーい」

そう言っておいてから急にまたマジに戻る。

「やっべ」

立ち上がるうとしてまた少しよろめいたので、腕を持って支えてやった。

「アイツらに連れて行かれた！」彼が叫んだ。

「アイツらって何？」

「セルに決まってる」急に真剣な顔して彼はこちらを見る。

「セルって何」

そう聞いた時、彼の手がワタシの両腕を掴んだ。指が食い込む。

「もうアンタもここまで来ちゃった、つきあってもらうからな、最後まで」

「痛い！ 離さないよ」

腕を振りほどこうとするけど、指は離れない。

「何よ、アタシに何をさせるつもり」

「アンタさ」

下から覗きこむような目、ふざけた色は全くなかった。

「本当のことが、知りたいんだろう？」

勢いに押され、つい言葉もなくうなずいた。

「だったら教えてやるよ」少年はよろめきながらもようやく立ち上がる。

「アイツらを追っかける、オヤジにも連絡しなきゃ」

「は？ 相手は車だよ。それにあたしもチャリだし」

「高速に乗ったか、どっちに向かったかだけでもいいんだよ、早くしねえと間に合わねえ、俺の後ろ乗れ！ 早く！」

声に押されて、彼がまたがっていた自転車の荷台に跳び箱の要領でどび乗り、腰にしがみつく。

「いーぞねーちゃん、いくぜ」

ロデオのような掛け声ひとつ、自転車は一瞬ウィリーしたものの、すぐに前へと飛び出していった。

自転車で車を追いかけるなんてムチャでしょう、と言ってやりたかったけど、後ろに必死にしがみついていたので声も出せずにワタシはただ、無我夢中で彼の背中にしがみついていた。

マンションの裏手に丘のような山が迫る、彼はためらいもなく山ぎわの道をぐいぐいとこいで一旦広い道路に出た。すぐ目の前に高速道路の高架が日を遮っている。

「ちと揺れるぞ」

言い終わらないうちにかつん、と思い切りお尻に衝撃が走る。

自転車はいつの間にか大きな自動車道の脇道を並走していた。

「前に体を倒せ」

言われなくてもすごい上り坂、彼は立ち漕ぎに替えたが、かなりきつそうだ。

「わりい、一回降りて」

その声に後ろにびよん、と飛び降りた。押されたはずみで自転車がぐん、と前に出る。

「走ってこいー」声が遠くなる。

涙目のまま、坂の上までよろめくように走る。

やっと坂の頂上に着いた。自動車道が一望できた。

そこを鋭い目で見渡しながら、彼はどこかに電話をしている。

「時間からして、じきに通ると思う、品川ナンバーだったから上り

を見張つてみたけど、うん、……通つた、ビンゴ!」

ワタシは同じように道路を見てみた。

週末とは言え平日の夕方はまだ一般車が少ない、その中でアクアブルーのセダンが東へとかなりのスピードで去って行くのが見えた。車種には詳しくなかったけど、少年が目で追っているのが先ほどの車らしいことは何となく分つた。

「……行き先は、ラボだつたんか」

チクシヨウ、と唇を噛んで彼はずっと消えてしまった車の方をみやっている。

ワタシはまだ息が切れている、でもようやく彼の傍へと寄つた。さつき道で跳ねたあたりから、お尻がガンガン痛んでいた。

少年はなおもブツクサ言っている。

「悪者のくせに、あんな爽やかな色の車に乗ってるからどこ行つてもバレやすいんだよ、アホか、悪者らしく黒とかウンコ色とかに乗つてりゃいいんだ、なんだよアクアブルーって」

「ねえ」

つい口をはさむ。でもなんとなく涙声。

「別に自分たちがワルモノだなんて、思つてないからじゃないの?」

「はああ」少年は目線を車道から離さず、悲しげに言う。

「オマエさ、案外痛い所スポットで突いてくるよな」

それに答えようとして、考えてから聞いてみる。

「先に、名前教えてくんない?」

「なんで」

車が去つた方を見やつたまま彼が訊いた、どこか呆然としていた。

「赤いお猿さん、て呼ぶワケにもいかないし」

「誰が猿だ」きつとなつてふり向く。目の中に少し活気が戻つたよ
うだ。

「そもそもオマエが戻ってこなかったら……」

「でもアナタ、マンションの裏で延びてたんじゃなかったっけ？」

「……」

「ワタシが戻らなかったら、レイジくん、どこに行っただかも分らなかったかもよ」

「連れて行かれるんなら、たいがいラボだろうよ。奴らなんかやらかそうとしてるらしいし」

「じゃあなんで、そんなに必死こいて追っかけたのよ、それにラボって何」

「東に行くか西に行くかで状況がちと変わるんだよ、るせーな、いちいち」

「ついて来たら教える、って言ったじゃん」

「仕方なく連れてきたんだわ、あんな騒ぎン中に残ってきてケーサツでも来てみる」

余計なこと話されたくねえし、と口の中でもごもごと言ってから、今度はじっとこちらの顔をみた。

「オマエは、信用できるヤツか？」

何たる質問、口があんぐり。でも、真剣に考えると

「……どうだろう」

急に自信がなくなった。

躊躇いがちな表情になったのをみたのか、彼がまた、笑いだした。やっぱり甲高い、お猿のような笑い方だ、おちゃめな感じもしてそれほど嫌いではなかった。

「何がおかしいワケ」

「アンタさ」くつくつまだ笑っている。

「俺のアネきに反応が似てんだわ、だから面白いなーってさ」
「アネ……?」

そこに、控えめなエンジン音と共に白い乗用車が上がってきて瞬間、ぎよっとなる。

少年は、はっと顔をあげ、とたんに片手を振った。

「おーい、ここだ、ここ」

運転席から降りてきたのは、やはり背広姿の男だった。まだかなり若そう、しかも、イケメン!

「オマエは無事か」 労わるように声をかけた。

「ああ、殴られたけどな」 肩をすくめるようにこちらを指さした。

「ソイツに助けられた」

その人は冷たい目でこちらを向いた。「君は?」

よく見るとまだ学生かと思えるような若さだ。さらっとした明るい色の髪に切れ長の目が理知的に輝いている。こちらを見る目は不審げだけど。

私は、まあ礼儀正しく、

「スズハラ・アスカです」と答える、そこに少年が一言。

「権星館のクラスメイトなんだってさ」

「えっ」

青年は驚いたように目を見張った。「友達が? あの子に?」

「はあ……」 何と説明したらいいのだろう。「レイジくんのクラスメイトです」

「彼から家を教わったのか?」

「いいえ」

眉を曇らせる青年がつぶやくように言った。

「セルなのか?」

また出てきた単語、首をひねるより早く少年が代わりに答える。

「違う、全然無関係だよ、でもね、尾けてきたんだ、コイツ」

まるで犯罪者のような言われ方に、きつとなって少年を見る。

「でもアナタを助けたけどね」

「ああ、お礼がまだだった。ありがとうございました」

全然ありがたそうでもない。「それに姉きは連れて行かれたけどな」

「そりゃだつて車でオトナが」そこまで言いかけて、重大なことに気づく。

「アネキ？」

少年は一瞬、しまったという顔をしたが、次にあっさりところう続けた。

「自己紹介まだだったな、オレの名はレイジ、よろしく」

レイジ？「じゃ、じゃああっちのレイジくんはそれじゃ」

「俺の姉きだよ、本当の名前はシオン、で、こっちは兄きのアオイ」

じゃあ兄貴、彼女送ってやって、と手を振って彼はあっけにとられるワタシと車とを置いて自転車にまたがると、一度だけ大きくペダルを踏んで、あとは惰性で坂道を下って行く。

「クリニツクに一九時だけど、迎えが行くまで家を出るなよ」

青年が後ろ姿に呼びかけると、片手を高く上げてから少しバランスを崩し、どうにか態勢をたて直して走り去った。

バカだな、とちよつとだけ思った。

そして何となく笑ってしまった。

夜少し遅くなった頃、珍しく家電にワタシあての電話が入った。

驚いたことに、レイジくんからだった。お猿のレイジの方だったけど。だから呼び捨てでいいか。

「びっくりした？」

きやは、とレイジはまた高い声で笑う。

「姉きのクラス連絡網をみたんだ、いきなり用件入るけど、いい？」
返事もしないうちに、彼が言った。

「明日さ、三年A組の女子一人、見張ってほしい」

「えっ!？」

突然の話で、何と答えていいのか判らない、上級生の女子を見張れって？

「今までずっと学校では姉きの『レイジくん』が見張ってたんだけどさ、ここんとこ絶対何か動きがあるはずなんだ、でね」

「ねえ、一体何のはなし？」

「まあいいや。見張ってほしいのがね」

全然こちらの言葉を聞いていない。

「コバヤシ・ソアラって人。彼女欠席とか多いから、来てなかったらアンタも早退していいから、でもすぐ連絡ちょうだいね、明日動くかもしれないって兄ぎがさ。彼女、委員会とか部活とか、身体が弱いつていう理由で全然してないから帰りもちよつと早い、アンタもまだ部活とか決まってないんだろ？」

「器械体操部見に行こうかなあつて……」

「まあいいじゃん、明日一日だけでいいからさ、あつ、早退するか

も。昼休み注意ね」

「ちゃんと事情を教えて」

「しゃーないな」

ため息のついでに、彼はそう言った。

「彼女ね、セルという会のメンバーなの、聞いたことないかな」

知るわけない、と答えたが

「じゃあいいや、俺のケータイ番号とメアド教えるから」

やはり、聞いていなかった。

メアドのやりとりしてしばらくしてから、メールが来た。

「くれぐれも今回の話は極秘でお願いします」

おサルらしくない文面に、何となくまた可笑しくなっつてつい笑い出してしまった。

水色の車の中で、私は少し長いこと眠らされたようだ。
着いたのは、まるで見知らぬ場所だった。

廣川博士からは何度も聞かされてはいたが、ここが『ラボ』なの
だろうか。

何かのテーマパークのようだった。

広い敷地に、ぼつりぼつりと白い建物が散らばり、中央あたりに
は巨大な建造物、体育館かホールのように見える。

着いて早々連れて行かれた部屋の前で、つい立ち尽くした。

また、診察室のような場所だった。

ぐい、と背中を押され、よろめいて中に入る。

椅子に押し込まれ、背を起こす前にいきなり、目を突きさすよう
な白い光が向けられる。

白衣の男が何か箱を近づけてその数値を生真面目な目で読みと
つてから、独り言のように

「セル反応なし」

そうつぶやいてからカルテに書き込みをして、また何だか一人で
ブツブツ言っている。

片耳が人工耳介だってバレやしないか、半白髪の頭を見送りなが
ら私は胸を押さえて座っていた。

何を言ってもどう取られるのかが怖くて、ずっと黙っていた。

どちらにせよ、これから色々と聞かれるのかも知れない。

なぜ男の子に化けて、イーリアを見張っていたのか。イーリアとは実際どんな関係なんだ？

そんなことを無理やり色々と言おうとするんだらうか？ 尋問になるの？

心臓が飛びだしそうで、口の中が乾いてくる。

いったん席を離れた白衣の男が、少ししてから持ってきたものを見て私はぞくりと身を震わせた。

「これで耳を挟んで」

手渡されたパンチャー、覚えがあった。

受け取る手が震えてしまっ。

男はゼスチャーで自分の耳にパンチャーを当てるしぐさをして言う。

「挟んだら、グリップのボタンを押して二秒そのままね、痛くないから」

痛がるうがどうだろうが、実は全然かまっていない口調だった。

優しいが有無を言わせぬ命令、じっと底の冷たい目でこちらを見ている。

「いやです」

最初はかすれてしまったが、震える声でようやくそう言うことができた。

一言声に出すと、ようやく勇気を出して言えるようになった。

まっすぐその白衣の男をにらみつける。

「い、家に帰してください」

そうだ、前みたいに一人きりじゃない。

パパもママも死んだと聞かされた時にはもうどこにも帰る場所はない、とずっと泣いていた私を、弟のレイジがぎゅっと抱きしめてくれた。

「泣くなよ、泣くな」それしか言えなかったレイジ、でもどんなに心強かったか。

それに、身寄りの無くなった私たちを快く引き取ってくれたヒロカワのお父さん、アオイ兄さん、それにいつも親身になって話をきいてくれるフィンセントのメンバー。みんながついていてくれるんだ。

白衣の男は話を聞いているようでもなく、無意識にカルテをめくっているようだったが、が

「それつけるよね、ラクになるんだよ色々」といきなりぞんざいな口調になった。

「楽に？」

ついオウム返しに口にしてしまう。

男はぱたんとカルテを閉じる。最初から必要なかったかのように。「そう、嫌なことや不快なことでも耐えられるようになる、逆にね

……」

目の中に湧いた光を見て、思わず椅子ごと後ずさる。

「逆に、快感を覚えるんだよ」

いや、と叫ぼうとした時には襲いかかった男の下敷きになって、床に這いつくばる。

「やめてー！」

「抵抗するな、快感を味わいたいんだろ？ 痛い目に遭いたくないだろ？」

カイカン、ということばに自ら発情したのだろうか、男は私が見だ手にしていたパンチャーをねじるように奪い取り、無理やり耳に当てる。かなり上の方、大雑把な位置だ、彼がスイッチを押す直前、私はとつさに頭をひねった。

あつ、と叫ぶ間もなくイヤーエイクが装着された。避けたつもりだったが、ギリギリ耳介にかかった。

わずかに全身に走るショック、でも

「……」

この前とは何かが違う。

男はまだ息を荒げて私の上ののしかかったままだった。私も息を弾ませ、うつぶせになったままそつと耳に手をやる。

イヤーエイクは人工耳介に留っていた。

以前のようなずきずきする痛みがない、もしかしたら……私、助かったの？

男の様子からしても、留めたという結果に満足しきっているのか、耳が本物かどうかには全く頓着していないようだ。

男は四つん這いの姿勢のまま、パンチャーを脇のダストボックスに放り投げた。

鈍い金属音がして、はずみで蓋が閉まる。

私たちはしばらくその格好でいたが、急に気づいたように男が姿

勢を変えた。

背中に当たっていた膝がしらの圧が急に消えたので、立ち上がる
うとしたところ、後ろから羽交い締めにされ、口を塞がれた。

「！」

「よく見ると」

今まで経験したことのない近さで、生温かい息とともにかすれた
声が耳に届く。

「アンタさ……可愛いね」

上にいるのが生身の人間だったと突然気づく。全身を悪寒が駆け
抜けた。

指がアルコール臭い。そして近づいた半白髪は不潔な湿り気が臭
う。

だんだんと速さを増す息づかいが耳たぶを湿らせる。

護身術はさんざん、ヒロカワのお父さんやフィンセントのメンバーに習っていたはずなのに、いざとなると手も足も出ない。

普段から、独りで捕まった時にはとにかく仲間からの指示を待て、勝手に行動するな、としつこいくらいに言われていた。そのせいなのだろうか？

違う。

怖い、ただ怖くて動けないだけ。

このままじゃ……

死ぬよりサイアクかも！ と、急に

「サイアクだよー！」

誰かの声が心の中に響いた。「今のショット、サイアクー！」

ミホ？ そう、ミホがすぐ脇に立っている、ポニーテールが揺れる。

白いユニホームに見覚えがある。これはダブルスのゲームの時だ。イージーショット、悔しそうに歪むミホの顔「ごめん！」

「ドンマイ、ミホ！ 次行こう、次」

いつの試合だったろう、私はそう叫んでミホの方を向いた。ミホ、ぱつと顔を上げる。

「よっしゃ、いっちゃやってやるーじゃん」

ミホの声も明るくなった。私も声を出す。

「私も！ いったちよやってやる！」

護身術で教えられた動きが自然と出る、腰と肘とを思い切り後ろにつき出しひねりながら体を抜く。

抜いた拍子に、男の急所を蹴りあげるのも忘れない。

「がああああつつつ」

獣のような叫び、私は息を弾ませながらも飛び起きた。

「このガキやああ」

下卑ただみ声、すっかり白衣に包まれた役割をかなぐり捨て、男は凶暴なオスになった。四つん這いからようやくたちあがり、血走った目を向ける。

とっさにデスクにあったペンをさらい、尖ったペン先を男に向けた。

「それ以上近づいたら、目玉を刺すから！」

ほんの一秒、完全な沈黙を破ったのは、背後からの別の声。

「それはぜひ、拝見したいものだ」

朗々とした響きに、目の前の男がはつと顔を上げた。

「アースマスター」男が息を呑んだと同時に、そんな言葉を発する。

ふり向くと、入口のドアはいつぱいに引き開けられ、そこをふさぐように白い胴着じみた衣装の男がひとり、その両脇に同じような格好の二人が並んで立っていた。

真中の男は明らかに両脇より頭一つは大きい。恰幅がよく、ふっくらとした顔に穏やかな笑みを浮かべている。

しかし、白衣の男の反応は激烈だった。

睨まれたわけではないのに、急に激しく震え始める。

アースマスターと呼ばれた男は、震えている男には全然かまわず、ひとり、中に足を踏み入れて私の前に立った。

そして、向かい合った私の肩にそつと両手を乗せる、ふくよかな見た目とは裏腹に、それは鉄の拘束具みたいに、私の動きを封じ込めた。

また、後ろ向きにされるのにどうにも抵抗できない。

背中にぴたりと体を寄せ、あごを私の頭頂部に乗せて、男は肩に置いた手を、ゆっくりと下に滑らせた。

Tシャツのすそから手をさし込み、今度は素肌の脇腹を撫で上げるように上へ、ブラを軽く一周、フロントにあるフックを外す。

全身に鳥肌がたった。

背後から息づかいすら聴こえない、体温も。ただ圧迫感のみ。それなのに、さつきよりもっと恐ろしい。

膝がしらから急に力が抜ける。それでも倒れることもできない。

「ふむ」

急に鼻を鳴らすような声でした。

「悪くないな」

男の手はブラを避け、左右対称に真中から鎖骨に沿って滑っていく。胸そのものには興味はないのか、そのまま手は肩に上がり、しばらくは名残惜しそうに肩と鎖骨とを行ったり来たりした。

シャツがすっかりはだけて素肌がむき出しにされている、しかしさっきまで私を襲おうとしていた白衣はじつと目を伏せ、もう前の光景を見ようともしない、ただ震えているのみだった。

Tシャツから手を抜いて、後ろの男は少し離れた。

つむじに当たっていたあごの圧が急に消えて私は少しよろめいた。今度はその手が服の上から、私の背骨を首筋から下へと撫でおろす。

そしておもむろに後ろから腰を両手で挟んだ。ジーパンの上からベルト周りを用心深く前に持って行き、いったん前のボタンで止まった。

脱がされる！

身を固くしたとたん、後ろの影が大きく離れた。

「確かに、悪くない……」

抑えてはいるが、高揚を含んだ声が背中から聞こえる。

「悪くない骨格だ。『トップセル』候補として、大切に保管しておくように……あの子が確保できるまでは」

男が完全に離れた。触られている時には身動きもできず息もままならなかったのに、男が離れると同時に冷や汗がどつと湧き、悪寒

が止まらなくなった。

脇についていた二人に引っ張られるように、部屋へと連れて行かれてしばらくしても、その震えは止まることがなかった。

閉じ込められた部屋にはベッドがひとつ、片隅には申し訳程度の仕切り、陰におもちゃのような白い陶製の便器。
独房というのだろうか？

どのくらい時間がたったのか分からなかったが、ようやく震えもおさまった頃、やっと床から立ち上がることができた。

ドアに鍵がかけられているのを揺すって確かめてから、ベッドの上で膝を抱えて座る。

窓のない部屋は音も漏れず、それだけで息苦しさを覚える。

博士たちは、万が一セルに捕まった時には独断で行動しないように、必ずフィンセントからの連絡を待つように、と常々言っていた。

でも、ひとりで、何ができるってどういうの？

私は膝を抱えたまま、ベッドの端から床を見つめていた。

誰でもいいから知っている人に逢いたい。

イーリアでもいい。

彼女のことを思うたびに、胸がときめくのはイヤーエイクが取れた後も同じだった。不思議なことに、彼女への憧れは人工的な感情ではなかったらしい。

好きなものは好き、気になる人は気になる。それが分かっただけ

でもすごく嬉しかった。彼女がどこまで組織の中枢に関係しているのか、本当に敵対関係なのかどうかはまだ判明していなかったけど、学校で見張っているのはぜんぜん苦にはならなかった。

いつか彼女にも本当に幸せになってほしい……

ヒロカワのお父さんは、いつかイーリアを説得して、自分たちの元に『取り戻す』なんて張り切ってた。その言葉を信じたい。

その時には、本当は私、ヒロカワレイジじゃなくて、詩音だよ！
ってびっくりさせるんだ。

でもそんな日は、本当に訪れるのだろうか。

ミホは？ 彼女もアオイを通じてフィンセントの仲間に入り、せっかく同じ陣営になったというのに、向こうもこちらを避けているのか、自分にこだわりがあり過ぎるのか、まだ一度も口をきいていなかった。

私たちが隠れて暮らしているのを知っていたので、遠慮もあったのだろうか？

うっん、違うとおもっ。

一度だけアオイが何かのミーティングに連れて来たことがあった。ずっと目を伏せていたけど、レイジとは普通に喋っているようにみえた。

なのに私と目が合いそうになると、すぐに顔をそらしてどこかに行ってしまった。

さびしい。

いつか、またミホと話せるようになるんだろうか、昔みたいに。

ああ、逢いたい……知ってる人たちに。みんなに。

ひとつだけ、うれしいこと。

擬似耳介に新しくつけられたイヤーエイクは全然、自分の心に響いていないようだ。

だいじょうぶ、私は私でいられている。

……だって、不安で不安で死にそうだから。

レイジから電話を受けた翌日、ワタシは早速三Aを覗きに行ってみました。

ちょうど図書館の宣伝用ポスターとアンケートを置きに行く、という用事にかこつけて出かけて行ったのね、頭いいワタシ。

教室にまで堂々と入り、じっくりとクラスの内部を観察することができた。

幸運なことに、朝のこの時間、教養力小テストが終了したばかりらしく、クラスの全員が揃っていた。

そあらという人の席はどこかは判らなかったんだけど、とりあえず欠席者はいないということだけはバツチリ。

「アンケートはできれば、お昼休みまでに書いていただいでしようか」

二度手間になって大変だろうから、今やりましょう、と担任の先生が言ってくれた。少し待ってもらっていい？ って願ったりかなったりよ。

上級生たちは、ええー、とどよめいたもののショートホームルームが削られる、と聞いて、

「いいっすね、今、やっちゃいましょー、アンケート大好き」

そんな声が飛んで、すぐ五分間がもらえた。

昨夜レイジから送ってもらったポートレイトの姿をさりげなく探し続けた。

小顔で、髪型を変えていなければかなり長いストレートの黒髪をさらりと流している、顔はまつ毛の濃い、日本人形のような端正さ、お上品な学校とはいえ、ここまでの美形ならば目立ちそうな気がする。

ようやく、通路側後ろから二番目の席に、長い髪の子をみつけた。

沢山の中でみると、案外ひっそりと目立たない。しかし、いったん見つけてしまうと昂のように、ごちゃごちゃした光景の中、ひときわ輝いてみえる。不思議な人だった。

アンケートをまとめてもらい、それを受け取ってワタシは愛想よく一礼して教室を出る。

あまりの順調さについてにんまりしながら階段を上がっていった。

どうせなら直接聞けばよかったかな？

今日、どこでお弁当食べますか？ って。

昼休みにまた、階段を上がって三年の教室まで行った。

「すみませーん」

ポスターを渡すの忘れました、貼っていいですか？ と聞いてみる。いいよー、と誰かが答えた

ふと、そあらさんが後ろのドアから出て行くのが目に入った、リュックを肩にかけたところだった。

(帰るんだ)

慌ててそばに寄ってきた男子の先輩にポスターを押しつける。
「ごめんなさい！ 急用思い出して」ちょっと上目も忘れない。
「代わりに貼っていただけですか？ センパイ」
でへーっと鼻の下を伸ばした彼を置き去りにして、ワタシはいそいで教室を出た。

荷物どうしよ、とっさに教室に戻ろうと向きを変えかけた。

いや、見失っても困る。

ワタシはそのまま前に行く先輩の後を追った。

ブレザーの内ポケットに入っていたスマホの電源を入れ、前を気にしながら電話を入れる。

コールなしで「はい」と声が出るので

「例のそあらさん、帰るみたいだけど」と言つと「正門側？」と聞く。

「北門」

そう告げると慌てたような会話が聞こえてから、レイジの声。

「三分以内で回るから、引きとめて」

「えええーっ」

ムチャばかり言う。考える間もなくワタシは走り出した。

「あの一、すみません！」

最初、そあらさんは聞こえていなかったのか、歩をゆるめることなく大きな倉庫の脇を歩いていた。

でも、何度かすみませーんと叫ぶうちに、歩きながら少しだけふり向いた。

「あの一、コバヤシ先輩、ですよね」

ようやく追いついた。

そあらさんは少しだけ立ち止まっていたが、また歩を進める。

「待ってください、聞きたいことがあって」

並んで歩きながら何とか話を続けようとかんばる。そあらさんの横顔はまっすぐ前を見ていた、もうこちらには興味がないようだ。

引き留めなくては。とつさに聞いてしまった。

「セルの、会員さんなんですか？」

ぴたりと足がとまる。

長い髪の毛で、切れ長の美しい瞳が大きく見開かれているのがわかった、そのままゆるりとこちらを向いて、手を伸ばす。

ワタシはぱつと頭をひっこめ、耳をかばった。レイジと同じことをしようとしているらしい。

「あ、あたしはセルではないです」

レイジのことはそのまま受け売りで使う。だが、そあらさんはその一言ですぐ腕をひっこめた。

「何の用」

声も急速に冷たくなる。

「あの」しまった、自分の頭をげんこつで叩きたい、極秘でお願いします、とメールにも書かれていたよね？ この人にこそ内緒にしておいて欲しい、ということだったのでは？

「あの」

刺すようなそあらさんの視線、まずい、レイジたちが早く来てくれないのだろうか？ どうも車からの電話らしかった。

きよろきよろとあたりを見回す、ちょうど一台、あちらの倉庫の影から出てきた、あれかな？

アクアブルーの乗用車、こないだの車だ！
どうしよう。

「あの」とまた無意味に付け足した。

そあらさんは、車が近づいてくるのを泰然と見守っている。元々
迎えにくることになっていたの？

「あの、ワタシもっ」

「見てしまったからには、アナタも来るのよ」

きゃしゃな腕に似合わず、物凄い力で右手首を掴まれる。

「抽出の時は近づいている、一人でも多く必要なの、一緒に来なさい」

そあらさんの掴んだ手を、昔中学の友だちに教えてもらった合気道の要領でくるりと外す。

「何ですか？ それ。意味がわかりません」

ワタシはきつとして向き直った。

「ワタシにも分るように、ちゃんと説明してください」

その間にも横目で他の車が見えないか探っている、だがワルモノの爽やかな車はもうすぐそばまで迫っていた。横付けされる。

ドアが開く寸前、急ブレーキとタイヤの鳴る音と共に、白いセダ
ンが唐突に現れた。

「そあら！」

運転席から叫んだのは、アオイさんだった。

そあらさんが目をみはった。しかしすぐ冷静な表情に戻り、ワタ
シの腕を強く掴み直した。

水色の車のドアが乱暴に開いて、男がどなる。「イーリア、その
娘はなんだ」

「知らない、でも連れて行く。コアに使えるわ、セルじゃないけど、
まだ」

そあらさんがそう言うか言わないかのうちに、ワタシは叫んだ、大声で。白い車に向かって。

「おいもやさ〜〜〜んつつつ！ こっちです、こっち〜
〜〜つつつ！〜！」

水色の車から降りようとした男たちが一瞬ひるんだ、その隙に腕を振り切り、だっ、と白い車に向かって走る。

「逃げるぞ！」

そあらさんの声が響く。「放つといていい。早く行きましょう」
背広の男に続いて、そあらさんが水色の車に乗り込んだ、またア
オイさんが叫ぶ。

「そあら！ 行くんじゃない！！」

いったん、そあらさんがふり返った。

ゆがんだ口もとで笑っている、美しい顔なのに、どこか鬼気迫る表情だ。

「あの子がどうなるか知りたかったら」

そあらさんがよく通る声で言った。

「土曜日の一三時までには、ラボにいらっしやいな、兄さん」

兄さん？ 今、ニイサンて言った？

「やっぱり、情報は本当だったんだな……抽出か」

「今までで最大級のイベントになるでしょう、ぜひ来てね」

啞然と見送るワタシたちの前を、水色の車は悠々と走り去ってい

った。

後を追うのかと思い、後部座席にあわてて乗り込んだものの、アオイさんはハンドルに突っ伏したまま車を出そうとはしなかった。

「あの車！」

ワタシはすっかり興奮していた。すでに去って行く水色の影をびしっと指さす。

「あれを追わなくていいんですか？ 早く！」

「どこに行くか分った、それに」

見ると、アオイさんの両手は激しく震えている。

「どうしたんですか？」

「もうボクには追えない……これ以上」

怖いんだ、怖い、と繰り返すだけのアオイさん、その肩を静かに、助手席のレイジがさすっていた。

「レイジくん、どうして」

ふり向いたレイジの目は沈んでいた。

「兄きはね、そのラボから逃げてきたんだよ……昔ね」

しばらく休んでから、ようやく大きなため息をついてアオイさんが身を起こした。泣いていたのだろうか、赤くなった目を手の甲で拭ってから、もう一度短くため息をついて言った。

「行こう、止まっていられない」

「今度は、全部ちゃんと教えてくれますよね。ニイサン、ってあの人が言ってたし」

どちらにともなく声をかけると、レイジがまたふり向いた。目がかすかに笑っている。

「アンタのそのアイディアの引き出しも教えてほしいね、どうして

この車が石焼きイモなのか、とかさあ」

「イモが乗ってたからかも」

ワタシは真面目な顔をして言っただけだ。

なんて恐ろしいこと、信じられない。

ってワタシはずっとつばやき続け、それでもその『世界』にどっぷりと浸かっていった。

わかる？　あまりにも恐ろしいことなのに……それに夢中になる、って。

ワタシは結局、あの事件の日から学校が引けるとすぐ、ヒロカワクリニックに通うようになった。

毎晩のように、アオイさんとレイジはテレビやネット動画をつけっ放しにして、セルの動向を注視している。電話やメールもひっきりなしだ。

全国に散らばる『同志』　『フィンセント・クラブ』と名乗る面々とひんぱんに連絡を取り合っている。

ヒロカワ院長が一斉メールをしたせいだ。

ついに実力行使の日が来た。

次の土曜日、正午に『イベント』会場となるラボに集結せよ、と『イヤーエイカーズ・セル』という組織に対抗して、連れ去られた詩音さんを助け、現在進行中の彼らの目論見を潰すつもりなんだって。

決行の土曜日まで、あと一週間もない。

ワタシが足しげく通うようになったのも、まったく何もうるさく言われない。

それどころか、資料プリントアウトして、とかその数値読み上げて、とかまるで前からいた助手みたいに使われている。

ヒロカワクリニツクの地下資料室は、まあ、その前はどんなだか知らないけれども、今ではモニター画面や機器類のずらりと並ぶ一大作戦基地と化していた。

雑用を手伝ううちに、ようやくワタシも頭の中を整理できてきた。

ずっとレイジくんたちのお父さんだと思っていた人　ヒロカワクリニツクの院長は彼らとは全く血のつながりがないのだそうだ。

レイジくんも、実は女子……詩音という名前だった。

ワタシの脇に座っているおサルが、詩音さんの弟で本物のレイジ

……

でもなぜか、この子だと呼び捨てで十分、って思ってしまう。

詩音さんは、最初は何の気なしに『イヤーエイカーズ・セル』に入会してしまった。でもそのせいで、友人も家族も失った　弟のレイジ以外。

身よりのない二人を養子として引きとったのがヒロカワ院長だ。

院長は、以前はクラブの中枢で研究開発をする科学者だった、でも今ではそこを抜けて逆に彼らに対抗する組織を作った、それがフインセント・クラブ。

アオイさんは院長の実の息子なんだ、と思っていたら、何とアオイさんも養子なんだって。

しかもワタシが後をつけるように言われたそあら、という人は、

ヒロカワ院長の養子ではないけど、アオイさんの実の妹らしい。

アオイさんとそあらさんがセルに首を突っ込んだ事情はまだ教えられていない、でもやっぱり、それで人生がおかしくなっちゃったのは確かだよ。

そあらさんは、『イヤーエイカーズ・セル』の一員で、アオイさんたちとは対立する立場。でも、セルからもわずかに距離を置いているのだと聞いた。

その理由はよく分からないが、土曜日のイベントでは詩音さんを助けるのはもちろんだが、できたらそあらさんをも連れ出して保護したい、と院長は言っている。

詩音さんのきょうだいも、アオイさんのところも、なぜそんなクラブに入会してしまったのか、ワタシにはさっぱり分からないんだけど、それでも人生がすっかり狂わされてしまったのは事実。

なぜワタシまでそんな『組織的対立』みたいなのに関わってしまったのか不思議で仕方ないんだけど、いつしか、ワタシに手伝えることはないだろうか、そう強く思うようになっていた。

そして上げた目線の先にはなぜかいつも、おサルレイジがいた。

野性児なのに、やはりどこか詩音さんと似ている。そこが不思議だった。

でも、ワタシから見ると、レイジは意外にも姉がさらわれたことにあまり関心を示していないようだった。

他の人たちがメールやマップや、細かいデータを確認している中で、ひとり呑気にゲームをしていることもしばしばだし。

「詩音さん、無事なのかしら」

ワタシがつぶやいても、ゲーム画面をみながら「だいじょぶじゃね？」くらいの反応しかみせない。

アオイさんの方が真剣な感じだ。ワタシにモニターを見せながら数値ばかりのデータを説明してくれる。

「完全に『カプセル』に入っている、というわけではないようだ、施設内あちこち移動しているし、一度は近くのコンビニだろうか？外にも出ている……もちろん監視付きだろうけどね」

「すごい、分かるの？」

ワタシが目を丸くすると、レイジがゲームの手を休めずに言った。

「イヤーエイクを付けてるからね、ニセモノの」

「発信器を兼ねているんだ」院長が当然のように付け足した。

ハッシンキ？ イヤーエイクというのは近ごろ聞いていたから何となくイメージが掴めたけど、ニセモノとかハッシンキとか、言っていることがよく分からなかった。

きよとんとした顔だったのだろう、ワタシに向かって院長が説明してくれた。

「詩音くんはすでに戸籍上は『死亡』したことになっている。だが、万が一を考えて発信器に使える擬似エイクを耳に付けていたんだ。セルの連中がチェックしても、すぐにはニセモノと気づかない精巧さだ」

「そうなんですか」

カプセル、というのも何なのか聞いてみたけど、その他の話もあってもう頭の中が飽和状態。

院長たちが今から行くこうとしているのは、セルのラボと呼ばれる、全国でも一番大規模なイヤーエイカーズセルクラブの施設なのだそうだ。

そこに今、セル会員たちが『特別なイベント』のために集まりつつある最中なんだって。

「特別イベント？」

「セル会員たちの中でもVIPと呼ばれる一部のヤツらが、群馬のミヤシロ地区へ集団移転して、あそこで強大な『アーティライフ』を構築しようとしている」

「あーてい、らいふ？ 何それ。初耳だ」

今までゲームで遊んでいたレイジが急に耳をこちらに向ける。

院長、今ではすっかり研究者としての貌を取り戻した廣川博士が言った。

彼は昔そのラボで働いていたのだった。中があまり変わってなければ案内できるが、と言った口調はどこか怖いくらい。確かに、眼鏡の奥の目は何となく時々……マッド・サイエンティストって感じ？何がきっかけてセルを抜けたのかは、まだワタシには教えてくれないけどね。

「アーティライフというのは、『人工生命体』の、アーティフィシャル・ライフのことだ」

「あー、前に言ってた、巨大ロボ計画
レイジがもつともらしく相槌をうつ。」

「オマエには理解できないかと思ってそう説明したけど、実際はロボットじゃないさ」

「何だよ、いつつオレばかりアホでごめんなさいね」
博士はつい苦笑してからワタシには真面目な顔を向ける。

「元々、イヤーエイクをつけることで個々の生体エネルギーをサーバーに送り、集めたデータを取捨選択しながら一つのアーティライフを創り出すことが彼らの大きな目的だった。」

私が出てきた少し前には、計画はいったん白紙に戻されていたはずだった……

あまりにも非人道的すぎる、という理由でね」

「非人道的？ どういうことですか？」

ワタシの声が裏返る。博士は変わらぬ落ちついた声音だ。

「大量の『人体セル』をそれぞれ特殊なカプセルに配置してサーバーに直結させ、そのセルから『コア』を抽出してサーバーに転送する、計算上では、計画されていた施設なら150体のセルからコア抽出するとなると、時間にして10分から20分くらいで生命体としての巨大頭脳が完成する」

「150体……人間が、ということなの？」

博士は当然のようにうなずいた。

「カプセルに配置、ってどういうことなんですか？ その人たちがコアを抽出して、後はどうするんですか」

「使い捨てってことだよ」

アオイさんがどこか投げやりに言葉をはさむ。日頃の口調ではなかったので、びっくりして彼を見た。

「中身を巨大なバンパイアに吸い上げられ、カラカラに干からびて死ぬのさ」

「まあ、比喩的な表現ではあるがね」

博士が、脇に座っていたアオイさんにいたわるような目をやった。

「今までネットを通じて配布されていたイヤーエイクが行っていた

のも、コア抽出の一手段だ。ただ、個人個人に対する遠隔操作ということもあって、微々たるデータしか吸い上げられない。それで、最初に強制『寄付』を設定することで『派生物』の回収を行う仕組みを取り入れたんだ」

「派生物、というと」

「大切なものを取り上げられる時、人はかなり動揺するよね、その心の動きは非常に大きなものだ、イヤーエイクはそれを抽出して転送する仕組みになっている。それに、そこで寄付された人間を本部は実験体として使用できるし」

「でも」

ますます不安になる。やっぱりついて来ない方がよかったのかな？

「150人とか……どうしてそんな数が」

逆に博士が聞いてきた。

「彼らが今、掴もうとしている情報が何だか知っているか？」

「さあ……」何も思いつかない。

「たいがいは、ネットで調べたりすれば何でも解るでしょ？ それ以上欲しい情報なんてあるの？」

「そうだよな、とレイジも宙を見る。」

「これ以上、何を知りたいんだ？ 未来とか？」

「ある意味、そうだ」

博士のことばにレイジはぎょつとして目をむいた。彼も初耳だったようだ。

「未来が、わかるの？ セルのその……キョダイズノウで？」

「もちろんそれは、象徴的なことばだ」博士はファイルを引き出し
ては開き、一枚の新聞切り抜きを引き出した。

「何？ 地震予知判定会による長期予知の限界……？」

「我々がまだアーティファクトのプロトタイプ開発に関わっている頃、
太平洋連動地震について予知できないかという相談が当時の政府か
ら持ちかけられた」

「できるんですか？ そんなことまで」

「限界があると言っても、たくさんの知識や微細な予知感覚などを
集積した膨大なデータを有効な手段で解析していけば法則性は必ず
みつかる」

博士の表情が微妙に変わった。弱者をいたわり、病める者たちを
癒す医師の顔にほんのかすかに、研究者としての好奇心に満ちた光
がはしる。

「当初は150体で計算されていたが、施設が整えばもしかして倍
以上のカプセル接続で」

「……でも、人間が、ですよね」

ごく小さな声で反論してみる、だが、すでに博士は聞いていない
ようにPC画面に映るニュース動画と詩音さんのものであるという
バイタルデータの方に目をやっていった。

詩音さんのことがホンキで心配になった。

連れて行かれてもう数日経ったのに、彼女は本当にほんとうに大
丈夫なのだろうか？

聞くだけで恐ろしい組織に、彼女は捕まっているというのに。

レイジの方をそっとうかがってみる。彼は、無言のまま、子供の
ように爪を噛んでいた。

急にぞくりと寒くなった。

今から行くところとしているこれは、遠足なんかじゃあないんだ。

「ねえレイジ」

ついにたまりかねて、クリニックからの帰りかけ、ワタシは送りに出てくれたレイジにくっついてかかった。

「ちょっと、呑気過ぎやしない？」

レイジの表情が硬くなった。「何の話だよ」

ワタシは息を大きく吸いこんで、できるだけ冷静になろうと口調を抑えた。

「いくらデータ的には大丈夫だって言っても、画面にみえるのは、単なる数字じゃん？ 実際詩音さんがどこで何をしているのか、どんな思いでいるのかなんて、本当にあの数字が教えてくれるの？」

詩音さん……お姉さんのこと、心配じゃあないの？」

レイジの目の中に、一瞬怒りが浮かんだ。ワタシははっと息を呑む。

彼はさっと背中越しにふり向き、まだ明かりの残っているクリニックのカンファレンスルームに目をやった。

ふり向いた時には、怒りの表情は消えていた。「あのさあ」
のんびりと、わざとふざけているような口調、でも目の中に見えるのは、どこか哀しげな色。

「オレっちさ、火事でおやじもオフクロも死んじゃってさ、もうどうしようもないって時にあの人たちに助けてもらったのよ」

肩をすくめながら明かりのついた方を指し示す。

「それにオレ、あんま頭良くないしさ、組織とかセルとか言われてもさっぱり何だか分かんねえ、そーゆーお仕事の時は、オヤジとア二キに任せるしかないしね」

それでなくても、もう明日には動き出すんだしな、とレイジはきやはっと笑う。

「あの人たちを、信じてるってことなんだ？」

ワタシ、言わずもがなのことを尋ねているって、自分でもよく分かっていた。

でも、聞かずにはいられなかった。レイジの答えは決まっている。

「オレは姉きが信じてるものを信じる」

彼の目が急に真剣になった。

「動く時になったら、オレは暴れるかな、うーんとね」

そして静かにこう付け足した。

「オレの活躍、間近で見たいだろ？」

ワタシは急に顔が熱くなってうつむいた。

「別にアンタが活躍してもしなくても、いいけどね」

「なんだそりゃ」がっくりしたような声に、ついこう言い添えた。

「とにかく、無事なら……アンタも詩音さんも」

「ああ」

彼が急に、ワタシの身体に腕をまわした。「オレさ、たぶん大丈夫だし」

「けっこうな自信だね」ざわつく胸の鼓動に気づかれないように、ワタシもおそろおそろ腕を彼の腰に回す。

「それに、アンタも守ってやってもいいよ……詩音さがす時に余裕があつたら」

「何それ。もしかしてかなりのシスコン？ アンタ」

「別にアンタも大丈夫って気がするけどね、実はけっこう身が軽いんじゃない？ オレがサルならアンタもタマリンとかじゃね？」

「タマリンて何」

憎まれ口をお互いに叩きながらも、ワタシたちはしばらく、外の暗がりでも強く抱き合っていた。

離れた時に、彼が更に唇を求めようと顔を近づけてきたので、ワタシはやっぱり押しとどめる。

「この続きは、殴りこみが済んでスッキリしてからにしよう？」

「やрийい！」レイジは大げさに喜んでいる。

「なら、すぐじゃん、すぐ片付くしさ、ラッキー！」

ようやくいつもの元気が戻ったように、駅までの道すがら、レイジはずっとせわしなく喋ったり笑ったりしていた。

ワタシはそんな彼をやっぱり横目でちらちら眺めながら歩いた、止まらない表情を少しでも目に収めようとして。

そして、ついに出発の朝。

「入院患者さん、くれぐれも頼むよ」

院長が、留守番を買ってくれた友人のドクターにふり返りながら叫ぶ。

「日本酒もワインも好きなの開けていいからさ」

「早く帰らないと、全部飲んじまうぞ、気をつけてな」
借りてきたバンにワタシたちは乗り込んだ。

ミホも行くって連絡あった、中町の交差点で拾ってくよ、ととア
オイさんが言った。

15分後、車に乗り込んできたミホさんは、やっぱり同じ年くら
いだろうか。

最初に乗り込んだ時から一言も口をきかなかった。

元々暗い感じではなさそうだが、かなり緊張しているのか、青白
い顔でずっと拳を握りしめている。

レイジがあっさりと紹介した。

「この人、みぽりん。ケンミヤ・ミホ。姉きの元親友で、アニキの
彼女なんだ」

元親友、ということばを聞いた時のミホさんの表情が気になっ
たけど、かんとんに

「こんにちは」と声をかけて、二列目の助手席側を譲ってワタシは
後ろに移った。

ミホさんはこちらに一瞬だけびっくりしたような目を向けてから、
隣のアオイさんを見た。

何か言いたそうだったが、すぐに車は出発する。

「車に酔うよ」アオイさんが白いハンカチで彼女のこめかみを軽く
拭いてやってから、彼女が握りしめたままの手にそれをそっと載せ
た。

滑り落ちそうになったハンカチの端をとつさに押さえたものの、
ミホさんはそのまま膝の上で握り締めていた。

運転は博士とアオイさんとが交代で行っていた、助手席にはレイジ。

ナビを見ては渋滞情報などをこまめにチェックしている、と思うと急にTVに切り替えて、どうでもいいような子ども向け番組など見て笑っていた。

使命感とか悲哀感というものには無縁のような笑い声だった。

「ねえミホりん」

急にレイジがふり返り、じつと黙りこくったまま座っているミホさんに無頓着に話しかける。

「後ろにまだ缶コーヒーあったと思うんだけど、一個ちょうだい」

ミホさんが動かないので、後ろの席に座っていたワタシが、しかたなく後ろに手を伸ばして、バッグから一缶出して身を乗り出した。

「お、サンキュ」

レイジが後ろに手を伸ばすが届かない、そこにまん中に挟まったアオイさんが手を出してワタシから缶を受け取り、レイジにパスした。

腕を伸ばした時、どうひねったのか急にアオイさんが「痛っ」と顔をしかめ、シャツの前を押さえて二つ折りになった。

「だいじょうぶですか」

覗いてみると、アオイさんは脂汗を流している。

かなり痛そうだ、でもどうしていいか分からない。と、そこへ今まで動かなかったミホさんがそつと手をのばし、ハンカチでその汗を拭いてやっていた。

「痛いんですか？ どこか」

そう訊いてみると、

「この人ね」

急に恋人の目になったミホさん。うわ、こっちが照れる。

「胸に穴があつたの、塞いだ痕が今でも痛むことがあって」

「ロキソニン、出して」

運転中の博士の言葉に今度はレイジが、ダッシュボードから小さ

な薬のシートを出した。水はどこだ？ と聞くのでワタシは急いでまた後ろのバッグからミネラルウォーターのボトルを取り出す。ずっとアオイさんは浅い息をついていたが、しばらくしてから薬を飲んで少し落ちついたようだ、ようやく背もたれにゆったりもたれかかった。

心配そうにのぞいていたのに気づいたのか、アオイさんがこちらをふり向いて柔らかく笑ってくれたので勇気を出して訊ねる。

「胸に穴があったって……ご病気だったんですか？」

「いいや」

アオイさんはちらっ、と運転手に目をやる。

「あの人たちに関けられた、昔ね」

博士が？ つい、声を上げてしまったけど、レイジはテレビ画面に気を取られているようでふり向きもせず、ミホさんもイヤホンをつけたまま、目を閉じていた。博士が前を見たまま答える。

「胃ろう、と言ってね、食べ物直接胃に送るものなんだが」

「なぜそんな」

アオイさん、昔、大きな病気でもしたのだろうか。私のいぶかしげな表情にこたえたのか

「僕は」

とアオイさんは語り出した。

「僕は、その時まだ中学二年だった。

母が、上機嫌で帰ってきた。

イヤーエイク・セルクラブに入ったの、これで私も今の職場でもっと活躍できるわ。

珍しく早く帰ってきて、出来あいの惣菜、プラスティックのふたを長い爪で外しながら、自慢げに何度もそう言っていた。

今日はご褒美にこれ！ と出したのはハーゲンダッツのアイス、僕が好きなのを知って何種類も見つくるってきてくれたらしい。くどいのが嫌いな姉のそあらは、どちらかというアイスよりシャーベットの方が良かったな、とつぶやいて、いつものように母にじろりと睨まれていた。自分には新発売の缶チューハイを買っていたような覚えがある。

数日後の土曜日、僕は部活に行くために朝早く起きた。母は特に休日ともなれば午前中いっぱい寝ているから、弁当を作ったりとか、一人で支度をしていた。

その時、男たちが踏み込んできた。

そあらもまだ寝ていた。父は出張中で明日まで帰ってこない、と言っていたが、後で考えると母はそれも計算していたのだろう。父は後で事情を知らされた時、髪をかきむしって暴れ回ったらしい。警察には相談しなかったのだろうか。彼も現実的な人だったから、多分したんだろうな。でも、当時でもセルの組織力は強大だったから、たぶん警察もあてにはならなかったのだろう。彼はその後少ししてから黙って家を出て、そのまま山の中で自ら命を絶った。それを知ったのもずっと後だったけど。

僕は『寄付された』ということを連中から聞かされた。その時にはすでにラボに『配置』されていたから。

配置といえは格好いいが、ずっとカプセルのような入れ物に閉じ込められていた。そう、大人がよく泊まるというカプセルホテルみたいな感じかな、それが立ってるんだ、いくつもいくつも。背後以外は透明なガラスのような材質、その中に僕のように寄付されたり、何らかの理由があつて連れてこられた人たちが『一体』ずつ収まっている。よく分らない気体が満たされていて、身体中には訳の分らないケーブルにホース、時々全身の筋肉をほぐすためだろうか、弱い電気が流れ、エアマツサージも行われる。

食事は、一応あごや舌の機能が損なわれないように経口で摂る。だが大概は、胃ろうと呼ばれる穴を開けられて、胃に直接流される。手術痕がずっとジクジクと痛かったが、それすら自分で触れることができない、手足とも固定されていたから。

排泄も何も、そのまま行われて後は自動で綺麗に洗浄、乾燥してしまう。

そして耳には、ラボのどこかにあるサーバーに直結された『イヤ―エイク』が装着されて。

毎日毎日、二十四時間ずっと実験動物として暮らす、今まで想像したことともなかった生活だ。いや、生活ですらない、『生きた状態で置かれている』、それだけ。戦争や災害、犯罪に巻き込まれるなんてこともそうだけど、信じられない、でもそれは一分一秒ごとに襲ってくる現実だった、あまりの絶望感に、時おり発狂しそうになる、精神バランスがぐくつと傾く時があるんだ、支えられて立っているのに、急に足もと、床が抜けてどこまでも落ちていくような感じ。しかしそれを感じると、イヤ―エイクは即座にデータ転送し、今度は中枢から自動的に精神安定派が送られてくる。

意識を失うことすら許されない、睡眠はいつも決まった時間に決

まった分だけ許されていた、あとは意識をそれなりに鮮明に保っていることが要求される……地獄をくつきりと心に刻むためにね。

幼い頃、母に連れられて行ったお寺に、地獄図という画が掛けられていた。細かい細い墨の線で人びとが血の池や大きな黒い釜の中や、身の丈より長い針に覆われた山の中、色んな苦痛に責め苛まれ、ところどころに鬼が目をもいて亡者たちを見張っている、ボクは怖くて見たくないのに、どうしてもそこから目が離せなくなった。

セルのラボに拘束されている時に、ずっとその絵が頭にこびりついて離れようとしなかった。ああ、ボクは今あの地獄の中にいるんだ、誰も助けしてくれる人もなく、そればかり考えながら。

廣川は、ラボの中でボクのラインを担当する科学者だった。ラインと言っても四体一組だったらしく、ボクはそのうちの一体だった。彼ら科学者はイヤーエイクという媒体を用いて、ボクらの意識を『抽出』して中央に集め、半生命体である巨大頭脳を操ろうとしていた。彼らが欲しかったのは、ちっぽけな人間たちの、ちっぽけな意思や感情……それを文字通り集めて、大きな力に集約しようとしていたんだ。

被験者たちは次々と入れ替わった、案外もたないものなんだ、ある日近くのカプセルが開いて、白衣の男たちが駆けつけ、中の身体からコードやケーブルを外していく、だらんとした身体のおちこちに取り付けられた、今まで彼らが生きていた、という証拠を、無造作に引きはがしていくんだ、そして、すぐに黒いバッグに収められ、ジッパーが閉じられる。黒いさなぎのようなその塊を、作業服の連中が二人くらいで運んでいくんだ、どこか僕からも見えない所に。

僕はだから、けっこう丈夫だったんだろうな、そんな光景はしょ

っちゅー見たけど、結局生きて出て来られたからね

「ひどい……」

他にことばが出ない。そこに

「人体実験よ」

急にミホさんがそう声に出した。いつの間にか目が覚めていたらしい、イヤホンを外してこちらを見ている。

「私も最初、全然信じられなかった」

レイジの姉・詩音さんに斬りつけ、死なせてしまったと思いこんだミホさんは呆然としたまま家に帰った。翌朝、聞いたニュース。詩音さんの自宅が全焼して、親子三人の遺体が出た、そのうちの一人は詩音さんらしいというのに、更にシヨックを受けた。

「私が殺そうとしなくても、どうせ火事で死んだんだ……そう思ったら急に何もかも空しくなって」

とても静かな人かと思っていたのに、本当はもつと動き回りたい人なのかも。声を無理に抑えつけている感じだった。

元親友、とレイジに言われた時のミホさんの辛そうな目が忘れられない。

「お互い親友だと信じていたのに、そうよ、シオンはそう信じていたからセルとの取引に私との思い出を選んだの、それをあのルネが悪用したのよ」

「ルネ？」

「ルネはセルの宣伝員なんだ」
博士が言った。

「あの子も可哀そうな子だ。それでも、そんな同情をしていたらキリがないがね」

「ねえ……スズハラさん」

もう10キロも走ればラボのある地区に入ろうかという時、やや細い県道に曲がってからミホさんが問いかけてきた。

「一番大切なもの、大切な人、それは人それぞれ違うんだけどさ……すっごく小さなものかもしれないし、この世の中全体、なんて思う人もいるかも。」

あなたにとって一番大切なものは何？」

「え、ワタシ？」

もちろん大切なものは一杯ある、でも、どれか一つ選ぶとしたらどうだろう？

「愛……って答えるかなあ」

助手席からレイジが「愛だろ？ 愛」と誰かのモノマネらしき科白を吐いてきやはっと笑う。

全然意味が分らない、とワタシは少し口を尖らせて
「ツキナミだけど」と付け足す。

ミホさんが畳みかけるように聞いた。

「それが他の人から取られてしまおうとしたら、どう思う？」

「……うーん、すごくイヤ、かな」

「セルは私たちに甘い餌をバラまいておびき寄せて、一挙に捕まえたのよ、獲物として。エモノというか、家畜として？ 私たちの大切にしているものを絞り取るために」

許せない、そういうミホの目はきらきらと光っている。やはり激しい人なんだ、根っこは。

「やっと自由になれたシオンまで、またさらって行くなんで……」

さあ、着くぞ。と博士の声が飛んだ。

「アオイ、招待状を用意してくれ、ミホくんも念のために」

一般会員向けの招待状をミホさんが、VIP用の招待状をアオイさんが出す。どちらもセルネームとパスワードでPCから印刷したもののだが、VIP用には更に非会員の招待者を三名まで記載できるようにになっている。

アオイさんはそこに書かれた名前を確認した。

「どっちが危険がないんだろう……ミホだって擬似エイクなのがバシたら捕まるかもしれないし、かと言って僕自身もニセモノなんだからそれに相乗りするのも怖いな」

すでに中に入ること自体は、恐怖心を克服したのだろうか、手の震えはすっかり無いようだった。

「まあ、どっちにしても捕まれば一巻の終わりだよ」

レイジがさらりと言って続ける。

「明日香、外に残ってるよオマエは」

「いやだ」打てば響くようにそう答えてしまった。

「ばかだね」即答でレイジが返す。

博士が少し考えて言った。

「こんな場所に一人で残しておく方が怖いかな、一緒に中に入った方がいい」

やや真面目な顔で付け足す。

「ただし、万が一逃げ出すことになったら一人でどんどん敷地外に出るように。今日は一般会員も多いからあまり大きな騒ぎにはならないと思うが」

「わかりました」

解ってなかったけど、ワタシは反射的にそう答えた。

それでももうその議論は済んでしまった。

車から降りたレイジは「ちとシヨンベン」さっさと少し離れた林の中へ走って行ってしまった。

「待てよ、1人で行くんじゃないぞ」

博士の押し殺したような叫びを背中に聞きながら、ワタシは小走りにレイジを追いかける。

レイジは、木立の陰になってところで急にくるとふり向いてワタシを抱きとめた。

「そんなに立ちションが見たいのかよ、お前」

そのために来たのではないのは分かっていた。

ワタシは、彼にぎゅっとしがみつく。

「死ぬなよ、中で」

彼の声が、心の中だけに響くような明瞭さで小さく耳に届いた。

「俺、たぶんずっとは守ってやれねえからさ」

「そんな心配してんだ？」

「死ぬなよ」

「その言葉、そのままアンタに返すわ」

「アホかお前」

「それも返す」

束の間だけど永遠の祈りの時間、ワタシたちは抱き合っていた。

駐車場にはお仕着せの誘導係が何人も立っており、彼らが示す通り、ワタシたちの車は他の車に続いて奥へ奥へと入っていった。

奥へ、奥へ。

よく手入れされたような背の高い木々がまばらに配置され、その向こうに建物の群れが、それから青く澄んだ空に白い雲がのどかに浮かんでいるのが見える。

見回してみると広々とした敷地なのに、なぜかワタシは言いようのない閉塞感に囚われた。

急に背筋が寒くなる。

車を停めてから、ワタシたちはまるで遊園地のようなゲートへと歩いて向かい、ここもまた遊園地の入口を模した受付を通る。

「招待状をお持ちの方、一般会員の方はこちらに並んでください、特別会員の方とご招待の方は離れないようまとめておいで下さい、人数の確認を行います」

受付のスタッフはグレイの制服に同色のベレー帽と赤いスカーフとに身を包んでにこやかに声をかけている。ますます遊園地だ。

「売店とか、あんのかなー」

ワタシと同じことを思ったのか、レイジが呑気そうな口調でそうつぶやいた。

でも、その目の中には最初の頃に見た鋭い光が垣間見える。

どやどやと一般会員が入って行く中、ワタシたちもどんとんと押

されてしまう。流されて前に出たミホさんは

「先に、先に入ってるからー」

と叫びながら先に人の波の中に消えていった。動き出せたせいか、最初に会った時よりずっとすっきりした表情だった。

アオイさんはワタシたちを引きつれ、手近なスタッフにチケットを見せた。

スタッフはバーコードリーダーらしき機械を彼の耳にかざした。アオイさんはごく普通の表情で耳をみせている。瞬間、博士の顔がこわばった。だが、リーダーのランプはグリーン。

虚偽のデータは有効だったようだ。

「セルネーム・カイル0011さんですね、御同行の方がええと、スタッフが指で数える。」

「セルではない方ですよ、全員。ええと三名さま」
アオイさんは黙ってうなずく。

ワタシはついごくりとつばをのんだ。レイジは表面上は楽しげに奥の大きな建物群を眺めていた。「すげーなー、やつぱ」

博士が、いいかな？ と控えめに言うとスタッフはああ、と我に返ったように顔を上げた。

「それでは」

次の言葉にまずアオイさんが、そして続いて博士が凍りつく。

「御同行の方、もうーラインずれてあちらで『処置』お願いします。耳にタグをつけるだけです……」

いえ、何も痛みなどということはありませんので」

目にとびこんだその光景、一番端のラインにはすでに不安げな目をした群衆がかなりの列になっていた。招待されて来ただけなのに、何をされるんだという声もする。

すでに耳に『イヤーエイク』を装着されて中に入った数も相当なものだった。

招待者としてチケットを出した一般会員の中には、すぐに事情を察した者もいたようだ、でも驚いたことに、誰もかれも反応が薄い。自分たちも『痛い思い』をしているはずなのに、何かを犠牲にして会員になっっているはずなのに、自分の招待者にも同じ処置を黙って受けさせている。

博士がアオイさんに目配せした。それから「明日香くん」小声で指示を出す。

手にはごく小さな丸いシールのようなものを持っている。

「耳の後ろに貼って、どちらでもいいから、見られないように早くレイジにも同じ指示を出している。」

窓口がやや混乱ぎみなのが幸いした。博士はじりじりと後ろに下がりがり、後から来た人々を前にやっている、そのうち、レイジに目で合図してから一人のバッグにそつと手を差し入れ、中身を下にバラまいた。

レイジが叫ぶ。「おばさん！ カバンの中身落とした！」

派手なプリント柄のワンピースに身を包んだ太めの女性はその場に立ちすくみ、次の瞬間に「いやだわ！」と四つん這いになって拾い始めた。焦っているせいかなかなかものが集まらない、周りの中

年男性や若い女性など、二、三人が手伝いだした。

「今だ、中に」

スタッフも気をとられている間に、ワタシたちはするりと中に入った。早足で歩きながらワタシは博士に訊ねる。

「何のシールなんですか」

「位置情報などは発信しないが、それなりにもっともらしいデータ転送はしているはずだ。擬似エイクの簡易版だ、今日くらいは持つだろう」

「でも……」

またふり返ってゲートの方を見てしまう。

「みんな、どうして何も文句言わないのかしら、自分だってイヤーエイクしてから何かとイヤな思いしているでしょうに、自分の連れにも同じことさせて」

「簡単なからくりだよ、彼らはゲート通過時に既に思考制御を受けていたんだ」

まだかなり込み合っている建物前の広場で、博士はようやくアオイさんの姿を見つけて手で招いた。

「ミポリン！」

レイジが急に大声を出す。

「どこー、ミポリン」周りの人がぎょつとしたようにふり向いた。ハラハラしちゃう、まったく。

「いた！」レイジが指さした先から、頬を赤くしてミホさんが走ってきた。

「てか、ジョージ目立ち過ぎ」いきなり腹にパンチを喰らわせる。つい地が出てしまったような感じで、ワタシもちよつとだけ緊張がほぐれた。

「よかった、無事に通りぬけられたんだね」

アオイさんもかすかに笑みを見せた。

「なんですかそのジョージって」

ワタシは少し安心したはずみについミホさんにそう聞いてしまったが、ミホさんは軽く答えてくれた。

「何だかおサルみたいじゃん？ 落ちつきないし。だからお猿のレイジならぬお猿のジョージ」

ワタシもおサルみたいだなと思ったんです、と言おうかと思ったが

「元々、シオンがつけたあだ名なんだけどね」

そう言って、ミホさんは背後の大きな建物を陰りのある目で見上げ、ワタシは出かかった笑顔をそっと、ひっこめた。

03 ルネ vs ・ イーリア 1

「逢^あえてうれしいわ、イーリア」

ルネは頭半分背の高い彼女を見上げ、うれしいと言う割には冷静な声で告げる。

「あなたもいると思ってたわ、ルネ」

イーリアは、あえて彼女の目を見つめた。

館内アナウンスは、あと三〇分で会員たちをホールに入れるとスタッフたちに告げていた。

バックヤードとラボをつなぐ通路には幹部や研究者たちがあちこち落ちつかなげに動き回ってコア抽出のための最終調整に余念がない。

その通路の更に奥まった場所、誰からも注目されない通路の隅で、二人は対峙していた。

「二人きりになるのは、本当に久しぶりねイーリア」

ルネはにっこりと微笑む。

「一週間前からずっと、お部屋を訪ねようと思ってたんだけど忙しくて……ごめんなさい」

「どうぞずっと監視がついていてうんざりしてたの、捕まっただみたいにね。いつ遊びに来てくれてもよかったのに」

ことばの中にかすかに棘を含ませ、イーリアは答える。

それにはお構いなく、ルネは訊ねた。

「じゃあ、『コア』と『カプセル』ももう見学した？」

「もちろん。引率とくどい説明付きだったけどね」

イーリアはあごを上げた。

「壮大な眺めだったわ、楽しみね、コア抽出が。ところで」
さりげなくルネに寄る。

「カプセルはいくつ、用意されているの？」

「コアの周りに300、すでに280以上の献体がセットされているわ、そして」

ルネもかすかに間を詰める。

「テラスからよく眺められる、最後の特別な『セル』にも一人、特別な人がセットされたの」

わずかに眉をひき上げたイーリアに、ルネはふんわりと笑いかけた。

「特別な人……私とあなたと、どちらもよく知っている子。やっぱり私たちの見たてがよかったのよね、骨格が気に入られたらしい」
「もしかして」みるみるうちに、イーリアの表情がけわしくなる。

「ライムを？」

「もうその名前はない、『詩音』でいいわ。彼女は自分からイヤー
イクを棄てたの、裏切り者だし、利用価値も出来てちょうどよかつたんじゃないか？」

本名がそのままセル・ネームであるルネは、いつも学校で見せていた笑顔を束の間みせてから、本来の貌にもどる。

精悍な兵士の表情に。

「でもねイーリア、このレースは結局私の勝ちよ」

「あなたとは何も競争してないわ」

イーリアが静かにこたえると、ルネがムキになって言いつのる。

「詩音が会員になる時、私のメモがヒントになったはずなのになぜかあなたのポイントになったじゃない。本部にクレームをつけたら逆に減点されたのよ、彼女はイーリアに勧誘されたという判断だ……って。そう言われたらもうクレームもつけられない。」

あなた、上に何て報告したのか知らないけど、何さまのつもり？
ちよつと美人で胸も大きいからって、どこまでも高慢なのね」

「私はライムについては一切何も関与していない、それにあなたはその胸が好きだってよく言ってたわ、ベッドの中で」
無表情でイーリアがうそぶく。

ルネは一時赤面したものの、きわめて真剣に相手に喰ってかかっている。

「そんなことどうでもいいわ。私はポイント0から幹部候補にまでの上がったのよ。ほんと、ゼロからよ。もしかしたらマイナスという時もあったかも」

「マイナスと言えば」

イーリアが涼しく言い添える。

04 ルネ vs . イーリア 2

「うちの町でもあったわね、残高マイナスなのにポイントを使おうとして『崩壊』してしまっただけでオナナの話」

ルネも、ああ、と蔑んだ笑いを浮かべる。

「映画一本見たかっただけで、無理してポイント使った莫迦がね。私も笑えない、一歩間違えばあんなっていたかも……助けてくれる人もいなかったし、あなたみたいな身内のコネもなかったしね」
ルネはわずかに胸を反らせて続けた。

「今日もコア抽出には、テラスに招かれてるわ、『アースマスター』に直接お招きを受けて」

「偶然、私もよ」

イーリアは冷たく答えた。

「いい場所、よく見られる……人殺しの一部始終がね」

「あなたほどの人がヒトゴロシなんて言葉を使うわけ？」
ルネは更に言いつのる。

「元はと言えば、あなたに憧れてセルに入ったのに、それを今さら人殺しだなんて評価するの？　どうかしてるわ、イーリアは信じていないの？　セルを」

「私はセルを信じて入会したわけじゃない」

イーリアの目に危険な光が宿る。

「兄を連れ去って、母を狂わせ、父を殺した奴らがどんなものかこの目で確かめたかっただけ。ルネ、あなたみたいに最初から捨てる物も無くて大組織にすぎりついてしまった孤独な人間には理解できないのかも知れないけど」

「そうね」ルネはかすかにうなずいた。

「私は勝手にあなたに憧れて自分も同じ道を選んだだけ、そう言いたいんでしょ」

イーリアは表情を変えない。ルネは更に言葉を続ける。

「確かにあなたから『セルクラブに入りなさい』とは一言もなかったわよね。逆に止めようとした、でもそれが余計に火をつけるということくらい、解ってたでしょうに」

「そうして他人のせいにするばいい。あなたは多分」

イーリアの冷たい声が薄暗い通路に響く。

「元々棄てるものがなかったから、セルにはおあつらえ向きの人材だったのよ」

ルネはようやく息を整えて、普段の顔に戻る。

「そうね……元々、大事なものが無かったから、逆によかったんだわ。孤独には孤独のメリットがある、野心を実現させるのにも有利だしね……あなたのお母さまみたいに。」

あなたもあのお母さまくらいに野心家だったらよかったのに」

「その野心のおかげで、家族を不幸にしたんだけどね」

イーリアは口の傍でわらう。

「イーリア」ルネは歌うように問いかける。

「イーリア、イーリア、あなた……そんな事言っていると反逆と受け取られるわよ」

「私の思いは誰にもジヤマさせない、たとえ、セルであっても」
イーリアはきっぱりと言い切った。

「わかった」ルネは声を落とし、イーリアから一步しりぞいた。

「テラスで殊勝に見学なんて、そんなわけない……止めるつもりね」

「止めるんじゃない」

ルネをすっ、とかき抱くとイーリアは彼女の脇腹に小ぶりな銃を突きつけた。

「ぶっ壊してやるの、今決めたけど、あなたを人質にしてね」

「M36レディ・スミス」ルネは遠くを見て暗唱するようつぶやく。
「ありがとうイーリア、こんな状況でもなければ再び抱いて貰えないのは残念だけど」

「行きましよう、でも前を歩きなさい」

ぐい、とルネの背中を銃で押すと彼女はクスクス笑いだした。

「やっぱり、イーリアは素敵」

軽く首を動かしたのをまた、イーリアがぐい、と銃で押す。ルネ

のクスクス笑いは止まらない。

「別におどさなくてもいいわよ、一緒に大人しく見物しましょ。あなたと私の仲だし」

「もうあなたとは終わったの、ルネ。あなたがどうなるかと……組織から弾かれようと、もちろん、トップになつたとしても興味はないわ」

イーリアはルネを誘導しながら辺りに油断なく目を配る。

「どうせ手でもつないで一緒に見物するつもりだったんでしょ、いいわよ後ろから抱いていてあげるから」

「そんな手間かけていただくつもりはないし」

ルネが鼻で笑う。

「私が今回何を寄付したか聞きたくないの？」

ルネは感情を込めずに訊ねる。

「私は幹部で居続けるために、ずっと彼らに何かを与え続けなければならぬ。持たざるものは生き残るために」

少しだけ、イーリアの足が鈍る。そこをルネは見逃さなかった。

「あなたに招待状を出したのは私。

テラスではない、もっといい場所にお招きしたかったの、特等席に」

夢見るような口調。しかし瞬時に向きを変え、イーリアの腕をとった。

銃が床に転がる。

「仕方ないから詩音が選ばれただけ……でもまだ間に合うかもしれ

ない、取り換えが」

いつの間にか取り出した別の銃を、ルネはかつての愛する女性ひとに突きつけ、今度は先に歩かせて奥へと向かった。

そしてその一部始終を、監視カメラで視ていた男は、恰幅のよい身体を揺らすように、低く笑っていた。

「素敵だ……若く美しい女性どうし、本音の話し合いか。愛と裏切りのドラマだ」

ふり向かずに、後ろのスタッフに命ずる。

「今の部分はデータ保存しておいてくれ、コレクション用にね」

建物の前にすでに何人かの誘導係が並んでいた。

こちらです、と拡声器の声につられて人びとは何となく集まってい。半分割れたような声が繰り返している。

「四列でお並びください、前につめてください、四列に並んで……」
かなり待つのだろうかと思ったけど、並んだ人びとは次から次へと建物の中に入っていく。

濃いグレイのタイルに覆われた、倉庫か工場かと思われるような四角い建物は何階建てなのだろうか、ずいぶん背が高い。群衆は誘導されて、入口から薄暗い通路を進んでいった。

スタッフのうち、制服が明らかに一段上みたいな色遣いの男が、建物の入り口でまた拡声器を使ってアナウンスしていた。

「止まらずにお進みください、コア抽出イベント会場はこちらです。泊まらずにお進みください、中で四列になってお待ち下さい。中には十分なスペースがありますので、どうぞ慌てずに前に進んでください。通路は徐々に下り坂になっておりますので足もとにご注意ください」

ずいぶん長いことだったが、ご注意ください、まで言うともまた頭から繰り返している。

この男のセリフを一五回くらいは聞いただろうか、ワタシたちは早い方だったのか、ふと後ろを見るととんでもなく大勢の人波がみえてぎよっとした。

ちょうど、劇場か映画館に入ってきたようだ、それがディズニーのアトラクション施設に入ろうとしているのに近いかも知れない。

これほとんど、イヤーエイクがついているんだよな……おそろおそろワタシはまわりを見回す。

擬似エイクというのをつけたフィンセント・クラブの人もしはいるんだろうけど、ぱっと見だけで判るわけではない。

隣にいたのが、大学生くらいの男性グループだった。ごく普通 of 感じの人たち。ずっと、ゴールデンウィークにサークルで合宿した長野の話をしている。

「蕎麦の食い方からしてさ、ずっとあのオヤジ、レクチャーしてたよな」

「別に食べればいいのに、普通に」

「美味かったけどさ」

「俺はもつと汁が濃い方が好みだけどな」

「新蕎麦の頃また来い、って言ったっけ」

「ニイノさん来るかな」

「ニイノさん来るなら、タケも来るよなー絶対」

「タケミヤ」ははは、と笑い声がかぶさる。

次にタケミヤという仲間の話に花が咲いている。この場にはいないらしいけど、かなりのいじられキャラなのか、愛されているのか、次々と面白エピソードが出ている。

仲間うちで何度も語られているような雰囲気、一つ話が出るたびに「それぞれ！」とか「聞いた俺も」「タケ、キターー」「合の手が入り、どっと盛り上がる。

「アイツも会員になりゃよかったのになー」

「ホント」

笑いの発作が途切れた時、誰かがぼつりと言った。「ほんと、アホだよーアイツ」
なつかしむような口調だった。

違う、アホなのはアンタたちだよ。ワタシは心の中で突っ込んだ。

こんな所に仲間引き連れて、いや、引き連れられてなのかな？
とにかく、こんな場所に足を踏み入れてしまった。

彼らは不安なのだ、きつと。笑いながらもどこか落ち着きのない目をみれば分かる。

どうしてこの人たち、こんな所に来てしまったんだろう、とぼんやりしたままその会話を耳に入れていた。全然関係ないところに来てしまったのかな、蕎麦でもすすれると思ったのだろうか。だったら早く帰った方がいいのに。

アンタたちの仲間の中で、多分そのタケミヤという男が一番賢明だったんだ。

急に聞きなれた小声が反対から聞こえた。

「私は先に行くところがある、レイジ、ミホくと明日香くんを頼む」

「いれればいいのか？ 中に」

「中に、カプセルがあると思うんだ」

アオイさんが前を見ながらワタシに言った。

「どんな状況か…… オヤジの予想だけど」博士、という言葉を取り巻いてに捨われないように注意したのかアオイさんが続けた。

「かなり沢山、カプセルは用意されていると思う……中身も」

「効率を考えれば、中枢の周りに配置するだろう、円形に」

博士は辺りの様子を窺いながら、独り言のようにみんなに語っていた。

「君たちはたぶん、詩音くんを探すんだろっが……あまり深入りしないように」

「深入り、ってどっからどこまでを指すのか不明だけどさ」

徐々にレイジがまともなことを言う。

「オレに関して言わせりゃ、身内一人助けられなくて深入りも何もねえよ」

何だか鼻の奥がつんとした。

その一方で、中の様子がだんだんと気になり始めた。

アオイさんの話を聞く限りでは、あまり気分のいいものではないかも……

そこに、館内アナウンスが朗々と響き渡った。

「コア抽出の準備が整いました、会員みなさま、どうぞ中にお進み下さい」

透き通った女声アナウンスが響き、劇場に通じるような厚い扉が次々に両開きになった。

06 闇間(やみま)の詩音

気づいた時、私はどこかふわふわした空間の中に漂っていた。

というより、佇んでいた？

身体の後ろ側、頭から足先まで、軽く圧迫感はあるものの、足裏にも軽く床を感じる、斜めに何かによりかかるように立っているのだろうか？

重力はあまり感じない、なぜかとても体が軽い。

何回目かのご飯が運ばれて来たところまではハッキリと記憶がある。ほうれんそうのおひたしが美味しかった。うっすらとダシが利いていて、添えられた玉子焼きもまだほんのりと暖かく、口の中でほろりと甘くほどけた。急に家の事を思い出して、もう玉子焼きを自分に焼いてくれる人はいないのだと思いつき、急に箸を落とす、しかしその時にはすでに薬が効いてきていたのだろう、気づいたらこんな状態だった。

急に風が巻き起こり、誰かの声が近くで響いた。

「トップセルの候補が確保されたそうだ、こいつは別のセルに移すぞ」

「まず麻酔を」

「分かった」

「空きはどこだ？」

腕に針を感じ、しびれるような熱さが血管を侵食していく、いっしゅん動悸が速くなった。

すぐに目の前が暗くなる、同時にカプセルの前が大きく開いて誰かが二人ほど、前に立った。

「ケーブルを取って、すぐ運ぶ、会員たちの入場時間だ」

素肌にゴム手袋のひやりとした感触、少しずつまた意識は闇に沈む。

東の間おもう。

こんな場所ではどこにいようとあまり変わりはない。単なる浮遊霊のように、ただ置かれた場所に漂っているだけなのだ……いつまで？ それすら興味はなかった。

何か思い出したほうがいい？

ううん、別にいい。

むしろ、平穏な気持ちだった。多分私は、微笑んでいただろう。

大きな、メタルがかった艶をもつ白い円筒状の柱、直径は数十メートルもあるのだろうか、入って行った時には、単なる膨らみをもつ内壁なのかと思ったくらい、それは巨大だった。

高さも判然としない。

この建物自体、まん中は天井が見えない程で、小さい頃に横浜みなどみらいで見た、まん中が吹き抜けになった大きなビルを思い出していた。

天井はもちろん、フロアのまん中にそびえる円筒も、上に行くに従って暗くかすんだ空間の中にシルエットとなって溶け込んでいる。

円筒より何よりぎよっとしたのは、その周りを取り囲むように配置されたカプセル群だった。

円筒を取り囲むようにそこから10メートルほどの距離を保ちながら、それぞれは二メートル程度の間隔ですらりと並べられている。円筒自体の高さは3メートルまではないだろう。

巨大な白いめしべを囲む肌色のおしべたちのように……そう、並んだカプセルの中には、全裸の人間たちがそれぞれ、一人ずつ詰められていた。

カプセルじゃない、これは棺桶だ。

一つの棺桶に一体、温度か湿度か、内部の気体のせいなのか前面の強化ガラスはやや曇っていてはつきりとは見通せない。

たまたますぐ近くのカプセルを見て、息が止まりそうになった。

中身は少年だった。

同じ年くらい？ もっと若い？

手足の自由がきかないのか大きな動きはないものの、首をかすかに動かし、何か言いたそうにしている。

刈り込まれた短髪と広い額の下で理知的な目が大きく見開かれているのが見えた。

瞳はワタシに問いかける、何故？ と。耐えきれずにワタシは目をそらした。

でも、その隣も、またその隣も同じような裸体、ある者はいやいやをするように頭を振り、ある者は腕を上げようと甲斐のない試みを繰り返している。うめき声をあげているらしい者もいたが、音は漏れてこない、どちらにせよ、口もマヒしているかはつきりと言葉らしきものを形つくるのも見られなかった。

カプセルの基部は台座のようになっていて、そこから無数のケールブルが一旦内側の床に入り込んでいる、そしてそれらはすべてまん中の円筒に向かって延びているらしく、また円筒近くの床から飛び出して今度は円筒の根元に繋がっていた。

沢山の触手を伸ばした白い巨大生物が、天に向かって飛び立とうとしている感じ。

無数の脚を上げたダイオウイカ？ つい呼吸が早くなる。

怖い、でも目が離せない。

触手の数はどれだけになるのだろう？ 円筒をカプセルがぐるりと囲む様子を見ると、ずっと裏側にまで続いているに違いない、百？ 二百？ もっとだろうか？ 触手の先に全てエサを捕えているようだ、それとも彼ら全てがひとつの生物と言っているのか……ど

ちらにせよ、それはどんな生物よりも醜く、同時に美しい。
ワタシは隣に来たレイジにぴたりと寄り添った。

「ひでえ……何だこりゃ」

つぶやくレイジの指先に自分の指を絡めた、彼の指もひやりとしていたが、自分も似たりよつたりのようだ、それでも、彼がぎゅつと握り返してくれたおかげで少しだけ落ちつくことができた。

レイジも目の前に拡がる光景にあぜんとしていたようだ、すぐ我に返ったようだ。カプセルをあごで指して早口で言った。

「オレ、姉き探してみる、もしかしたらどっかこの中にいるかもだし、オマエ、ミポっちと一緒に逆回りで探してくんね？」

「もちろん」ミホさんの声は小さいけどはつきりしていた。

「シオンは絶対連れて帰る」

誰にともなくそう言った、自分に言い聞かせたのかもしれない。
「私も」

ワタシも言いながら軽く耳を触る。擬似イヤーエイクはかっちりと耳に止まっている。なぜか詩音さんの横顔が浮かんだ。

そう言っている間にも、開いた扉からは続々と一般会員が中に入ってくる。

誰もが中の異様な光景に一瞬息を呑むが、信じられないことに、すぐに当然といったように歩を進める。

廣川博士が説明していた通り、この敷地に入ってからイヤーエイクの影響だろうが、彼ら各々に『精神安定派』が送信されていたようだ。

こんな非人間的な光景なのに、誰一人顔をゆがめたり非難の声を洩らしている者がいない、それよりも、どこかずいぶん待たされたアトラクション施設にようやく入ってきたかのような高揚感で浮かれているように見えた。カプセルの前にわざわざ寄って、中を一つずつ観賞している者も多かった。

それでも不思議な事に、カプセルと中央の円筒の間には一人も入ろうとしない、ケーブルがいくつもむき出しになっていることもあるだろうが、イヤーエイクへ送られる信号によって無意識のうちにそこを避けるようになっていたのだろうか。

ワタシはまた戸口のほうを振りかえる。

ひそやかな興奮と期待感が開かれた扉から次々と流れ込んでくる、内部の不気味さは全く無関係な感情の波……操られていないこちらには吐き気がするほどの違和感だった。レイジも、ミホさんも同じように、嫌悪感を必死で押し隠している様子だった。

「よし、動くぞ」

レイジの声だけが耳にはっきりと通る。

「アオイさんはどこ？ それに博士も」

「あの二人はだいじょうぶ、ここは詳しいし、オトナだし。俺らもやれることやろうぜ」

レイジはすでに姉を探しているように遠くまで見やっている。それからふり向くように

「あそこ見て」

入って来たドアの近くを指した。その少し向こうに、暗くてよく分からなかったが一段高く、ステージのようなものができていた。一応あそこが中央のようだ。

「アンタたちはそっちへ、俺は反対に時計まわりに探す、シオンに限らず、知った顔もし見かけたら何番目が覚えといて、円形だからどっかで会えるだろ？ そんな時に報告、見つかなかったらまたここに戻る」

「了解」

手を振ってカプセルを検めながら、入口側に戻るように小走りに行き去って行った。

ミホさんが、服のすそを軽く引いた。

「明日香ちゃん、早く行こう」

「あ、うん」

群衆がゆるやかに奥に進むのよりもかなり性急な動きで、ワタシたちは前に進んだ。

三メートルおきくらいに並ぶカプセルの、できるだけすぐ前面を通りながら一つひとつの顔ををさりげなく目に入れる。

やはりセル会員はカプセルの後ろを通らない、ケーブルが飛びだしたようになって足場が良くないせいもあるだろうが、組織の作画的なものをひしひしと感じた。同じように動かないとどこかで監視されていたらまっ先に怪しまれるだろう、早足で歩きながら二階部分の通路をみた、特に人影はなかったが、どこかで見られているような漠然とした不安。でも、ぶるっと頭を振って、またカプセルに意識を集中して歩く。

ミホさんは小走りになっていた、ひっぱられるように後に続く。

どの顔も、意識はある程度ハッキリしているらしく、ワタシたちと目が合うと、何か伝えようと口を動かす、手を必死に動かそうとしているのも見えた、土台のせいで目線がどれも見おろしてくるようだ、しかしどれも動きは緩慢だった。照明の当たり方もあって、どこことなく『ミステリー館』のアンドロイド人形じみている。

でも、この人たちはみんな、生きているんだ。

アオイさんの告白を思い出す、そう、みんな生きているのに。

目が合うたびにやるせない気持ちが高じる。顔を伏せたい。でも、ぐつと歯を食いしばり、ワタシたちは更に奥に進んでいった。

どのくらい奥に進んだのだろう。

ワタシはもう走れない。急に、走れなくなってしまったのだ。足はもう一歩も踏み出せない。

「どうしたの」

ミホさんの足も止まる。

カプセル内の人間以外、どこまでも二人きりになった。

「大丈夫？ 明日香ちゃん」

「この人たち……」

声がつつろに通路にこだました。

全部でどのくらい、いるんだろう？

怖い、これ以上奥に進めない。

「お集まりの皆さま」

急に爽やかな男性の声が天井から響く。

「出入口近く、中央バルコニー前にお集まりください」

壁に作りつけのスピーカーでもあるのか、声は妙に近く感じる。

「只今より、コア抽出を行います、至急、中央バルコニー前にお集まりください」

ほとんどの会員は既に集まっているのだろう、周りでは物音ひとつ聞こえない。

前方からはレイジの姿どころか相変わらず何も聞こえてこない。照明のやや暗い左手側の円柱に向かって、床はわずかに傾いで低くなっている。それもあってか、だんだんと円柱に引き寄せられているような錯覚。

「明日香ちゃん、アナタ、戻って」

突然、ミホさんがとん、とワタシを軽く突き放した。

「ごく普通の話をしているような、軽い言い方だ。」

「私はとにかく一周してくる、あなたは戻ってレイジと私を待っていて。とにかく詩音を早く探したいの、私」

急に声を強くした。

「で、何かあったら必ず逃げるのよ、一人で、いい？」

「う……」

「ここまで来てそれはないだろう、そう言おうと思ったが」

「約束！」

ミホさんのきつい口調がワタシの返事をを刺す。

「無駄に死んだりしちゃダメ、とにかく自分を助けること、考えて、それに」

「誰かが生きてこのことを、必ず外に伝えてくれなくちゃ」

「でも、ミホさん」

「私はね」

ミホさんは頭を振る、ツイントールがくるんと回った。

「詩音を寄付しちゃった、たいへんなことをしてしまったからこそ、心に刻んだの。」

守らなければならぬ時は、必ず、それを守ろう、って」

「お集まりください」の声が淡々とリピートされる。ミホさんは声の方をぎろりと一睨みすると、また、こちらに目を戻して「じゃあね」と一言、走り出そうとした。

「待つてよー！」

思わずついて行こうとしたのを、ミホさんは一瞬優しくこちらに笑みを向けてから

「戻って！」

どん、と両腕に力をこめて思い切りワタシを突き飛ばした。

あつ、と尻もちをつく、その姿をみないまま、ミホさんは前に向かって走り出した。

「ミホさんっ！」

答えはすでにない。

柔らかい材質の床に当たるスニーカーの音はあつという間に壁に吸い込まれていった。

ひとりきりになったら、急に肩からイヤな力が抜けた。

ミホさんの声が頭の中をぐるぐる回っている。

言葉はひとつひとつ私に突き刺さってきたけど、伝える時の目は限りなく、やさしかった。

「……伝えなきゃ、ならないんだよね……」

のどの奥がじん、と熱い。

その塊を飲みこんでから、ワタシは踵を返してまっすぐもと来た道を走る。

引き返すのはあつという間だった。

走って今来た通路をたどり、入口に近づいてきてようやく他の会員たちの姿も見え始めた。

足がもつれたように加速がついていたワタシは、ようやくスピードを落とす。

ようやく、中央とおぼしきステージ近くまでやってきた。

ぞろぞろとステージ前に集まる彼らの背中に追いついて、ワタシは知った顔がどこかに見えないか、あちこちを見回しながら群衆の中に混ざっていった。

誰もかれも知らない人ばかりだ。

嫌な予感はずます膨れ上がっていく。

レイジたちが進んだであろう、ステージより更に先、カプセルの並ぶ通路に目をやってみたが、もちろん彼らの姿も見い出すことはできなかった。

無事なんだろうか、レイジ。

少し伸びあがって彼方を見やった時、アナウンスが響いてわたしはびくりと身を震わせた。

「お集まりの皆さま、ステージをご注目ください」

アナウンスが入り、人びとは吸い寄せられるようにフロアより一段高いステージを仰ぎ見た。

ワタシもできるだけ動きが不自然にならないように、そちらに目を上げる。

舞台のちょうど正面は、ファッションショーで使われるようなキヤットウォークが舞台と同じ高さで、中央の円筒に向かって延びている。

細い通路の一番先には、円筒の周りに均等に配置されている他のカプセルより目立つように、大きさも創りも特製らしいカプセルがひとつ、ぽつんと設置されていた。

当然のように、中には人間がいる。

何となく、見たような人……思わず手で口を押さえた。

中に収まっていたのは、そあらさんだった。

白い肩に長く黒い髪がはらりとかかっている。豪華なケースに収まったビスク・ドールとも見間違えそうだ。

見上げる位置からなのでハッキリ顔は見えなかったが、目は閉じているようだ。土台の所には、最終ナンバーなのだろうか『301』と刻まれていた。

動揺を押し隠しながらワタシはステージに立つ人びとを見上げる。

まん中には白くて長いチュニックとでもいうのか、舞台用衣装と見間違えそうな時代がかった服の男が立ち、その周りにはいかにも取り巻きです、といった白衣やスーツ姿の男女が六名程、フロアを見おろすように立っていた。

更に後ろには四人ほど、これもいかにも警備らしき制服のがっちりした体型の男たちが油断のならない目をあちこちに向けている。

テレビのニュースか何かで、こんな画面を見たことがあるな、そう、某国の指導者たちが群衆の前に立つ姿に寸分変わらないかも。

目指しているものが結局、誰の幸せなのか、すごく分りやすいかもしれない、そう感じながらさりげなく周りを見回す。

集まった人々は入場間際よりもさらに、熱にうかされたようなオーラを発していた。気のせいか、室温まで徐々に上がってきたようだ。

「お集まりのセルのみなさま」

しん、と会場が鎮まり返る。その時、目の端の、一人の視線が動いた。周りの人たちにはない強い光を放っている。レイジかと思っ
て見るが、全然見覚えのない若い男だった。その男の目線の向うには中年の女、その人も何か目で合図をしたのだろうか、女は舞台から目を離さずわずかに壁側に寄った。

いつの間にか四ヶ所あつた出入口ドアはぴたりと閉められ、ドアの間にはやはりガタイのよい警備が二人ずつ立って群衆に目を向けていた。

女はそのうちの一人に目立たないように近づいている。

それとなく見守るうちに、数人がその女と同じような動きをしているのに気づいた。

今ではフロアはやや暗くなっているせいか、その動きはまだ警備の連中には気づかれていないようだった。

「本日のコア抽出にお集まり頂き、誠に感謝にたえません」

白い服の男が、よく通る声で告げた。少しも嫌な感じを与えるものはないはずなのに、ワタシの腕にいつきに鳥肌がたった。

「あなた方は私のセル、私はあなた方のセル、イヤーエイクは私たちをつなぐ絆です」

感心したような声がそこから吐息のように漏れる。

「一人のしあわせが抽出されて、我々のコアに集められる、それは次第にひとつの大きな力、大きな生命体となって、私たち全てのしあわせを実現させるのです……あたかも、神が泥をこねて人を創った時のように」

神と出たわね、悪寒はますます酷くなる。

確かにアンタの服装、カミサマっぽいし。

「本日のコア抽出には、280名以上もの若い方々が賛同してくださいました。崇高な儀式となるでしょう、皆様の心に一生刻まれる、素晴らしい記念碑的な出来事となることでしょう」

手を差し伸べる先には、巨大な円筒周辺にずらりと並ぶカプセルがあった。

その『神』に、すぐ後ろの白衣が何やら耳打ちする、前を見たまま『神』はほんの数秒聞いていたが、うんうんと大きくうなずき、彼を前に招く。

白衣に縁なしの眼鏡という男が何の挨拶なのか片腕を胸に当ててから、少し前に出た。

「アースエイカーさまのお言葉を補足させていただきます。

只今から行われるコア抽出において、彼らには個々の感性、感情などの思いを放出して頂き、それは一つも無駄にすることなく中心のコアに再統合させて頂きます。

点火を行うと間もなく、ナンバー001から順にアクションがかかります、それぞれのコア放出量にもよりますが、お一人数秒から数十秒のお時間で、彼らは全体の意志『アースライフ』の中に新しく強大な力をもって蘇るのです」

「それは崇高な、完璧なる行いです」まん中の『アースエイカー』と呼ばれた男が続けて言った。

「彼らの意志を無駄にしてはなりません、偉大なるアースライフを創造するのです」

おお、とどよめきにも似た賛同の声があちこちで上がる。

たたみかけるように縁なし眼鏡の男が続けた。

「カプセルには、まだ15ばかりの空きがあります、どなたか志願されてご自分のコアをアースライフに捧げるといふ方はいらっしゃいませんか？」

高揚した雰囲気、最初はモジモジしていた群衆の中から

「俺が行きます」「私も捧げます」「わたしも」何人かが手を上げ、それから「俺も」「はい」と次々と手が上がった。

アースエイカーは鷹揚に笑みを浮かべ、軽く右手を振る、するとドアの前に立っていた警備が半分ほど動き、片手を軽く上げる。

眼鏡男がやや早口で声をかけた。

「今、志願してくださいくださった方々、前で手を上げているスタッフについてお進みください」

時間が迫っております、移動を早く、との声がとび、崇高な行為だと言っている割には妙に事務的な動きがフロアに発生している。

ワタシはその隙にあたりをもう少し見回してみた、レイジはどこに行ったのか、ミホさんもまだ見当たらない、詩音さん見つかったのだろうか？

その時、どこかで聞いた声が空間を切り裂いた。

「カラスを撃て！」

号令とともに急に風が巻き起こる。先ほどの中年女性がすぐ脇についた警備に飛びついた。訓練していたのだろう、あつという間に自分より背の高い男の手をひねり上げ、どおつと床にたたきつける。他にも数人、そちらに気をとられた警備に飛びついて銃を奪った。群衆の中からも小柄な少年がふたり、両側から警備の一人に飛びかかった。

「何だ！」

「動くな！」

舞台の上では、スタッフに混じっていた白衣の男がアースエイカーを、背広の1人が幹部らしい女性を後ろから押さえ、銃を突きつけている。

中央の男を押さえている白衣の男は廣川博士、女性を押さえている背広姿はアオイさんだった。どちらも相手の首筋に銃を押しつけ、博士はフロア全体を、アオイさんは後ろの警備の連中に目を向けている。

「ガードの諸君、手をあげろ」

アオイさんは後ろの警備に強く言った。「手はゆっくり頭の上に、銃は床に落とせ」

続けて博士が告げる。

「アースエイカーとナンバー2は人質にとった、ドア付近のガードも銃を落とすんだ」

警備はここまでの事態は想定していなかったのか、明らかに急に素人の目になった。手が中途半端な位置で泳いでいる、そこに博士が

「早よ上げいや！」

急にナニワのおっさんみたいな罵声を浴びせた。

銃を突きつけられた男がびくりと身を震わせる。『神』にはほど遠い反応に、博士は後ろから覗きこむように「怖いのか」と訊ねる。アースエイカーと呼ばれている男の人は答えなかった。

「何をやってる！ おい、オマエ！ 離れるんだ」

「それはこっちのセリフだ、離せ！」

どこかで声がした。

離せと叫んだ声に聞き覚えがある。というか……

レイジ？ なんでもそんなに大声出してるの？

ばん、と目の前のガラスに白い手のひらが見えた。でも一瞬のこと。手はすぐに何かに引きはがされ、視界から消える。

ガラス？

私は何？ どうしたの？ 立っている、でも、どこに？

あまりにも狭い空間に、少し斜め上向きに立っているようだった。

「バカ、離せよこんちくしょう！」

「カプセルから離れる！」

「嫌だ！！」

二、三人で揉み合っているらしい。外の声はようやく耳に届く程度、しかも、どんどんと遠ざかっている。ほとんど言葉も判らないくらいになってきた。でも最後に

「シオン！」

切なげな呼び声が薄闇を切り裂く。それは私の心に直接突き刺さった。

自分の名前を耳にしたら、急に目が覚めた。心拍が速くなっている。

胸に手をやって、へんなケーブルみたいな線に手がひっかかって、私はぎよっとして見おろした。

何も着ていなかった。素肌にいくつも付けられたコード、肌色のテープで貼り付けてあったり、包帯でしっかりと留められていたり。腕には点滴のチューブが刺さっていた。

痛い！

全ての感覚が戻りつつあった。刺さっていると判ってから急に点滴の針が疼くように痛む。

もっといやなのは全身に感じるこの、甘ったるいような、生温かくて肌にまとわりつくような気体、不快な湿気、頬に貼りついた髪の毛のチクチクする感じ。

何もかも嫌だ。

早く出なくちゃ！

でも、どうやればいい？

その場であちこちを見回してみた。でも、この中の空気は淀んだように周りの薄暗い景色をかすませていた。

出なくちゃ！

「シオンー！」

突然の叫びに私はぎよつとして飛び上がりそうになる。

また、ガラスにはしんと手が当たった。今度はさつきよりもつと下の方、小さな手、でも、声にはちゃんと聞き覚えがあった。

「ミ……ミホ？」

未歩の平手が力強くカプセルを叩いていた。そして、彼女はぴたりと片方の頬をカプセルにくっつけた。

無理やりのぞいているその表情があまりにも真剣で、普通なら、ものすごく笑えそうなくらい可笑しかった。彼女はその顔のまま叫ぶ。

「だいじょうぶ？ 苦しい？ すぐ出してあげるからね！」

笑えるその顔が、今の私には一番必要なんだ。私は肺に甘ったるい空気をできるだけ吸い込んで、思いきり叫ぶ。

「助けて、ミホ！ ここから出してー！」

身体のあちこちに貼りついてたテープや吸盤状の端子を片っ端からはがしていく。

点滴の針がまたずきんと痛んだ。そうだ、これも外さなくては。そう思っているうちに、世界が揺れ出した。

「ふんっ！ ふんっ！」外でがんばっているミホ、私も殻を破ろうと、できるだけ腕を振り回して、前のガラス面にぶつかりに行く。でも、大きく右に揺れた時、あっと思っつてつい反対に構えてしまった。

だめだ、それではいつまでたつても出られない。

「ミホー！」

声を限りに外に向かって叫んだ。「今度傾いた時、すぐに遠くに逃げてね！」

「だいじょーぶ、そんなにドンくさくないから
明るい声について、嬉しくなつて笑つてしまふ。」

ああ、久しぶりに笑う気がする、頬の筋肉がつっぱる。いつから笑つていなかったんだろう？

次に傾いた時に、大きくそちらに身を倒す。足もとから冷たい風が吹きあげた、外の風、「もう一度！」ミホの声が突然飛び込んできた。「揺らすよ、いっせーの！」

跳べ！ テニスコーチの声が耳の奥で叫ぶ、ミホ、シオン、そう
だ跳べ！

「ごとんと大きな音と衝撃、ケースは割れることなく、そのまま床に倒れ、ばちりと一度だけ大きな火花が出た。爆発が起こるかと思いい、慌ててカプセルから這い出す、だが、騒ぎはそれ以上大きくなることはなかった。」

背後でかちりと何かが切り替わる音、見ると、円筒のすぐ前にナンバーのついたランプが緑色から赤に変わり、下に「OFF」の赤い文字が現れた。

「だいじょうぶ、なのかな……」

不安げに見守っていると、ミホが答える。

「それよか、自分の心配しなくちゃ」

「ワタシ……」

「痛い所、ない？ 何このチューブ」気遣わしげな声、それでまた急に思い出した。

「針が」

ミホは、気遣わしげに私の腕に手をやって

「かわいそうに。ひどい奴らだねホント。痛かったでしょ？」

それでも手際よく、点滴の針を抜きにかかっている。

「ちよつと、あつち向いてなね、すぐ取るから」

ヒロカワクリニックで、何度か会っていた時にはあまり口もきいてこなかった。せつかくお互い同じサイドに立てたのに、どうして？ ずっとそう感じていたのに……

ようやく、ミホが戻ってきた。私のそばに。

急に涙がじわっと湧いてきた。

「はいっ、取れたよ。……どしたの？ 痛かった？ ごめん」

「うづん……そんなんじゃないって」

「ごめん、と言えはいいのか、ありがとう、と言えはいいのかすべ

てのことばがぐつと胸に迫り、私はつい足もとに目を落とす。それで当たり前前にことに気づいて、つい叫んでしまった。

「ワタシ、スッポンポンじゃん？」

ミホが笑いだす。

「なに〜その急にオッサン表現」

「じゃあ……『マップ』？」

「もっとオッサンじゃん！ それにそのくらい、何よ！」
そうして

「もう離さない」

ミホは両腕でふわりと私の身体を包む。私も彼女の身体に腕を回した。

「私も」

ふたりで、固くかたく抱き合った。

舞台下の警備連中も焦ったように手を頭の上に組んだ。

反乱などまるで予想していなかったのだろうか、名ばかりの警備という感じ。

そこを近くの『フィンセント』たちが急いで銃を拾い集める。こちらも特に訓練をしたという様子はない、成り行き上というかどこか素人臭さが残っている感じだった。拾い集めるのにも人数が足りず、一番離れたところのメンバーはあわててもう一丁拾いに行っていた。

ワタシだってどう動いていいか分らず、じっとその様子を窺っていた。

周りのイヤーエイカーたちの反応が妙に薄い、そればかりが気になった。

次の行動に移るかというそのせつな、また聞きなれた叫びが、今度はカプセルの並ぶ奥手から響く。

「何すんだよ、離せバカ」

レイジだった。両脇をガードにがっしりと捕まえられ、つりさげられるように中央まで戻されるところだった。

レイジを掴んでいた警備の二人は捕まえた者に気をとられ、まだ中央の状況に気づいていない、博士が叫んだ。

「そのガード、捕まえてるヤツを離せ！ 銃を捨てる」

「オヤジ！」

レイジはもちろん、両脇の警備員もはっ、となって顔を上げる。

「手を離せ！」

博士が更に叫ぶと彼らは一瞬立ち止まった。

ようやくステージ上の親方が人質になっているのに気づくと、そつとレイジを床に降ろす。だが、まだ手は離さない。

「明日香ちゃん、いるか」博士に呼ばれ、仕方なく前に出ていく。

「レイジ、銃をひとつ取れ、もう1つは明日香ちゃん」

そんなこと言われても、撃ち方はおろか構え方すら分らないし！
そう心の中で叫びつつも、浴びせられる視線にワタシもしかたなく動き出した。

その時、ステージの上、捕まっていた女が首をむりやりひねり、自分を押さえるアオイさんに目を向けた。

アオイさんは後ろの警備員を気にして女に注意していなかったが、急に

「あおくん……？」

そう、呼びかけられて凍りついたように視線が固まった。

「あおくん、だよね」

「アンタ……」

アオイさんはナンバー2の顔にゆっくり、ゆっくりと目をやった。

「ナンバー、2ってアンタ」

けんめいに目の前の女に意識の焦点を合わせようとしている。

「待てよ……何でアンタがここに」

「ちよっと目のあたりプチ整形したのよ、分かんなかった？ あおくん」

悲しげな口調だった。

「セル会員割引でね……会いたかった」

「母さん」

大きくよろけて彼女から離れた、その瞬間を後ろの警備員は見逃さなかった。だん、と床を蹴って前に跳び、アオイさんを押し倒す。

「よせ！」

ついアースエイカーから身を離して銃を構えなおした博士、急にのけぞってから身を縮め、その場に倒れた。

背後には護身用の銃を構えた小柄な影。

ふわっとした茶髪に、日本人離れた顔立ちの少女だった。

彼女がつぶやくように言った。

「オロカモノがいっぱい。みんな死ねばいい」

彼女は次に倒れたままのアオイさんに銃を向ける、アオイさんはぼうぜんとつぶやいた。

「…………コムカイくん？」

話に聞いていた、コムカイ・ルネという子のようだ。詩音さんたちを騙してセルに引き込んだ張本人と聞いている。

でも…………こんな可愛い子が？

「アンタもバカよ、ヒロカワ先輩」

笑顔がそのまま凍りついた表情のまま、ルネは倒れている博士を足先で軽くつついて、アオイさんに言った。

「フィンセント・クラブだっけ？ クラブって言ったって結局全員コイツにいいように操られて」

アオイさんが声を絞り出す。

「博士は僕を助けてくれた、セルのラボから。それからずっと」

「それからずっと、アンタを利用してたんじゃない」

アオイさんは言いかえそうと口を開いた。でも、何も言い返せないようだ。

「オヤジ、だいじょうぶか？」

レイジが下から叫ぶ。他のフィンセントメンバーも警備も、更に会員からもどよめいたような混乱が生まれ始めていた。

「ナンバー2から離れなさい、先輩」

ルネは笑顔の仮面を完全に脱ぎ捨てていた。

くるりとした瞳を細め、眉間に深い皺を刻んで彼をを見つめてい

る。

アオイさんはよろめいて銃を取り落とし、そのまま母親から一步離れた。

その様子を目に収めてから、アースエイカーはおもむろに正面に向き直った。

「諸君、私は大丈夫です」

「警備を撃つぞ」

レイジが叫ぶ、しかしフィンクラブの連中は自分が銃を奪った相手を威嚇するのが精一杯で、誰もアースエイカーを狙い直すことができない。

「彼らはいつでも、命を投げ出すことができる」

アースエイカーはあたりを見渡しながらゆったりとした口調でそう告げた。

それから、おもむろに小さな箱状のものを持ち上げた。

「点火」

誰も止める暇がなかった。

彼はごく軽い動作でまん中のスイッチを押す。ぶうん、と一瞬すべての照明が暗くなったもののすぐに持ち直した。

しかし足もとを震わす重くて低い唸りが人びとの足もとを脅かす。

誰も動けるものがない、レイジすら固まっていた。闇夜に、ヘッドライトの前に飛び出してしまった山猫のように。

また照明が暗くなった。今度は少し長い時間。

突然、ぼおつと白いあかりが背後に点り、ワタシは半身ふり返る。

ずらりと並んだ中の、ステージからほど近いカプセルが蛍光色を
発しつつある。基部にはナンバー「001」とあった。

人質をとったフィンセントの連中はこわばった顔で、イヤーエイ
カーたちは陶然とした表情のまま、無言でそちらを向いた。

カプセル001の中にいたのは少女、ワタシと多分あまり歳が変
わらないだろう。

発光し始めて間もなく、車の中でエアコンが効いてくるとすぐ窓
の曇りが晴れるように、カプセルの中身がワタシたちの目の前にあ
らわになった。

すぐに光は強くまぶしくカプセルを包み、重厚な唸りはますます
大きくなる。と、その瞬間、

少女がかつ、と目を見開いた。

口も半分開き、何かに急に気づいたかのように辺りを見回す、腕
がよつやく動かせたようで、両手を胸元まで引き上げた、裸の胸に
気づきそれを覆うように手を広げたところで、

抽出が開始された。

少女は何か叫んでいる。

口をめいっぱい「い」の形に歪め、頭を前後に激しく揺さぶっている。両手は胸ではなく自分の喉にかかっており、どうにもならない力で自らの首を締めつけていた。爪が食い込み、白い喉首に赤い血が滲んだ。脚を引きつけようと挙げかけ、前のカプセルにぶつかると、太ももについていたケーブルがたわみ、揺れ動いた。脚を何度か上げようとしながら、その少女は全身で目に見えない苦悶と闘っている。見開かれた眼から涙がこぼれているだけでない、汗もすごい、そして鼻からも口からも何か泡じみた液を噴き出し始める。ハードロックバンドのボーカルはたまにこんなふうに歌っている。許容範囲を振り切ったその光景に、唐突によく聞くコメントイターの声が脳内に響く。さすがアリシアソード、今回はまた一段と過激ですね……しぬの？ あの子。

叫びのほとんどはワタシたちにまで届かない。でも、飛び出しかかった目と全身から噴き出した体液とが耳に聞こえない断末魔の悲鳴を発し続けていた。

急にその躯が前のめりに崩れる。前面のガラスにごつ、と額の当たる音だけが響いた。背中からはまだケーブルがカプセル背面に伸びその様子は糸の切れたマリオネットそのものだった。身体は一回り縮んでしまったようにも見える。足もとにはみるみるうちに濁った水たまりが広がった、どことなく赤く染まってもいる。

カプセル全体の明かりが消え、上部のランプが2つ、点灯した。

「001、完了、グリーン」

無機質なアナウンスが聞こえる。男の声か女の声かも分からない。

点火からここまで、たぶん10秒か20秒程度だっただろう、しかし、その苦痛は永劫に心に刻まれた。ワタシは口を押さえる。吐きそうになっていた。

レイジはキャットウォークを挟んでワタシとは反対の方にいるので間近には見えていなかった。だが、近くにいたフィンセントチームの男は目をいっぱいに見開いて呆然と立ちすくんでいた、銃は完全に下がっていた。

すぐに次のカプセル002が同じように発光を始めた。その前に001の様子に気づいたらしい002の中身は、おろおろと辺りを見回している、まだ手足に力がないのか、ガラスを叩こうとする様子もおぼつかない。

次の処置が開始された。

それはさつきよりも少し早く見えたけれども、気を取られているフィンセントの男が警備の男に銃を奪い返されるには十分な時間だった。警備も最初のカプセルでの『抽出』ではかなり衝撃を受けたように口をあんぐり開けて見守っていたものの、つまらない職務を思い出してしまったようだ。カプセル002内の人が声にならない叫びを上げ始める前には、フィンセントに取られた銃を取り返し、彼を撃っていた。撃たれた男の人は声もあげず仰向けに倒れた。

処置が003に移る時、ワタシは自分が次に狙われているのに気づき、とっさに身を投げ出してキャットウオークの影に転がり込んだ。ばす、と音がしてすぐ近くの初老の紳士が腹を押さえて崩れ落ちた、イヤーエイクをつけていたせいらしく、痛みも何も感じていなかったようだ。とても素敵な色と柄のネクタイをしめていた。結構おしゃれなその人は、どこかうっとりした笑顔のまま横倒しになった。

次の一撃が来る！　ワタシはなりふり構わずキャットウオークをくぐって向うに逃げる。ちょうど、レイジが両脇のガードと揉めていた。果敢にも銃身で1人の頭を横に薙ぎ払い、もう一人に蹴りを喰らわせている。周囲のイヤーエイカーは争いが起きてもどちらの味方をするともなく、さりげなく距離を開けて目だけは抽出作業中のカプセルの方に向けていた。警備はすぐにあきらめて、すぐ近くで睨みあっていた仲間を助けようと駆けよっていった。遠目から見た時には、そこには中年の女が相手にこわごわ銃を向けていたのだが、走ってきた警備にぎよっとなってそちらに銃口を向け、逆に撃ち返されていた。

いったん始まった銃撃戦はあっという間にステージ下のあちこち

に拡がった。

異様なのは群衆がパニックを起こすことなく、穏やかな表情のゾンビよろしく、何となくその中に立っているってことだった。

5歳くらいの子どもを抱いた父親が急に万歳をして子どもを前に放りだした、頭の左側から血が扇状に飛び散り、それがバッククライトを通して透き通った赤に輝くのがみえた。

「頭下げろ！」

ワタシはいつの間にか伸びあがっていたのか、レイジにぐい、と頭を押さえつけられた。レイジは銃を二丁ちゃんと抱えていて、一丁をこっちに押しつける。

睨んでやると

「撃ち殺してねえ、ぶん殴っただけだ」

それでも銃を取り上げた相手は二人まとめて、ちゃんとぶん縛ってあった。

舞台の上では、睨みあいが続いていた。

アオイさんは既に銃を捨てて手を上げていた、警備が彼の腕を後ろ手に縛り上げ、もう一人の警備はうつ伏せに倒れた博士の身体に足を刺し込み、仰向けにひっくり返した。翻った時の博士の手先がちらりと見えただけだった。

アオイさんは始まった『抽出作業』に無関心なふうを装っている、それをみた
ルネが

「抽出が全て終わるのに、だいたいどのくらいかかるんでしょうか」と敢えて彼をみずに、アースエイカーの方を見て訊ねた。

「途中、抜けていたのが15カプセル程度だから……」

アースエイカーは光り輝くカプセルを花火でも見るような目で眺

めていた、すでに7つ目ほどのものに処置が移っており、円筒に隠れるように視界から遠ざかりつつあったのだが、彼にはそのすべてが見通せるかのように、1つの処置が済むたびに、と大きく満足のため息をついていた。

「はあ……今のは良かった、美しい搾り具合だった。そうだな、先ほどの臨時志願者が間に合っていれば三〇分近くかかるだろうが多分、だんだんと加速するはずだ、処理スピードが……アーティライフが命を受け取るにつれて。」

最後にたどり着くには二〇分くらいかな」

通路の先に据え付けられた特製カプセルをみやり、感に堪えないといった吐息を洩らす。

「最後のアレは、特に美しいだろう……」

その言葉がキーとなったように、今までポーカーフェイスを装っていたアオイさんがぐい、と身を捻り警備をつき離し、走り出した、前に向かって、そあさんのカプセルに向かって。

「撃て」

声と同時に銃声が響く。つんのめるように前に飛び出したアオイさんは更に数歩前に足を出す。

重なる銃声、下からフィンセントが応戦し、ステージ上の人間も身を伏せた。

「今だ！」レイジがぐいつとワタシの腕を引っ張った。「進め！」

カプセルの300番側から奥へとまた、戻るといふ。

「シオンを見つけた、でもまだ助けてないんだ」

レイジが走りながら言う。

ちょうど、先方、外壁の少し奥、控えめに開いた小さなドアから人影が通路に飛び出してきた。やはり白衣に身を包んでいる。銃を持ったワタシたちに明らかに怯えたような目を向けた。出てきたドアに戻ろうとしたせつな、レイジは肉食獣もかくやとばかり彼に飛びつき、銃を突きつける。

「抽出、は、は、はじまってしまった」

銃が怖いのか、抽出が思ったより早く始まってしまったのが恐ろしいのか、白衣の男は明らかに動転している。

「知ってるよ」レイジは妙に落ちつき払っている。でも、通路の暗い照明のしたで、目だけがギラついていた。

「オレらが止めてやる、教える、どこ壊せば全部止まる？」

「むむむ無理です、走り出したら」

見せられた銃に、相手は完全に怯えていた。レイジより幼くみえる。

「途中からでもいい、一つ終わると次のカプセルに処理が移ってるだろ？連鎖はどうやったなら止められる？」

「中央コントロール……」

遠くに視線をやったのでレイジはぐい、と男を捻る。

「ヒマがねえんだよ、銃でぶっ壊してやる、どこを撃てばいい」

「えと、ええと」

震える手があちこちさまよい、ようやく

「カプセル左下、白いコネクタが連結、次に処理を走らせるためのそれを」

「もついいや、そこで寝てる」

ひい、と白衣がハリネズミのように丸くなった、「う、撃たないで」

「弾がもつたいねえ」

そのことばと同時に、気を失ったらしく急にぐったりとその場に寝てしまった。

「行くぞ」

レイジ、そんな様子にはもうお構いなく先を促す。

間もなく、「レイ！」今となつては懐かしい声が耳に飛び込んできた。

「遅かったね！」

「ミポ！」

影に隠れるようにしていた姿にも気づいて、レイジは大声をあげる。

「シオン！」

「バカこないで」

ようやく会えたというのに詩音さんは怒って叫び返す。

「服がないの！」

「ぶあか！」レイジはマジメに怒っている。顔が真っ赤だ。

「オメエのハダカなんてガキの頃から百万回も見てるっちゅーの！
ありがたみも何にもねえよ！ イッチョマエに恥ずかしがるんじやねえっ」

「バカはあんたよ、ジョージ、とにかく見るな！」

「ミポっちと入口側に行け！！ 少し先に白衣が転がってる！」

見てねえから、早く通れ！ レイジは空いている片手で目を覆っ

て、彼女らを通した。

「アンタたちは何するの？」

「一人でも多く助ける！」

レイジがそう言うので、ワタシはしかたなくうなずいた。まだ銃の撃ち方もよく分らないのに。

「中央気をつける！ 撃ち合いになってる、ステージ上にもイイモンワイルモン混ざってるけど構わず逃げろ！ オヤジはもう撃たれてる、アオイは人質捕まえてるはず！ でも気にするな、下の撃ち合いだけ気いつける、外で集合だぞ！」

「レイ！？」

「はよ行け！」

「戻るから！」走りかけた所に詩音さんの声、レイジはふり向きもせずに叫ぶ。

「ちゃんと着てからこいよ！」

「当り前じゃん！」シオンさんとミホさんは走ってワタシたちが来たほうへと走り去っていった。

レイジが足を止めてワタシをみる。

「いいか、巻き込んだのは後でゆっくり謝る、俺は処理寸前のところギリギリまで行ってそこで止める、オマエは一個ずつこつから白いコネクタ壊してってどんどん奥に来てくれ、念のためにふた手に別れよう、いいな」

「判った」

レイジは奥へとダツシュした。彼の姿が消えるとすぐ、ワタシは大きく深呼吸して目の前のカプセルに向き直った。

中の人間は男、まだ目をつつすらと閉じている。

レイジに銃の使い方をちゃんと聞くべきだった。銃で狙いながらも手がブルブル震えてくる。重い上に、引き金が硬くて動かない。

「どうしょ……」

ためらっているヒマはない。銃を立てて真上に振りあげてから、
「といやっつ！」

掛け声とともに、銃の台尻で白いコネクタをぶったたく。

一撃で手ごたえがあった。セラミック部分だろうか、かなりもろく粉々になって線が千切れ飛ぶ。

すぐに後ろのランプが赤くなり、『277 OFF』と点灯した。

これは277、とりあえずこの後の300までのカプセルに入つた人は救われたと考えていいのだろうか？

どこからともなく、空気の漏れる淋しい音が続き、気のせいか目の前の男がぴくりと動いたようだった。助かったのだろうか。

考えていても仕方ない、ワタシは奥隣に並ぶカプセルに向かう。

276、275、銃の台尻は意外に役にたつ。しかし急に、中に実弾が装填されていることに気づいて「ひゃっ」とつい叫んだ。

怖い怖い、無造作に銃口の前に顔をやっているかも。

次からは、かかと落としを試した。

一度、二度では全く効果がない、それでも五回ほどでコネクタの元が緩み、八回もやっていると完全に軸から抜け落ちたり、外れたりしていった。

次、次と夢中になって脚を振りあげる。272、271……レイジはどこまでいったのだろうか？ だんだんとかかかとに疼痛を覚えてきた。何度目かに当たった瞬間、あまりの痛み

「があっつ」

おっさんみたいにわめいてしまい、後ろにのけぞった。

いたいよ……いた過ぎ！ とつい愚痴っていたところに

「おっ待たせ〜っ」

妙にテンションの高いミホさん、そしてせいぜいと息を切らした詩音さんがかけつけた。

今までずっと男の子だと思っていた詩音さんの姿をみて、つい

「うっぷ」

何か鼻にこみ上げてつい、手で押さえる。

マッパダカの上から膝上までの白衣を羽織り、まだもぞもぞとポタンをかけながらミホさんの後ろからのぞいている。

「あ、あすかちゃん、だよね？」

声も改めて聞くと、やっぱり女の子でしかない、なぜ最初から気づかなかったんだろう。

すんなりとした脚が白衣の下に伸びている、白衣は微妙に大き過ぎるのか胸元や腰などあわせが今にも開きそうで危うさがハンパない。

靴は倒れた男の白いスリッポンスニーカーを拝借したのだろう、でも脱げそうなのできゅっとひきしまった脛とアキレス腱に余計な力をかけているようだ。

男の子っぱい少し長めのシャギーがくしゃくしゃに乱れ、何となくシャワー浴びて来ましたよって感じにも見えないことがないが、それでも目にはキラキラと活気がみなぎっている。

「なにすればいい？ 私たち」

最初から早口でこう訊いてきた。ワタシも急いで答える。

「念のために1つずつ接続を切ってる！ 左下のコネクタ、白いの」

「レイは？」ミホさんが聞く。

「できるだけ前まで行って、止める、って奥に」

「分った」ミホさんは、詩音さんに向いて言った。

「アタシはレイを手伝いに行く、明日香ちゃんと一個ずつやっちゃって？」

「ラジャ」

詩音さんは奥に駆けて行くミホさんを見送ることなく、すぐにワタシに向き直った。

「銃貸してくれる？ こっから3の倍数はあなた、他のは私がやる」「わかった」

詩音さんは手元の小さなつまみを動かかしおもむろに前のコネクタを撃った。乾いた銃声とともに部品がはじけ飛ぶ。

今さらながらぞつとする。あんなカンタンに弾が出るんだ。それにしても、彼女、次へ動く時にためらいがない。

「シオンさん、銃撃てるの……」

「何ヶ月も、こんなことばかり教わってたからヒロカワのオヤジさんたちに」

詩音さんが「廣川のオヤジ」というのも何となく印象に合わないでも、流れるような動作で次のアクションに移っているのが今の状況ではとても心強い。

「行くよ！」

「うん！」

ワタシは勢いよくうなずいて、次のカプセルの前に立つ、かかとを思い切り振りあげ、蹴り落とす。

「とりゃあっ、はあっ！」

要領もよくなってきたのか、今度は二回で破壊できた。

「おみごと」

次のコネクタを撃ち砕いたばかりの詩音さんが、こちらをみて大真面目にサム・アップ。

「よっしゃー！」

ワタシははりきって、次のカプセルに走った。

13 未歩が追いついたとき

ミホは走りに走った。

少しして白衣の数人が壁際にへばりついているのに行きあつた。彼らはじつとカプセルにうつろな視線を注いでいたが、中の人間を助けようとか逆に出ないように見張っているとか、そんな積極的なことは何も思いついていないようだった。

その連中はすでに当初の営みを放棄した単なる抜けがらのように見えた。

それを横目でにらみながらもミホは更に奥へ。

1999までは中に人間が入っていたのだが、1998のカプセルは空だった。

元々何も入っていなかったらしい、その奥、若い番号を見て行くはずと空のカプセルが続いている。

間もなくレイジのどなり声に追いついた。「バーロー！ そここ
け！」

まだ外に誰かいたらしい、ミホはとっさに立ち止まる。

案の定、銃声が二回、それから更に「どけ！ 壁に寄ってる」レイジがどなっているのを聞いた。

ミホが見ると、倒れ伏した警備員の後ろに更に一〇人ほど、一般人のようだ、おびえて壁にひっついていてる。

レイジは「動くなよ！」と彼らをどなりつけ、カプセルの方を向こうとした。が、途中でミホに気がついて叫んだ。

「もう見えてる！ ここで止める！」

見た限りでは、その近辺のカプセルも空のようだった。

確かにミホにも、更に奥の方にぼんやり光っているのが見えた。レイジは目の前の『186』とあるカプセルのコネクタを撃とうと銃を構えた。

目の端、『184』を侵していた蛍光色の淡い青が急にまっ白に変わってカプセルの上部を覆った、と、見る間にその光は次の『185』に飛び、あっという間にこちらに向かって近づいてきた。

「やばい！」

レイジが悲鳴にも似た叫びをあげた。

「空のヤツ、処置が飛んでる、次行っちまう！ ミポ、戻れ！」

『187』も、そこから先の七つか八つのカプセルも空だった、白い光は花火の導火線を思わせる軽やかさをみせて次々と空のカプセルの上を飛んでいった、一瞬だけ、空っぽのガラスの空間が闇の中に浮かび上がる。その速さについていけなかった。

「200くらいまで行く！」

レイジがミホを抜かしながらがなりたてる。同時に少し先、くらいだろうか、ぼおっと白い明かりで通路がみたされた。

「やられたー！」

レイジとミホとが駆けつけた時、ちょうど『199』の抽出が終わっていた、すでに次のカプセルに光が飛んでいる。

人間の入ったカプセルでさえも、かなり処理速度が上がっているようだ。

きりのいいナンバー、『200』に入っていたのは二十歳かそこらの女性だろうか、すっかり麻痺は覚めたのか、はつきりした怯えを目の中にたたえ、すがるようにレイジとミホとを見つめていた。

「チクシヨ―！」レイジが撃つ、『200』はすでに間に合っていないなかったかもしれない、しかしその間、処置は少し遅くなったようだった、ひび割れでもできたのか、カプセルの中から断末魔の悲鳴が漏れていた。未歩は吐きそうに顔をゆがめながらも、次の『201』に走り、コネクタの根元を思い切り、かかどで踏み抜いた。

髪を振り乱し、何度もかかどを振りおろす。

弾切れた。

私は仕方なく、銃を上に向けて握り、台尻の底をコネクタに叩きつける。

明日香ちゃんは「とやっ」「だおっ」「ぐわお」何でもいいのでとにかく掛け声を発しながら、飛び飛びに作業を繰り返していた。

はっと気づいた時、すぐ目の先にミホが、そしてその向こうにレイジがいた。

ツインテールはすっかりとほどけ、ざんばらになった髪が汗で額や頬に張り付きながらまとわりついている。ミホはそれでも夢中でコネクタを踏み割っていた。

「ミホ！」

私は声の限りに叫ぶ。

「終わった、私たちのできることは終わったよ！」
何度も叫んで、ミホにすがりついた。

「ミホ、もう壊れてる、それ、壊れてるから！」

「えいつ！ えっ？」

急に我に返ったミホ、脚を振りあげたままぴたりと動作を止めてキョロキョロする。

「明日香ちゃんは？」

一足遅れて、「はあ〜っつ」明日香ちゃんが片足跳びでやってきた。

「ホネ折れたかも！ スキズキする〜」

「レイジ！」

レイジはだいじょうぶだろうか？ 私は急いで駆け寄る。

「見て、止まった、止まったから！」

「……助けられなかった」

レイジはうなだれて立ち尽くしていた、珍しく声が湿っている。

「チクシヨ……こっから前は、全部、し、死ん」

「アンタのせいじゃない」きっぱりと言い切ってやった。

「助かった数を数えよう、今は」

「そうだ！」明日香ちゃんがあげた大声に、居合わせたみんなで飛び上がる。

「ごめん声デカくて」

謝りながらも彼女はすぐに真顔になる。

「中央ステージのカプセル、あの人はまだ残ってるよ！」

「あの人？」ミホも眉を寄せる。「誰？」

「あの人、三年の人」

そうだ、私の替わりが見つかったって。それ、もしかして。

「そあら先輩！」

サンダルを蹴散らかして猛ダッシュ。白衣がめくれあがりそうだがど構ってられない。

ミホとレイジが「待って！」と叫んでいたけど、はだしのまま私は走っていた。

元のステージが見えるところまで戻った時に、アオイ兄さんの姿が見えた。

特設カプセルに抱きつこうとしたのか、頬をすりよせるようにカプセルの前面につけて座り込み、仰向いた顔はむなしくどこか虚空をみつめていた。

腕の先も足もはずたずたに撃ち抜かれ、その返り血がカプセルの前面に派手に飛び散っている。

なぶり殺しにされたのだろうか、飛び出そうとした私を、ミホが抑えた。

「待ってシオン、どちらにしてももう遅すぎる」

ミホを振りかえると、ミホは微笑みながらも涙を流していた。

「見て、彼、幸せそうな顔してるよ」

こと切れたアオイ兄さんの顔はどこか優しく微笑んでいるようにみえた。

アースエイカーがちょうど、彼の首すじから銃を離し、物言わぬ身体を乱暴にカプセルから引きはがした。

ステージ中央近くには、硬い表情のナンバー2がじっと立ち尽くしていた。

舞台下ではすでに、フィンセント反乱軍は警備に完全に制圧されていた。撃たれたものも、息があれば容赦なく縛り上げられている。

しかし、空気は明らかに変わってきていた。

相変わらず身を震わせるかすかな地響きが残っているものの、ねっとりとした重く甘ったるい空気はどこからか冷たい風が吹き込みだした、そんな感じだった。セル会員たちから、だんだんと、とまどいのつぶやき上がり始める。耳のイヤーエイクを押さえて顔をしかめている者も所どころ、ざわめきは少しずつ大きくなる。

舞台裏のドアから走って入ってきた白衣の男が、「アースエイカーさま」大声をあげる。

「システムが不安定になってます！」

群衆の中からいくつか頭が上がった。白衣の男は更に続ける。

「コア抽出作業が止まってしまったのに、ブレインは更にエッセンスを要求、このままではアーティライフは暴走してシステムが破壊されます、生半可に止めてはいけない、と申し上げましたのに」

「『301』を単独で動かせば、問題無い」

アースエイカーがそう言って手もとのコントローラを持ち上げ、それを見た02がはっとしたように目をむいた。

「待て！」

こつそりと忍び寄り、キャットウォークの下に潜んでいたレイジが躍り出た。

「させねえぞ！」

レイジが撃った、その瞬間アースエイカーはスイッチを捻った。ぶうん、とひとときわ激しい地響きが起こる、後から入ってきた白衣が駆け寄ろうとする。

「ダメです！ 今すぐ切つて！」

レイジが引き金をしぼる、アースエイカーの手元からコントローラーが吹っ飛んだ。

カプセルに射し始めた蛍光色の輝きは、みるみるうちに消えていく。

「やったぞ！」快哉をあげたのもつかの間、ドア近くの警備が一斉に彼を狙った、だが

「お前ら何するんだ！」

巨漢がいきなり、手近なところにいた警備に殴りかかった。今までイヤーエイクに支配されていた群衆のうちの一人だった。「なぜ俺たちを撃つ！？」

「何だ」「何があつたの」

急に人びとがざわめき始めた、キャットウォークを途中まで来た白衣が泣きそうな声で言う。

「暴走が始まつてる、イヤーエイクへの制御出力がどんどん落ちていたんです、もうほとんどゼロに」

群衆は、次第に正気づいて周りの様子を把握し始めた。女が腕に子どもを抱いたまま、目の前にうつ伏せに倒れた男に向かって叫んだ。

「パパ！ パパから血が出てる！」

悲鳴にも似た叫びで、パニックが始まった。人びとは警備を押し
のけるように、出口に殺到する。

「爆発する!」「逃げろ!」

レイジがステージに飛び乗った。そして、続いて私も、ミホ、そ
して明日香ちゃんも物陰から飛び出し、ステージへと上った。

私はカプセルにかけ寄る。

「イーリア!」

その時、再び発光が始まった。

一瞬気をとられたスキに、レイジはドア付近にかがみこんでいた
警備員に襲われ、銃を取り落とした。

「レイ!」 駆け寄ろうとしたミホは轟音と一緒に脇にふっ飛ばされ
た。

硝煙の向うに、ルネが笑っていた。

「やっと会えたのに、すぐお別れだったねミホちゃん」

「ルネ……? アナタ」

「次はアンタよ、」ルネの銃口が明日香ちゃんにぴたりと狙いをつ
けている。

「とんだ夏の虫ね、可哀そうなムシケラたち」

そして、おもむろにポケットから小さな箱を出す。アースエイカ
ーが持っていたのと同じ形のコントローラーだった。

イーリアの方をいとおしげにみやる、「でも最後のイベントだけ
は一緒に、見せてあげる」

「止まっただはずじゃ……」

「再起動をかけたの、イーリアの最期はぜひ、この目で見なくちゃ」
ルネのことばに呆然と立ちすくんでいた私の肩を、誰かが抱きすくめた。
つい、悲鳴が漏れる。

いつの間にか忍び寄っていたのは、アースエイカーだった。

「オマエは……この骨格は『ライム』だね」

鎖骨の辺りを撫でまわす。

「やめて！ 離して！」

後ろに足を蹴りだそうとするが、アースエイカーはでっぷりしている割に、身のこなしが軽い、すい、と脚を避ける。

「寝ている間にずいぶんと触らせて頂いたが、本当にいい骨格だ、イーリアも素晴らしい骨格だったが、君も劣らないほどステキだよ、どことなく表情も似ている。どうせならば、もう一つ特製カプセルを用意すればよかった」

身体が凍りつく。アオイさんの血だろうか、赤く染まった指が私のおごを後ろから押さえ、でっぷりした身体がびたり背中に張り付いてくる。

「スピーカーで中の音も拾えるのだ、しかも処理速度は少し送らせてある。だから最後までクリアに、苦悶のうめきや暴れ回る肉体の醸し出す音や、全ての細胞が破壊されて意思が吸い取られる最後のさいごの吐息まで、じっくりと外に伝えることができるんだよ、素敵だろうか？」

「アンタ……狂ってる！」

今やまぶしい光と可聴域をはるかに超える衝撃につつまれ、イーリア、いや、

そあら先輩は

「はあああつ！」

激しく身悶えし、カプセルの中でのけぞった。

「そあら先輩！」

そあらは歯を食いしばっている、しかし、脂汗の中どうにか顔をあげ、前をみた。
まっすぐ前を。

見ていた者は、みな動くことができなかった。スピーカーからはつきりした声が聴こえる。

そあらは語った。

02 そあらは語る

最後に言わせて、ルネ。

私が会員になったばかりの頃、ゲーセンでよく会ったよね、たくさんおごってやったら、懐いてきた。色々辛い話もうち明けてくれた。そこで、セルの話を書かせたの、おとぎばなし。私はルネに見せつけた、彼女が不幸な生い立ちなのを知って、何も失うものがないと言っているのを知っていて、ならばセルに入るという手もある、と。

彼女がどうなるのが、私には直接関係ないと思っていたから。

その後、どんなに彼女が苦しんだのかも、無頓着だった。彼女が不幸になるかどうかなんて、本当に興味がなかった。自分のことしか考えられなかった。

人を不幸にして、自分だけが幸せになる、それでは母親と同じだ、気がついたのが遅かった、ルネがあんなになったのは私のせいもあるのよ。

お母さん。

これだけは聞いて。私、あなたに選ばれて残された時、その理由を聞いた時死んでやろうと思ったわ。

単なる道具として、便利な道具として手元に残したい、まるで八

サミか何かを選ぶようなその言葉に、私は傷ついた。

しかもお兄ちゃんは、自分の見込んだ組織で幹部になるために勉強をさせる、と。どんなに自慢したか、それも悔しかった。男の子だから、広い世界に早く旅立たせているんな経験をさせる、そうして早く一人前の男にするの、アナタは酔ったびにそう言ったわね。

そしてその結果があれ……彼は四年近くもカプセルに封印されて地獄の日々を送っていたのよ、私も知ったのはつい最近だった。ずっと、羨ましいと思っていた兄がどんなにひどい目に遭っていたのか、知らなかったの。同じ高校に転入してきたのはすぐ気づいたけど、養成訓練を受けて、幹部候補生となって私を見張っているんだと思って、ずっと無視してた。

それにお母さん、さつきもお兄ちゃんは、アナタだと判って手が止まったよね。それからお兄ちゃんは私のところに走ってきてくれた。助けようと。無駄だと分かっていたのに。

お母さん、

アナタにはお兄ちゃんの気持ちが解る？ 私の気持ちが理解できる？

一人で死んでいったお父さんの気持ちが、アナタには解っているの？

苦しい、くるしいよ、もう楽になりたい。

みんな愛してる、でも、みんな消してやりたい、ぜんぶ。

大事な人びと、すべて、ずっと残るがいい、私が消える、いいよね？

何も、なにも、

お兄ちゃん、みえなくなつた、

どいっ?

「そあらあああ」

今までじっと佇んでいたナンバー2、いや、そあらの母が、カプセルに向かって走った。

「やめて、やめて殺さないでワタシの娘を！！」

ルネが次に撃ったのは、ナンバー2だった。彼女はキャットウォークから転がり落ちる。

「何をする！」

ひるむアースエイカー、そこにレイジがすかさず警備員に飛びかかって腹に一発、重い拳を叩きこみ、すくい上げるように銃を奪った。レイジは大きく前に飛んで腹ばいのまま、倒れた廣川博士の身体を支えにしてアースエイカーを狙う。

「ぶっ殺す！！」

「やめて！」明日香ちゃんが飛び付いた。「人殺しにならないで！明日香ちゃんが止めた瞬間、ルネは涼しい顔のまま、銃を私たちに向けて一発。

「があっ」

撃たれたのは、私の背後にっていたアースエイカーだった。

彼は大きく開けた口から血を大量に吐いて、それが水っぽい音をたてて床を汚した。私は前に飛び出し、次にルネを止めようと向きを変えた。

「動かないで、シオン」

そう言って、ルネは最後に自分の頭に銃を向けた。

「いいよ、もう、シオン」

「……やめて、ルネ」

ルネはもう聞いていないようだった。

すでに暗くなりつつあるカプセルに向かい、優しい微笑みを浮かべてつぶやいた。

「アナタは私の夢、アナタは私の希望、そして大切なもの」

そあら先輩は今では、ぐったりと前に傾ぎ、視線はちょうど、外に倒れるアオイに向いていた。白い腕をのばし、ガラス越しに兄をかき抱こうとしているようだった。

「やめろお」レイジの叫びもむなしく、ルネは引き金をひいた。

04 ルネは私に向かって 1

パパは、社長さんだったの、家をつくる会社。

パパの声が聞こえてくる。

すごいだろう？ あの家も、あの家もパパの会社で作ったんだ、ルネが大きくなったら必ず、パパがすごい家を設計して、それからタダで建ててやるから、パパはすごい腕の大工さんもたくさん知ってるし、内装の得意な業者も仲よしだ、みんな昔からの友だちなんだ。いいかルネ、大きくなっても友だちは大切にしろよ、困った時には友だちがいつでも、助けてくれる。

パパは仲のいい業者に頼まれて、借金の連帯保証人になった。

高校からの友人なんだ、コイツが信用できなくて誰ができる？

借金をした人は逃げた。保証人になったパパも払えないくらい金額。担保にすべて取られ、私たちは住んでいた家も処分して、小さな集合住宅に移った。

前の家はパパの自信作だった、よくそう言っていた、本当に、心地よい家だった、ハウスというより、ホームそのもの。そこを出て

行く時に私は何度も何度もふり向いた。死ぬまで忘れないようにしよう、と家を目に焼き付けた。

パパは派遣社員となって、慣れない仕事を一杯やった、そのうちに、お酒が増えた、暮らしに困って借金をした、昔友だちだった人たちは、最初のうちは何かと気にかけてくれたけど、そのうち近寄らなくなってきた。

パパは最後に、血を吐いて死んだ。狭い土間に崩れるようにして最初は怖かったから近づけなかったけど、動かなくなったのでやっと近くに寄ってみたら、もう、息をしていなかった。

ママは泣きながら笑った、たいへん、保険も出ないわ。

昔ママは玉子の殻で芸術作品みたいなのをよく作っていた、エッグアートというのよ、指先まで神経を使うの、繊細な技よ、アナタもいつかやってみたい？ そう言っていた。

でもパパが死んでからは、ずっと笑っていた、笑って、笑って……最初のうちはご飯は何とか作っていた、でも、玉子を割って焼く時に殻まで入っていた。ママ、殻が入ってる、私がそういうとママは笑ってから私をぶった。

ママが病院に入ってから、親戚をあちこち回った。親切な人もいたけど、事情があつてすぐ出て行かざるを得なくなつたし、長くいられそうな家は、誰も彼もサイテイなヤツばかりだった。一番サイテイだったのは義理の叔父。家賃はカラダで払ってくれよ、そいつはそう言つて毎晩代償を求めた。バラしたら殺す、あと、妊娠したら即殺すからな、そうだ、ガキのできない方法を教えてやる、そう言つて笑った。

その家を飛び出して町をうろつき回るようになった頃、そあらに

会った。

そあらはお金をいっぱい持っていた。まず、ゲーセンでおごってくれた。他にも夕飯もおごってくれたし、色んな面白い話を教えてくれた。

他の人たちには案外そっけないのに、私とふたりきりになるとっても愉快な人になった。お姉ちゃんがいたらこんな感じかな？
っていつも思った。

そばにいとるとなんだかほんわか暖かくなった。

親戚の家に帰れないと言った時も、部屋にも置いてくれた。

私が代償を払う、と言ったらそれは愛がないとできないの、もしかして辛いことがあった？ と静かに聞いてくれた。

私はすべてを告白し、泣いた。そあらは抱きしめてくれた。

その後私たちは愛し合った。束の間の気休めにしかならない、お互い思っていたけど、慰め合うにはちょうどよかった。

セルの話聞いた時には、救われたと思った。スマホからようやく登録画面に入り、大切なものところに、何て書こうかずっと迷った、思い出、かな？ やっぱり亡くなったパパかな？ まだ入院中のママ？ 迷って迷って、結局ひとつもないと気づいた、大切なものは。

何も記入せずに、そのまま登録完了。

そう、『特になし』って書いたら無効だったの？ あそこは何も記入せず、ブランクでいいのよ。まあ、後が大変だけだね。

ポイントは初回特典の一〇ポイントのみ。あっという間に使いきった。

ポイントがゼロになった時、セル本部から電話がきた。

もう後がありません、このままでは会員権消失します、でもルネさんまだお若いし、一度サテライトに来てみませんか？ いい条件で更に特典が受けられますよ。

条件は簡単、新規会員の勧誘だった。

05 ルネは私に向かって 2

新しく入学した高校、もちろんセルのおかげで入れた、入学金諸経費免除、奨学金まで。アパートも手配してもらえた。

ただ、条件があった。

一年で最低一名の新規会員を勧誘すること、と。

詩音の時には、ヒントになるメモをこっそり渡した。詩音は結局会員になったけどもメモが勧誘と認められず、ポイントにならなかった。

そあらにジャマされたんだ、と思った。

詩音の告白を親身に聞いてやって、こんどは親友のミホからも話を聞いてやった。弱っているミホをセルにひきいれるのは簡単だった、これは一〇〇ポイントもらえた。

詩音が消えてしまった時も、ミホの告白をじっくりと聞いた。詩音を殺そうとしたことを涙ながらに話してくれた。

それからは私がミホの一番の親友となった……親友としてふるまったの。

そあらは学校を辞めてしまっていたし、私はもはやするアテはない。ミホとの親友ゴッコが唯一のなぐさめ、いえ、それを本気にしたい自分がどこかにいた。このまま普通に仲よく過ごす、ありきたりの高校生活。もうセルにあまり関わらずに普通に暮らしてみよう……

そんな幻想をある日砕くようなことばを、ミホから聞かされた。

「演劇部の先輩が……アオイさんがつきあってほしい、って」

憧れの先輩がこちらを向いてくれた、頬をそめてミホが言った。

よかったね、素敵、私はそういうしかなかった。アオイについてはそあらから聞いていた。セル幹部候補らしい、って。でもセルからそんな話は聞いたことはなかった。

気になって調べてみると、アオイはセルでは幹部候補でも何でもなく、ただの『提供品』だった。しかも『処分済み』として抹消されていた。

その後は、セルから脱退した科学者が巧妙に偽装工作を施して、かくまっていた所まで調べがかった。

もちろんセル本部にも報告したけど、本部は彼らを雑魚扱いしていて、あまり警戒していなかった。

それより近いうちに何か大きなことが起きる、その前に対策をとればかりやっきたから。

先に廣川たちを殺しておけば、こんな騒ぎにはならなかったのに。

私は独自に、廣川とアオイを追った。ここで興信所や便利屋とかに、かなりポイントを使ったわ。

そのおかげで、死んだと思っていた詩音をも探し当てることのできた。もうポイントはほとんど残っていなかった。でも詩音とまた会えた喜びは何ものにも換えがたかった。

彼女は何となく、そあらに雰囲気似ていた、妹と言ってもおかしくないくらい。ずっと気にはなっていた。

でも、私が彼女を抱きしめようとした時、頬を叩かれ、そしての

のしられた、裏切り者、と。

詩音にすっかり嫌われた、絶望のあまり、私は彼女を抽出材料としてラボスタッフに『寄付』した。今度こそポイントがついた。これも一〇〇ポイント。

そあらにはセル本部スタッフと騙って、抽出日の前日にラボまで連れてこさせた。ここでもずいぶん、ポイントサービスを利用してね。

どうしてイヤーエイカーなのに、会員以外にセルの話ができたかって？

それは私が特別に、『勧誘員』として登録されたから、サテライトで。

火事を起こしたのは、廣川たちフィンセント・クラブ。詩音がクラブ員として利用できると思って、後にひけないようにしたのよ。

レイジくんはどうして助かったか、って？

前にお弁当の時によく言ってたのよね、年子の弟がナマイキで、って。

廣川たちは詩音の突然の事態にうまく乗ってやろうと慌てふためいて準備していた、弟の話まで伝わってなかったようね。

少しだけその時、思ったのよ。少しだけ……詩音、友だちだもん、私がお役にたてばいいかな、そうして自宅に電話した、偶然弟のレイジくんがつかまった、とっさに嘘ついて呼び出した、そう、偶然よ……

ずっと一方的に話しててごめんね、時間がないと思ったから。でももう行かなきゃ。

ところで、誰？　ずっと聞いてくれてたのは、
見えてなくてごめんね。

詩音とミホと、無事かしら？

もし会ったら、伝えてくれる？

ごめんね、と。そして

またどこかで、大おべんと大会やる時には、そばに

最後のさいごに、ことばは雪の結晶のように融けて消えていった。

私は、抱いていたルネの身体をそっと床に降ろす。

これ以上血が出ないように押さえていた手も放した。

ルネを引きずって片隅に避けているうちに、正気づいた群衆たちが警備を呑み込み、次々と制圧していったようだ。

あたりにはつんと鼻をつくような焦げくさい煙がうつすらと立ち込め、時おり、何か巨大なものが崩れゆく音が遠雷のごとく低く轟いていた。

一緒に来た連れを探す叫びや、痛みに上げる悲鳴が薄暗がりの中飛び交っている。

何人もが110番や119番通報したらしく、かすかにサイレンの音が聞こえ始めた。

少し離れたところからかすかなうめき声が聞こえる。ミホだ。

助けなきや。

涙をふき、私は立ち上がった、生きている者に向かって。

桜の花が咲いたら、そっぴいながらずつと雨だった。

ようやく晴れた日曜日、ママは

「寝ぼすけ！ 起きなさい」

腕まくりしたまま私の布団を引きはがす。

「お弁当つくるの、手伝うんじゃないの？」

「せっかくの日曜だよお、寝かせてよ」

私はおつじょうぎわが悪い。育ち盛りの十二歳だよ、寝る子は育つ、って言うじゃん？

「もうおばさんたちはお家を出たって、パパも駅まで迎えに行ったし。は・や・く！」

「どうしてみんな気が早いのー」

ブツブツ言いながらも、ようやく起きた。

久しぶりの青空。うーんと伸びをする。

「ママ、私おむすび作るよ」

「おいなりさん作ったわよお、たくさん」でも、とママの目が笑う。

「育ち盛りさんは、お米をたくさん食べたいんだ？ まあいいわ作ってくれても」

「お米ばかりじゃいやだよ」慌てて否定する。

「おかずが全然ないじゃん！ 娘が炭水化物ばかり食べて太ってもいいの？」

「だいじょうぶ」ママはちらつと外を見た。

「おばちゃまがお惣菜作ってきてくれる、って。で、ミホちゃんが飲み物とデザート」

ほら、帰ってきた、とママは慌てて手を拭いた。

パパが帰ってきた。

「早く行くぞ！ 今、土手通ってきたけど、もう場所取りも始まってたし！」

「レイ、相変わらずセツカチよねえ」

いつ見てもほんわかしていて素敵な詩音おばちゃまが、玄関から入ってきてママに声をかけた。

「明日香、ひさしぶり。それに」

私をふわりと抱きとめる。「背が伸びたわあ、見違えちゃうわ」ちよつと照れくさくなって、バッグをふたつ持って外に出る。

車の中でミホさんが待っていた。

ミホさんはママとおばちゃまのお友だち。ダイナミックにかつ、と笑って私に親指を立てる、私もお返しにサム・アップ。

「じゃあ、レッツゴーだぜ！」

パパは赤いパーカーひるがえし、車に小走り。

おばちゃまとミホさんが、顔を見合わせ、同時にママを見る。

「相変わらずよね、おサル！」ミホさんが肩をすくめて言った。

「行くぞ！ 弁当持ったか？ 何だよ誰の荷物だよこれ、あ、長靴なんて何で持って来たんだオレ？」

ウキヤウキヤ叫んでいるパパの方に、三人して目をやって、また顔を見合わせてふふ、と笑った。

清川の土手と河川公園はふだんの時も市民の憩いの場所としてたくさんの方が訪れるのだが、この時期は桜の名所としても人気がある。

最初は車を停めるのに苦労した。

ママと詩音おばちゃまが先に降りて、どうにか駐車場の奥にスペースをみつけてきた。

車椅子専用のところが空いてなくて、通常スペースに停めるしかなかったんだけど、

「だいじょうぶ、ミポの一人や二人、オレが担ぐから」
パパがそう言って、どんと胸をたたいた。

車椅子をママが引つ張り出し、ミホさんをパパがおんぶして、私とおばちゃまがその分荷物を持って、花の中にいざ出陣！

「いつもすまないねえ、おとつあん」

ミホさんがふざけてそんなことを言ってる。

「そいつあいわねえ約束だよ、越後屋さんよ」

パパもそんなふうに答えている。まあ、いつものことだ。

平らになっっていて、ちょうど桜並木が見渡せる場所が無事にみつかった。

さっそくみんなでおべんとうを拡げる。

詩音おばちゃまが開けた重箱をみて、「わああっ」私は思わず大

歓声。

「玉子焼きがいっぱい！」

「ごめんね、唐揚げが少なくて」

「ううん」さっそくつまもつとして、ママに手をはたかれた。痛い

なあ。

「おばちゃまの玉子焼き、だーいすき！」

おばちゃまと、ミホさんの目が心なしにかかげた。でもすぐに、おばちゃまが弾んだ声で言う。

「今日は特別にたくさん、作ったから」

ミホさんもぱん、と手をはたいていつもの一言。

「さーて、大おべんと大会でーす」

もう、そうなたら食欲は止まらないからね、私。

「かんぱーい！」大人たちの声も耳に入らないくらい。もう、お弁当に夢中だから。

公園の奥の方は、大木とも言っていていくらいの桜がまるでピンク色の迷宮のように重なり合っている、樹齡がかなりいつているらしい。

一方、私たちがお弁当を広げている土手沿いは、木もまだあまり大きくなくて、すんなりと控えめに並んでいる。

十八年前、この辺りも大震災の被害に遭った。メチャメチャに破壊されたこの土手も、震災後少しずつ復興していったんだって。桜もそれから植えられたから、まだ若い。

もちろん私は生まれていなかったから全然知らないけど、パパもママも、おばちゃまもミホさんもそれぞれ、震災の話になると急に真面目な表情になる。

「その少し前に、おおまかに予知されていたにも関わらず」

おばちゃまが言う。

「規模や震源も予め特定できたはずなのに、結局そのデータは公表

できなかったのよ」

「それホント？」

パパまで辛そうに下を向いている。

ママは、パパとおばちゃんを黙って見つめていた。ミホさんが言った。

「うん……間違った考えの人たちがいてね、昔。

自分たちが助かるために、そして、国の偉い人たちに地震の予知データを売ろうとして、他の人を犠牲にしようとしたの。いつどこで起こるか、というデータを取るために、たくさんの人を殺した」

「えっ」

何だか矛盾してない？

みんなが恐ろしいと思う地震を避けようとするために、たくさん
コロシタ？

「その、悪い人たちはなぜ他の人を殺したりしたの？ その後どう
なったの？」

「計画は途中でつぶれた」

パパがそんな声を出すのを、あまり聞いたことがなかった。いつ
もふざけてばかりなのに、本当に、辛そうな声。

「だから地震については、はっきり分らないままだった……実際に
三年後にそれが起こるまではね」

ピンク色の風がさわさわと吹き寄せる。何となく、花が香った気
がした。

ミホさんが言った。

「でもね、分からない事でも、起こってしまったことでもとにかく
私たちは受け入れて、そこから一番いいと思うように、行動しなけ
ればならないの」

「そうだよね」

おばちゃまが、ミホさんの手を上から握る。

「地震の時もそうだったけど、あの時も……最善を尽くすしか、な
かった。

その結果はどうであれ」

「あの時？」

私はおばちゃまの方に目を向けた。

ずっとひっかかっていたことがあったんだ。

ふだんでも時々大人の話にでてくる『あれ』とか呼ばれる『何か』。

その話題がちらつとでも出ると、ちょうど今みたいな感じになる。表情がかける、というのだろうか、パパもママも、詩音おばちゃんもミホさんも。

でも私には何も説明してくれなかった、今まで一度も。

「ねえ」

私は勇気を出してみんなの顔を順番に見てから言った。

「お願い、その話をちゃんと聞かせてよ。それってパパやママにも、おばちゃんにも関係あるんでしょう？ ミホさんにも」

「そうね」

おばちゃんまはまっすぐ、私の目をみている。

「わかった、」それからママとミホさんに目をやった。

「明日香もミホも、所どころ助けてくれる？」

ミホさんは黙ってうなずく。ママは大きくため息をついてから

「お願い」

と言った。

ミホさんも軽くため息をついてから

「詩音が話す前に、私からもひとついい？」

いつになく静かな声だった。そして私の名を呼ぶ。

いい、ルネちゃん。

あなたの大切なものは何か、考えたことはある？
それが何でもいい、大きなものでも、小さなものでも。そして、
生きている相手でもただの物でも。

それが本当に大切なものならば、あなたは、それをずっと守って
ね。大事に。

手放そうなんて、思っただけはダメ。

絶対に、他の人と『しあわせの取り引き』をしてはいけないの。
しあわせというのは、絶対にお金でも買えない、ポイントにも換
えられない。別の素敵なものを欲しいからといって、人生の手段と
して用いないでね。

ただし、もしあなたの前に不幸せな人がいて、その人に心から何
かしてあげたいと思ったなら、その時にはあなたのしあわせを、ちょ
っぴりでいいから分けてちょうだい。

取り引きではなく、ささやかな贈り物として。

言われたことはまだよく分らなかったけど、ミホさんの言葉は胸
に刻んだ。

桜の花びらがひとひら、私たちのまん中に舞い落ちる。

それを目で追ってから、その後一度空を見上げて

おばちゃまは、いえ、詩音は話し始めた。

「まだ早いと思っていただけ、ルネ。

今から語って聞かせること、全部ほんとうのことだよ。

耳の痛い話になるかもね。でもちゃんと聴いて、最後まで」

私はこくりとうなずいた。

詩音が唐突に訊ねた。

「とじろでぢ。」

『絞る』とじろ、見たことある？。」「

すっかり日が傾いて、人もまばらになりだした頃、その話は終わった。

長いながい物語……私は気がついたら息をつめていたようだ。

余韻の響き渡るその川岸で、私はもしかしたら涙を流していたのだろうか。

哀しかった、辛かった、怖かった、そして温かかった。

ママがぎゅうつと抱きしめてくれたんだ。

「もしも」

その腕の中で私はようやく声を出す。

「もしも私もそんな宣伝をたまたま見かけてさ……いいな、なんて思っちゃったらもしかしたら……私だつて」

「人は誰でも間違いをするものなの、ルネ」

ママが言つて、また腕に力をこめた。

「間違いをどう直していけるのか、それでどう前につなげていけるのか。私たちはずっとずっとそうして生きていくしかないと思う、支え合つて」

パパの声が、いつもより優しく頭の上から聞こえた。

「じゃあ帰ろつか……うちに」

家路につく私たちのうしろで暖かい風が巻き起こり、桜の花びら

は群をなして一斉に吹き流れていった。

私たちはしばらく足をとめて、その風を見送る。

ミホさんと目が合う。

おばちやまの話で初めて知った。ミホさんが下半身不自由になつたのは、銃で撃たれた後遺症だったんだって。

でも私はまだこうして生きている、他にもいろいろ幸せなこといっぱいよお、そうミホさんは笑ったけど。

私の視線に気づいて、ミホさんは顔いっぱい笑ってみせた、いつもみたいに。

私も自然と笑顔がこぼれる。そして、すぐ脇にいた詩音の手を握った。

詩音の手も柔らかく、でも強い力で私の手を握り返す。

ピンク色が夕闇の青に染まる黄昏時、私たちは確かに、微笑んでいた。

散る時がきたのだろう、そして、いったん終わる時が。

私たちのこの物語も。

新しい時代の物語を始めるために。

<イヤーエイカーズ・セル

了>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<https://ncode.syosetu.com/n1475cq/>

イヤーエイカーズ・セル

2018年3月14日17時00分発行